

牛奥遺跡調査報告書

昭和59年3月

山梨県教育委員会

序 文

本報告は、農林省の笛吹川沿岸の土地改良事業計画による、左岸幹線水管埋設工事にさきだち、甲府盆地の東部にあたる、塩山市牛奥地内の遺跡を、昭和53年10月から12月にかけて、発掘調査した牛奥遺跡の調査報告書であります。

この牛奥遺跡は、縄文中期から後期にかけての土壙が約100基発見され、縄文時代の墓制を知るうえに貴重な資料が得られました。

牛奥遺跡が所在する塩山市地域は、昭和51年に発掘調査した安道寺遺跡や西田遺跡など、縄文時代の遺跡が数多く分布している地域であります。本報告書が、郷土山梨の峡東地域における歴史を知る上での貴重な資料となることを期待しております。

なお、発掘調査にあたり、ご協力いただいた関係機関各位、並びに直接調査に参加くださった方々に心から感謝申し上げます。

1984年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

凡　　例

1. 本書は昭和53年10月28日～12月10日にかけて実施した農林省笛吹川土地改良事業計画、左岸幹線水管理設工事に伴う牛廻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、調査によって検出された遺構、遺物を多く図示することに努め、文章による記述はそれを補足することに重点をおいた。
3. 発掘調査は、関東農政局笛吹川農業水利事業所の依頼を受けて、山梨県教育委員会・文化課が調査主体者となり、小林広和、里村晃一が担当し実施した。
4. 発掘調査には下記の人々が従事した。

菱山かつよ、金井安子、小林和夫、菊地健一、高橋央修、内藤和久、細田俊哉、塙原安武、伊庭章一、中山誠二、桜井節子、遠藤和子、香川洋子、岡村和子、山本由美子、望月由子。
以上調査補助員。
5. 整理作業（水洗、注記、土器実測図、土器拓本、トレース、写真、挿表、図版作成、浄書、校正）には小林、里村以外に土屋明美、後藤幸江、宮川東、小林美津代、飯寄貞子、小林弘子、沼田由起子、雨宮正、雨宮昭子、秋田真子ほかの協力を得た。
6. 本報告書の関連遺物、図面類は県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 挿図第1図に使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図（塙山）を使用した。
8. 遺跡実測図のうち、第4図～5図は40分の1、第6～29図は50分の1である。
遺物実測図・第34～37図の土器実測図は8分の1、第38～61図の土器拓本図は4分の1である。
9. 本書の編集、執筆は小林広和、里村晃一の両名が当った。

目 次

1 はじめに	1
2 牛奥遺跡の位置と地理的環境	2
3 遺跡の概要	5
(1) 遺構	5
土壙	5
配石遺構	28
住居址	29
(2) 出土遺物	61
4 土壙群の検討	95
時期	95
アラシ	100
主輪方向	101
深さ	101
壙壁	102
底面	102
ビット	103
集石	103
重複	104
出土遺物	105
土壙群の性格	106
5 まとめ	108

図 版 目 次

- | | |
|-----------------|--------------------------------|
| 第1図 牛奥遺跡付近地形図 | 第32図 土壙群切合関係実測図 |
| 第2図 遺跡地形図 | 第33図 土壙群切合関係実測図 |
| 第3図 遺跡全体図 | 第34図 土器実測図 |
| 第4図 配石遺構 その1 | 第35図 土器実測図 |
| 第5図 配石遺構 その2 | 第36図 土器実測図 |
| 第6図 1~4号土壤 | 第37図 土器展開図 |
| 第7図 5~8号土壤 | 第38図 土壙内出土土器 1~3号土器拓影 |
| 第8図 9~12号土壤 | 第39図 土壙内出土土器 3~8号土器拓影 |
| 第9図 13~16号土壤 | 第40図 土壙内出土土器 8~12号土器拓影 |
| 第10図 17~20号土壤 | 第41図 土壙内出土土器 12~18号土器拓影 |
| 第11図 21~24号土壤 | 第42図 土壙内出土土器 18~20号土器拓影 |
| 第12図 25~28号土壤 | 第43図 土壙内出土土器 21~23号土器拓影 |
| 第13図 29~32号土壤 | 第44図 土壙内出土土器 23~25号土器拓影 |
| 第14図 33~36号土壤 | 第45図 土壙内出土土器 25~32号土器拓影 |
| 第15図 37~40号土壤 | 第46図 土壙内出土土器 32~39号土器拓影 |
| 第16図 41~44号土壤 | 第47図 土壙内出土土器 39~41号土器拓影 |
| 第17図 45~48号土壤 | 第48図 土壙内出土土器 43~44号土器拓影 |
| 第18図 49~52号土壤 | 第49図 土壙内出土土器 46~50号土器拓影 |
| 第19図 53~56号土壤 | 第50図 土壙内出土土器 51~57号土器拓影 |
| 第20図 57~61号土壤 | 第51図 土壙内出土土器 58~62号土器拓影 |
| 第21図 62~65号土壤 | 第52図 土壙内出土土器 67~72号土器拓影 |
| 第22図 66~70号土壤 | 第53図 土壙内出土土器 72~78号土器拓影 |
| 第23図 71~74号土壤 | 第54図 土壙内出土土器 79~82号土器拓影 |
| 第24図 75~78号土壤 | 第55図 土壙内出土土器 82~84号土器拓影 |
| 第25図 79~82号土壤 | 第56図 土壙内出土土器 84~87号土器拓影 |
| 第26図 83~86号土壤 | 第57図 土壙内出土土器 87~88号土器拓影 |
| 第27図 87~90号土壤 | 第58図 土壙内出土土器 88号土器拓影
配石出土土器 |
| 第28図 91~94号土壤 | |
| 第29図 第1号住居址 | 第59図 配石出土土器 |
| 第30図 土壙群切合関係実測図 | 第60図 配石出土土器 |
| 第31図 土壙群切合関係実測図 | 第61図 1号住居址出土土器 |

写真図版目次

- 図版1 遺跡全影
- 図版2 土壌群 第5号土壌
- 図版3 第7号土壌(埋甕)
- 図版4 第10号土壌
- 図版5 第72・81・82号土壌
- 図版6 第84号土壌
- 図版7 第3・29号土壌
- 図版8 第41・58号土壌
- 図版9 第35・45号土壌
- 図版10 第75・47号土壌
- 図版11 第53・91号土壌
- 図版12 第30・22号土壌
- 図版13 第68・85号土壌
- 図版14 1号住居址
- 図版15 配石
- 図版16 第3号出土(雨垂れ石)、グリッド出土(黒曜石破片)
- 図版17 グリッド出土石器類
- 図版18 牛廐遺跡出土土器
- 図版19 牛廐遺跡出土土器
- 図版20 牛廐遺跡出土土器

1. はじめに

本遺跡は、国営笛吹川土地改良事業管水路線発表後に、県教育委員会・文化課が実施した路線内分布調査の結果、縄文中期後半から縄文後期初頭の遺跡と確認されたものである。

その後、本遺跡の重要性に鑑み、関東農政局笛吹川水利事業所と県教育委員会・文化課との協議によって工事前の発掘調査（対象面積1000m²）が計画された。

以上の結果を得て山梨県教育委員会・文化課が調査主体者となり、小林広和、里村晃一両名が調査担当者として、昭和53年10月28日から12月10日にかけて実施した。

***** 発 据 日 誌 *****

- | | | |
|-------|---|--|
| 10・28 | トレント設定、表土排除開始。 | ページン図作成。62・63・64・65・68・72号確認、掘り下げ。 |
| 10・29 | 第1・2号土壤確認、掘り下げ開始。 | |
| 11・1 | 第1・2号土壤・平面図・セクション図・エレベーション図作成。第3・4・5・6・7・8・9・10号の確認、掘り下げ開始。写真撮影。 | 49号平面・エレベーション図作成。写真撮影。 |
| 11・3 | 第3号・セクション図作成。土層・写真撮影。 | 32・48・60号平面、エレベーション図作成。 |
| 11・4 | 第3号・平面・エレベーション図・第4号平面・エレベーション図作成。 | 41・50・51・52・53・62・63・64・65・68・72号平面・エレベーション図作成。70・76・78・79・39号確認、掘り下げ。 |
| 11・5 | 第5号平面・エレベーション図作成。19号確認、掘り下げ。 | 70号平面・エレベーション図作成。56号確認、掘り下げ。写真撮影。 |
| 11・7 | 11・12・15・22号確認、掘り下げ。 | 71・78号平面・エレベーション図作成。66・69・75・83・85号確認、掘り下げ。 |
| 11・11 | 6・7・8・9・10号平面・エレベーション図作成。 | 79号平面・エレベーション図作成。 |
| 11・12 | 11・12・15・22号平面・エレベーション図作成。17・13・20・21・23・24・25・26・27・28号確認、掘り下げ。 | 39・56号平面・エレベーション図作成。43・47・67・74・86・91号、第1号住居址確認、掘り下げ。 |
| 11・13 | 19号・平面図・エレベーション図作成、写真撮影。 | 66・69・75・83・85号平面・エレベーション図作成。43・47・67・74・86・89・14号確認、掘り下げ。配石遺構確認、掘り下げ。 |
| 11・14 | 24号・平面図・エレベーション図作成。 | 43・47・67・74・86・91号平面・エレベーション図作成。77・80号確認、掘り下げ。 |
| 11・15 | 17・21・23号平面・エレベーション図作成。29・30・31・33・34・36・37・38・40・41・45・46・49・54・55・48・57・60号確認、掘り下げ。 | 89号平面・エレベーション図作成。71・73・90号確認、掘り下げ。 |
| 11・16 | 25号・平面・エレベーション図作成。 | 43・47・67・74・86号平面図・エレベーション図作成。87・88号確認、掘り下げ。 |
| 11・17 | 26・27・28号平面・エレベーション図作成。 | 14・71・77・80・87・88・90号平面・エレベーション図作成。84・92・93・94号確認、掘り下げ。 |
| 11・18 | 30・31・35号平面・エレベーション図作成。写真撮影。 | 81・82号確認、掘り下げ。第1号住居址、配石遺構、平面図完了。写真撮影。 |
| 11・19 | 29・33・34・36号平面・エレベーション図作成。 | 84・92・93・94号平面図・エレベーション図作成。第1号住居址・エレベーション図・配石遺構、エレベーション図作成。 |
| 11・20 | 37・38・44号平面・エレベーション図作成。42・50・51・52・53号確認、掘り下げ。 | 12・10 作業終了、後かたづけ。写真撮影。 |
| 11・21 | 44号平面・エレベーション図作成。 | |
| 11・23 | 40・41・45・46・54・55・49号平面・エレベーション図作成。 | |

2. 牛奥遺跡の位置と地理的環境

山梨県は、本州中部山岳地帯に位置する。四方を山地に囲まれ、北部・東部は関東山地に属し、その南半は御坂・道志にあたる。西部地域には赤石山脈が南北に連なり、中央には甲府盆地がある。又これを中心八ヶ岳・黒富士・富士山などの火山地域が両端を占有する格好となっている。河川は富士川水系・桂川水系・多摩川水系に分かれる。特に盆地縁辺部に源を発して富士川に流れこむ支流、盆地を南北に流れる富士川の水系では、県内の比較的平坦地にあり、面積、規模も大きいため、多くの遺跡群が集中する。

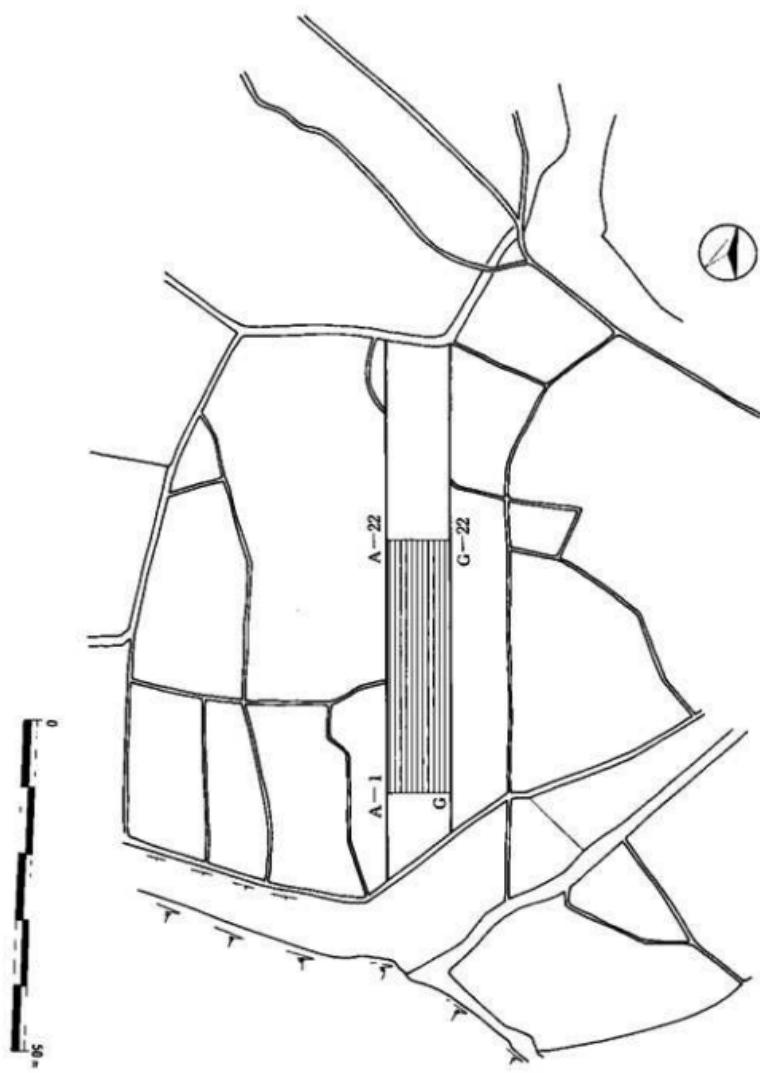
北部上流域釜無川東岸地域では、八ヶ岳より伸びる南向の日当りの良い洪積台地上に、縄文後、晩期の大配石遺構と住居址群とがセットで確認された金生遺跡をはじめ、その他縄文前期・中期遺跡群が占地する。県東北部では、牛奥遺跡の存在する縄文中期の勝坂期を中心とした重郎原遺跡、安道寺遺跡の集落が存在する。又盆地東部では、甲府盆地を一望する地域に駅迎堂遺跡が占地しており、中央道建設に伴う発掘調査の結果、縄文中期の大集落として確認された。さらにそれに続く盆地南半部の笛吹川左岸には曾根丘陵が発達しており、その縁辺上には、上の平遺跡群をはじめとする、旧石器時代・縄文・弥生・古墳時代の集落が群集する。以上これら富士川水系遺跡群は県内の遺跡の大半を占めている。

牛奥遺跡が所在する塙山市は、甲府盆地東部地区を占め東は勝沼町と接する。遺跡は塙山市牛奥1,495に位置し、恩若峯より張り出した南斜面の洪積台地、標高450mの上に乗っている。又遺跡南方には富士山、西方には甲府盆地が一望できる視界の良い地域を占地しており、源次郎岳1,476mに源を発する斐櫛川の上流左岸沿いに存在する。

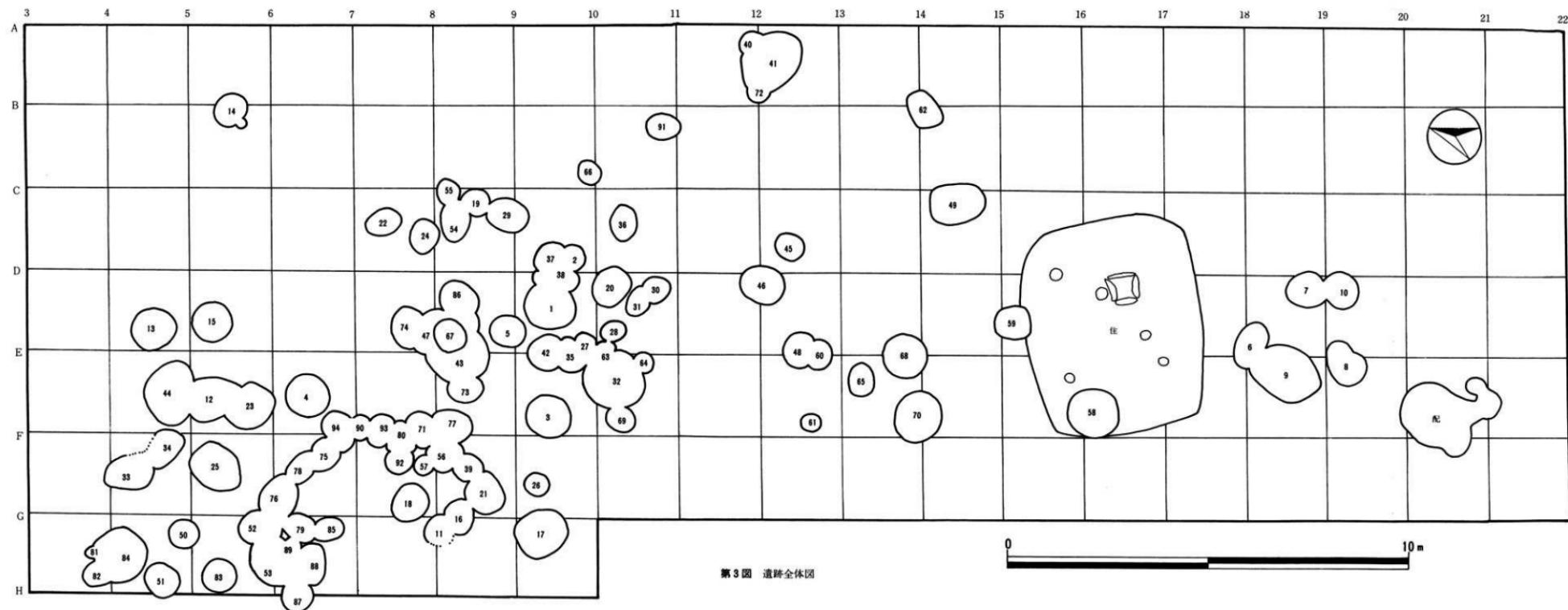
斐櫛川は大菩薩嶺の山系から発する重川と東後屋敷で合流して、この付近一帯の氾濫原を形成している。牛奥遺跡の周辺では、発掘区より西南に伸びる台地上に、縄文中期破片が広範囲に採集されており、遺跡の広がりが予想される。斐櫛川では牛奥遺跡以外は、遺跡の確認はなされていない。塙山地域の遺跡の集中区は、重川上流・その支流佐野川に見られる。これら遺跡群は小倉山・源次郎岳より張り出した南向の台地上に占地している。そのうちの安道寺遺跡は、本遺跡と同一路線内によって調査されたが、縄文中期初頭から末期にかけての住居址群が発見され、その密集度・地形上からも大集落が想定された。その他、藤内から井戸尻期にかけての、重郎原・北原・柳田遺跡らが知られている。第二の集中区は重川中流とその支流塙川に認められる。町田遺跡では曾利期を中心に藤内期の住居が検出されており、又西田遺跡では、五領期の方形周溝墓・住居址群がセットで検出されている。又藤内期（新）の土壙1基が検出されており、大形土器が破損されて検出され、周辺における縄文集落が予知された。



第1図 牛奥遺跡付近・地形図（堺山：25000分1）



第2図 遺跡地形図



第3図 遺跡全体図

3 遺 跡 の 概 要

(1) 遺 構

今回の調査で発見した遺構は、土壙94基、住居址1軒、配石遺構1基である。土壙94基のうちの大半は重複関係が著しく、時間的な制約、天候等とともに調査の進展を悩ましたが、一応我々の目的とした全遺物の記録化の80%程度は記録に残すことが出来たと思う。以下に調査の概要を記す。

第1号土壙(第6図)

調査区の中央部、D-9・D-10・E-10・E-9に位置する。確認面は南北1.28m・東西1.21mを計り、北側に幾分突出し五角形状を呈する。底面は東西に拡がる梢円形で、底面は平坦である。確認面よりの深さ0.57mで、墻壁は北部を除いて急傾斜をなす。東側の墻壁部が38号を切っているため、この部分は不明確である。

覆土は底面近くにロームブロックを多く含む黄褐色土が認められ、上部は黒色系の土層を主に堆積している。この黒色土中に人頭大～拳大の礫が4～5個残存し、下部に曾利Ⅳ式の口縁部を欠損した完形に近い土器が底部を下に斜位に遺存し、その他の遺物は井戸尻・曾利Ⅲ～Ⅳ式土器の少破片が少量出土している。

曾利Ⅳ式の完形品が土壙とともに機能したとすれば、他の破片は混入品とされ、本址は曾利Ⅳ期に構築されたことになる。

第2号土壙(第6図)

調査区の中央部、C-9・C-10・D-10・D-9に位置する。確認面は37・38号との重複で南半部に限定される。短径0.715mで長径0.8m前後と推定される梢円形のプランである。深さは最深部で0.39m、墻壁寄りで0.3mを計る。底面は中央部で低くなるが、一様で凹凸は少ない。墻壁の上部は直立し、底面近くで一段傾斜する。本土壙は、北半部を37号、西側を38号の覆土を切っているため、この部分の墻壁の検出は不可能であった。

覆土中には拳大の礫が数個浮いて遺存し、遺物は曾利Ⅲ・堀之内式土器の破片が出土しているが、土壙中位より前者が、上位より確認面にかけて後者が検出されることから、本址は曾利Ⅲ期の所産と考えられる。また、37・38号は两者とも遺物が少なく、時期決定ができず、切り合いによる時期の限定はできない。

第3号土壙(第6図)

調査区中央部西寄り、E-9・E-10・F-10・F-9に位置する。確認面は南北に1.09m

で、東西に1.02mの円形プランを呈する。底面は北側に若干深くなるが、全体に平坦で、深さ0.69mを計る。墻壁は直立し、特に北壁は垂直に近い。

覆土は墻壁側にロームブロックを多く含む褐色土が堆積し、中央部は底面近くまで黒色土が落ち込んでいる。土壌の北半部は人頭大の礫をはじめとする集石が認められ、レベルを異にするが、隙間なく配置されている。特に底面に近い部分は扁平な礫が水平に位置するようである。

集石内部より曾利Ⅱ式の大形の口縁部破片が出土し、土壌上部は曾利Ⅱ～Ⅳ式の小破片が少量検出できた。後者は混入品と考えられるため、本址は曾利Ⅱ期の構築と推定されよう。また、本址は重複関係ではなく周囲の土壌とは1mほど離れて単独で存在する。

第4号土壌（第6図）

調査区北部の、E-6・E-7・F-7・F-6に位置する。確認面は西側に傾斜し、東西1.11m・南北1.09mの円形プランを呈する。底面は確認面とは異なり水平で平坦面を呈し、プランと同様に長軸が東西方向に拡がる。墻壁は全体に傾斜が緩く、特に西側は45度前後となだらかである。

土壌内部には拳大の礫が3個、いずれも土壌の上部に浮いて遺存した。遺物は曾利Ⅳ式の小破片が少量であったが、底面近くで検出されることから、本址の構築は曾利Ⅳ期の可能性が強い。

また、本址は重複関係を持たず、その点でも時期を限定できない。単独で存在するが、南西部は29号と至近距離にあり、北東部は23号と近接している。

第5号土壌（第7図）

調査区中央部、D-9・E-9ライン上を中心に位置する。プランは確認面で、南北方向で0.94m・東西方向の最大幅は南寄りで0.75mの卵形を呈する。墻壁は上部では直立するが、途中から傾斜が緩くなり、底面は平坦面をなさず、東西方向に細長い凹面状を呈する。底面の東端は径0.25mの円形のピットが掘られ、確認面から底面まで0.43m、ピット底部までの深さ0.73mを計る。

覆土はピット内が黄褐色土で埋まり、墻壁ぞいにロームブロックを含む褐色土が下部に向って拡がり、土壌中央部は黒色土が底面近くまではいり込んでいる。

遺物は曾利Ⅱ式の小破片が少量出土しているが、他の時期の土器が混じらないことからすれば、本址は曾利Ⅱ期の可能性が強い。また単独で存在し重複関係はないが、東西の一部以外は他の土壌に囲まれ、空白部に合せて構築されたかのようである。

第6号土壌（第7図）

調査区南部の、E-18に位置する。確認面は東西方向に1.13mの長軸を有し、南北方向に0.72mの短軸を持つ橢円形であるが、直線部が多く、多角形状のプランともいえる。底面は中央部に僅かの壅みを有するが、全体に一樣で凹凸はない。墻壁は全周直立し、南側は垂直に近い。

境内に礫が2個認められるが、一つは長方形の扁平な大形の礫で、底面に密着し一部は中央

の産みに蓋をするかのように遺存するが、1石のみであるため遺構かどうかの判別はできない。

遺物は曾利Ⅱ式の土器片が少量認められるが、いずれも底面近くで検出されることから、本址は曾利Ⅱ期の所産としてもよいであろう。また、重複関係はないが、南側には曾利Ⅲ式の土器が検出された9号が近接し、本址の南壁と9号の北壁は一部平行している。

第7号土壤(第7図)

調査区南部の、D-18・D-19・E-19・E-18に位置する。確認面で南北方向に0.99m、東西方向に0.85mの長円形のプランを呈し南東部が角ばる。底面は南側に若干下るが平坦面で、横円形である。壙壁は急傾斜で西側は直立し、深さ0.47mを計るが、埋甕が確認面より上部に突出しているため、0.6mは壙壁があったことになる。

遺物は中央部の南西寄りに曾利Ⅲ式の大型甕を逆位に埋置する埋甕が遺存し、底面に接していた。埋甕の内部には上部に人頭大の砾が検出されたが、底部が欠損していないことから流入とは考えられない。

本址の南端が10号址と重複しているが、土層の状況からは不明瞭である。しかし、12号が曾利Ⅲ式土器の埋設遺構を有することからすれば、本址が10号址を切って構築されたことになる。

第8号土壤(第7図)

調査区南部の、E-19・E-20ライン上に位置する。東西方向に長軸を有し、1.18m、南北の短径が0.98mを計るが、南側の突出部を重複として除けば、短径0.7mの長円形プランを呈する。底面は平坦であるが、南壁よりに長軸と平行に細長いピットを掘り、その東端に径0.25mの柱穴状のピットをさらに掘る。壙壁は全周とも直立する。地山の花崗岩が露出しているが、削平されず、壁面から突出する部分もある。確認面よりピットの最深部までは0.9mで、底面までは0.43m、南側の突出部で0.3mを計る。

遺物が少なく、磨滅の著しい小破片ばかりで時期の決定が不可能である。北西部に曾利Ⅲ式土器を出土した9号が位置するが、0.5m以上離れているため、特に関連は考えられない。

第9号土壤(第8図)

調査区南部の、E-18・E-19ライン上に位置する。南北方向の長軸1.4m、東西方向の短軸1.2mを計り、長円形もしくは隅丸方形のプランを呈する。壙壁はほぼ直立し、東西壁が平行し垂直に近く、底面との境も直角となる。確認面よりの深さは0.7mで底面は大型の土壤であるが、平坦で一様である。

遺物は五領ケ台・井戸尻・曾利Ⅲ式土器の小破片であるが、曾利Ⅲ式に属するものが主体をなし、底面近くに多いことから、本址は曾利Ⅲ期の構築と考えてよいであろう。

また、本址は重複関係は持たないが、6号でふれたように壙壁が近接し平行する。

第10号土壤(第8図)

調査区南部の、D-19・D-20ライン上に位置する。確認面で南北方向が0.98m・東西方向が0.75mの長円形のプランを呈する。底面は平坦で北寄りに幾分高くなり、壙壁は急傾斜で深さ0.22mを計る。

土壇内北側に、曾利Ⅱ式の浅鉢・深鉢がセットで出土した。それは朱が塗られた浅鉢の破片を土壇底面より10cm上位に敷きつめて、その上に深鉢の半完形品を置き、棺状に埋設されたもので、深鉢の欠損部は浅鉢の破片を立てて一局させ、一部は二重に土器が立てられていたが、蓋状の施設は存在しなかった。敷きつめられた浅鉢片の下や横から拳大の礫が数点伴った。その他の遺物は曾利Ⅱ・紀之内式の土器片が少量認められるが混入品と考えられ、本址は埋設土器から曾利Ⅱ期の所産であろう。

また、曾利Ⅱ式の埋甕が検出された7号に北壁の一部を切られるが底面までは及ばない。

第11号土壇（第8図）

調査区北西部の、G-8を中心に位置している。南半部は16号と重複し、西半部は耕作により攪乱されて、全容は明らかでない。確認面の残存部からは円形もしくは五角形状のプランで、径0.6m前後である。横壁は8cmしか残らず、さらに北～東部にかけてしか残存していないが傾斜は緩い。底面も同様に一部であるが、平坦で横壁側が僅かに深くなる。

遺物は藤内・井戸尻・曾利Ⅳ式土器の破片であるが、曾利Ⅳ式が主体となり、底面近くに遺存していたことから、本址は曾利Ⅳ期の可能性が考えられる。

また、重複関係は本址が16号を切っているらしいが、16号の覆土中より本址の横壁を検出することは、黒色土中であるため困難であった。

第12号土壇（第8図）

調査区北縁部の、E-5・E-6・F-6・F-5に位置する。東西方向の最大径は北寄りで1.02m、長軸は南北方向で1.54mを計る長円形もしくは卵形のプランを呈する。確認面は西側に傾斜し、横壁の西半部は低いが、この部分は傾斜が緩く底面との境界もはっきりしない。北壁寄りは立ち上がりが明瞭で深さ0.4mを計る。底面は平坦で長円形の整ったプランとなり、北端部にピットを掘る。このピットは三角形状で浅く、底面のプランと一致していることから半円形とみることもできる。

遺物は曾利Ⅱ式土器の小破片が主体を占め、五領ヶ台・井戸尻式土器の小破片も少量混じえるが、本址は曾利Ⅱ期に属する可能性が高い。また北端と南端は44号に切られ23号と切り合っているが、前者は本址と同様に曾利Ⅱ期の土器を出土し、後者は時期を決定する資料を欠いている。

第13号土壇（第9図）

調査区北端の、D-4・D-5・E-5・E-4に位置する。確認面でのプランは南北1.13m・東西0.96mでほぼ円形を呈する。横壁は南側が底面に近い下部で緩傾斜で続き、上部で急傾斜に変化する特異な例で、他は通常の直立する横壁をなし、深さ0.53mを計る。底面は南側の横壁が土壇中央部まで突出しているため、三ヶ月状の平坦面しか残らない。これは南側の横壁に50cm近くの大石が突出していることとも関係すると思われる。

遺物は五領ヶ台・曾利Ⅱ式土器の小破片が少量であるが、前者は1点のみで後者も型式的特徴が不明瞭であるため、本址は後者を重視して曾利Ⅱ期以降と幅をもたせて推定せざるを得ない。また、本址は重複関係を持たず、南に15号・西に44号が位置するが距離があり、土壇群の

北端部に単独で存在している。

第14号土壤（第9図）

調査区北端の、B-5・B-6ライン上に位置する。長軸1.59m・短軸1.43mを計るが、長軸方向には突出部があり、この部分を除けば円形でその南西部に0.3m前後の半円形が付加されたプランである。墻壁は上部が直立し、下半部は緩く傾斜するが直線上をなし、二段階に掘削されたようで、深さ0.82mを計る。底面は平坦であるが、張り出し部も同一平面でプランも一致していることから、重複とするよりも、本来土壤に付設されたものとしてよいであろう。

遺物はまったくなく、調査区土壤群とは完全に分離され、本址のみ孤立するため、時期決定資料を欠く。

第15号土壤（第9図）

調査区北端の、D-5・D-6・E-6・E-5に位置する。確認面で南北方向に0.94m・東西方向の最大幅は北寄りで1.08mで、南と東西にコーナーを有する隅丸の三角形状のプランを呈する。墻壁は直線上で上部に拡がり、深さ0.38mを計る。底面は中央部で東西方向に一段南側に向って下り、二段の平坦面をなすが、墻壁近くで幾分深くなる。

遺物は大形の土器片が、中央の段の上部に検出され、水平方向に段の落ち込み部を覆っているかのように突出している。いずれも無文土器で、本址の構築時期を知る資料はない。

また、本址は重複関係を有さず、調査区内の土壤群の端に、単独で存在する。

第16号土壤（第9図）

調査区の北部西寄りの、G-8・G-9ライン上に位置する。確認面で南北0.76m・東西0.87mを計り、東部が突出し、南北方向に僅かに拡がり、五角形状のプランを呈する。墻壁は傾斜が緩く、深さ0.26mと浅いため、上部は明らかでない。底面は平坦で墻壁寄りで若干高くなり、円形ないし隅丸の正方形形状のプランをなす。

遺物はまったく検出されないが、北部が11号と南東端が21号と重複する。両者とも曾利Ⅲ期の土器片が検出され、11号は本址を切っているが、21号は重複部が少なく切り合いによる新旧は判別できない。

第17号土壤（第10図）

調査区の中央西寄りの、G-9・G-10ライン上に位置している。確認面でのプランは南北方向1.18m・東西方向1.3mで、南東一北西方向に長軸を有する。墻壁は南半部で傾斜が緩く、他も下部は同様であるが上部は直立する。北西部は地山に花崗岩があり、削平されているが、墻壁まで削られず一部が突出し、本址のプランを圧迫する要因となったと思われる。底面は若干の凹凸が認められ、確認面に比べるとかなり小面積となる。

遺物は検出されず、遺構の時期を決定する資料はなく、重複関係もない。

第18号土壤（第10図）

調査区北部西側の、G-7・G-8ライン上に位置する。南北方向に0.96m・東西方向に0.86mを計り、西側は直線上で半円形もしくは四角形状のプランを呈する。墻壁は西側が直立し、

他は傾斜が緩く北東部は大形の地山の花崗岩が露出し、表面は一部削平されるが、大半は塙壁・底面上に突出している。底面は地山の石が占めるため狭く、西半部は円形のプランをなし、深さ0.67mを計る。

遺物は南塙壁上に乗るように曾利Ⅲ式土器の大形破片が出土し、その中には井戸尻式土器の小破片を混じえる。また、本址は重複関係ではなく、遺物からすれば曾利Ⅲ期の可能性が強い。南西方向は曾利Ⅳ期の遺物が出土した11号が近接し、これに続く土壙列に包囲されている。

第19号土壙（第10図）

調査区の北部中央の、C-8・C-9・D-9・D-8に位置する。確認面で南北0.76m・東西0.59mで、北端は尖り東西の最大幅は南寄りにあり、卵形のプランを呈する。塙壁は急傾斜であるがカーブをなし上部ではほぼ直立する。底面は東寄りに平坦で、中央部に浅い窪みを有し、深さ0.57mを計るが、埋甕が確認面上に突出するため、0.8m前後は塙壁があったことになる。

遺物は曾利Ⅲ式土器を正位に用いた埋甕で、土器底部は土壙の底面より10cm浮いている。口縁部は耕作により削平され欠損し、埋甕内部に土器の小破片が散在する。

また、本址は南西端を29号・北西端を54号と重複するが、いずれも塙壁上部の一部で、土層による切り合いは判定できないが、両者とも曾利Ⅳ期の土器を出土していることからすれば、本址は両側を僅かに切られたことになる。

第20号土壙（第10図）

調査区中央の、D-10・D-11ライン上に位置する。長軸1.03m・短軸0.8mを計る円形もしくは、隅丸正方形のプランを呈する。塙壁は直線状で急傾斜をなし、深さ0.65mを計る。底面は平坦であるが、部分的に不明確である。

覆土は底面の塙壁寄りに若干褐色土が堆積するが、他は大部分を黒色土系の土砂が占めている。土壙中央部の中位に三箇の礫が連続して並び、曾利Ⅲ式土器の破片が伴ない、上位には井戸尻・曾利Ⅳ式土器の小破片が出土するが、混入品と考えられ、本址は曾利Ⅲ期の所産と推定される。

また、本址は重複関係を持たないが、南西部の塙壁は曾利Ⅳ期の土器を出土した31号と近接し、周囲を土壙群にかこまれている。

第21号土壙（第11図）

調査区北部西寄りの、F-8・F-9・G-9・G-8に位置する。確認面は東西方向の長軸が1.13m・南北方向の短軸が0.98mで、東側に窪みがあるが、大略橢円形のプランとしてよいであろう。塙壁は南半部で傾斜が緩くカーブして上がるが、確認面でも直立しない。底面は北西寄りに、狭い円形のプランを呈し平坦である。

遺物は曾利Ⅲ式土器の破片が全般的に検出され、曾利Ⅳ・堀之内式土器の小破片は上層部を主とするため混入品と考えられ、本址は曾利Ⅳ期の構築の可能性が強い。

また、北西部が16号・北東部が39号と重複するが、塙壁の一部に限られるため土層による切

り合いの新旧は判別できない。

第22号土壙（第11図）

調査区北部中央の、C—7・C—8・D—8・D—7に位置する。長軸0.88m・短軸0.66mの北西—南東に主軸を有する楕円形のプランを呈する。壙壁は緩いカーブを描き上部ほど急傾斜となり直立するが、東半部は傾斜が急で、深さは0.48mを計る。底面は壙壁との境界が不明瞭であり、長楕円形のプランを呈し平坦面が中央部を占める。

遺物は井戸尻・曾利Ⅲ式土器の破片が認められるが、後者が主体をなし土壙中位に集中するため、本址は曾利Ⅲ期の可能性が強い。

また、本址は重複関係がなく、土壙群の外縁部に単独で位置する。

第23号土壙（第11図）

調査区北端部の、E—5・E—6・F—6・F—5に位置する。北西—南東の主軸を有し、長軸1.33m・短軸1.06mを計り、南東側は円形・北西側は角ばるが、全体としては椭円形に近いプランを呈する。壙壁は直線状の急傾斜をなし、深さ0.6mを計る。底面は幾分凹凸があり、壙壁沿いが少し高くなる。

遺物は井戸尻・曾利式土器の小破片が少量出土したが時期の決定は困難なものである。底面中央部には拳大の砾が1個密着して遺存する。

本址は12号と重複関係を持ち、12号が曾利Ⅲ期とすれば、本址は12号に切られるため、曾利Ⅲ期には既に構築されていたことになろう。

第24号土壙（第11図）

調査区北部中央の、C—8・D—8ライン上に位置する。確認面は東西方向の長軸0.82m・南北方面の短軸0.61mの長円形プランを呈する。壙壁は直立し、深さは0.45mを計る。底面は全面が地山の花崗岩で占められ、西部は壅み土壙掘削時に若干削られたようである。

遺物は土器の少破片が少量で、型式的特徴を判定できるものは五領ヶ台式の土器片のみで、本址の時期を決定できない。

また、本址は重複関係は持たないが、曾利Ⅳ期の遺物を出土した54号と南側で近接し、北側の22号との中間にあたる。

第25号土壙（第12図）

調査区北端の、F—5・F—6・G—6・G—5に位置する。確認面は長軸1.28m・短軸1.12mで、北西・東側は地山の花崗岩で制限され、長円形のプランを呈する。壙壁は直立するが、底面との境界は不明瞭である。半周近くは地山の花崗岩が露出しているが、ほとんど削平されず、特異な形状の壙壁を呈し、深さ0.38mを計る。底面も中央部に地山の花崗岩が突出し、底面は凹凸が認められ、地山の花崗岩の一部を掘削して径0.25mの円形ピットを有するが、深さ0.1m程度で底部は平坦である。

遺物は曾利Ⅲ式土器の破片が中心で、少量の五領ヶ台式土器片は混入品と考えられる。本址は重複関係を持たず、遺物から曾利Ⅲ期の可能性が考えられる。

第26号土壙（第12図）

調査区中央西寄りの、F—9・F—10・G—10・G—9に位置する。プランは確認面で長軸0.59m・短軸0.57mの円形を呈する。壇壁は急傾斜をなし上部で直立するもので、全周とも一樣であり深さ0.55mを計る。底面は平坦で、円形プランである。遺物は曾利Ⅲ式土器が1片出土したのみで、時期決定は困難である。

また、本址は重複関係を持たず、周囲の土壙群の中間部に単独で位置する。

第27号土壙（第12図）

調査区中央部の、D—9・D—10・E—10・E—9に位置する。35号と重複し南東半部しか残らないが、東西方向0.83m・南北方向は東寄りの最大幅0.5mを計る。南側は直線上で東西に突出した角があり、北半部を同様に想定すれば、六角形状のプランを呈するといえる。壇壁は直線的に上がる急傾斜のもので、深さ0.45mを計る。底面は中央に向って下り平坦であるが、中心部は重複のため不明である。

遺物は土器片が若干検出されたが、時期の決定できる資料ではない。また、重複関係は35号に切られ、35号も遺物が少量で時期は不明であるが、土層の状況からは本址を切っているようで、本址は35号以前に構築されたことだけはいえそうである。

第28号土壙（第12図）

調査区中央部の、D—10・D—11・E—11・E—10に位置する。プランは確認面で、北西—南東方向の長軸で0.69m・短軸0.6mの西側で幾分ふくらむ梢円形を呈する。壇壁は直線状で直立し、深さ0.28mを計る。底面は平坦である。

遺物はまったくなく、時期が判明しない。また、重複関係は西側の壇壁の一部を63号と切り合っているが、新旧関係は明らかでなく、63号も遺物が検出されていない。

第29号土壙（第13図）

調査区中央東寄りの、C—9・D—9ライン上に位置する。東西方向の長軸1.15m・南北の短軸1.02mを計る梢円形で、東の一部に僅かの突出がみられるが、整ったプランを呈する。壇壁は上部が直立するが、下部はカーブしながら底面に続き、深さ0.6mを計る。底面は平坦であるが、北側に向ってかなり深くなり、プランは西側が窪み不整形となる。

覆土の中位に礫が認められ、水平にプランの南東部に集中し、底面の傾斜と平行しない。遺物は集石上部に土器の少破片が検出され、曾利Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ式に属するものであるが、本址の構築時期の決定できる資料とはならない。

また、本址は北東側に19号と重複関係を有するが、19号は曾利Ⅲ期の埋甕を検出し、重複は壇壁の一部に限定されるため切り合いによる新旧関係は判定できない。

第30号土壙（第13図）

調査区中央部、D—10・D—11・E—11・E—10に位置する。北西部は31号と重複し明らかでない。短軸は東西方向で0.51m・長軸は南北方向で残存部は0.5mであるが、重複部も推定すれば0.7m前後となり、幾分いびつな長円形のプランを呈する。壇壁は直線状に全周とも

直立し、深さ0.48mである。底面は中央部が落ち込み平坦面ではなく、東西方向に長い卵形のプランをなす。

出土遺物はまったくなく、時期決定はできないが、曾利Ⅳ期の遺物を出土した31号に切られていることから、曾利Ⅳ期より新しくはならないようである。

第31号土壙（第13図）

調査区中央部の、D-10・D-11・E-11・E-10に位置する。北西—南東方向に長軸0.96mで、短軸は0.54mを計る。確認面では北西寄りが若干拡がり、梢円形もしくは卵形のプランである。横壁は直線状で短軸方向は直立するが、長軸方向では下部でカーブし底面に続く。底面は西寄りで深くなり、0.64mを計るが、一様で平坦面をなす。

土壙上部の北西隅に1個の礫が浮いて遺存し、遺物は中位から曾利Ⅳ式の口縁部破片が出土していることから、本址は曾利Ⅳ期の可能性が考えられる。

また、本址は30号と重複し、切っている。北東側は曾利Ⅲ期の遺物を検出した20号と近接し、本址と30号の重複の南側は土壙群の空白部が存在する。

第32号土壙（第13図）

調査区中央の、E-10・F-10ライン上に位置している。長軸1.55m・短軸1.4mでほぼ円形のプランを呈する。確認面は外周部に重複する土壙のプランが付属し複雑な形状である。横壁は直線状をなし急傾斜で、深さ0.48mを計る。底面は平坦で一様であるが、南東端の一部横壁を切るようにピットを有する。このピットは径0.35mの円形で底部は横壁寄りに深くなり、最深部は底面より0.2mを計る。

遺物は曾利Ⅲ式土器の小破片を中心に、数片の五領ヶ台式の土器片を出土した。また、重複関係は多く、西側に曾利Ⅲ期の遺物を出土した69号、南東に64号、北東に63号と切り合うが、64・63号は遺物が少なく時期の判定はできないものである。いずれも横壁部に限定され、本址が外部の土壙に切られたようであり、曾利Ⅲ期には構築されたことが窺えよう。

第33号土壙（第14図）

調査区北西端の、F-4・G-4ライン上に位置する。確認面は南東端が重複で明らかでない。東側は地山の花崗岩が突出し、北側は浅い窪みがあり擾乱されたようである。長軸は南北に1.25m、短軸は東西に0.86mであり、重複部や地山の花崗岩の突出部や擾乱部を除くと、隅丸三角形状のプランを呈する。横壁は浅く最深部でも0.22mで、遺存状態の良好な西側は直線上であるが傾斜は緩い。底面は平坦であり、北寄りで若干高くなる。

遺物は五領ヶ台・曾利Ⅲ式土器の小破片が出土しているが、いずれも少量で本址の時期を決定できない。また、本址と重複する34号は曾利Ⅲ期の遺物がまとまって出土しており、本址を切っていることから、曾利Ⅲ期には構築されていた可能性がある。

第34号土壙（第14図）

調査区北西端の、F-4・F-5ライン上に位置する。北西側は地山の花崗岩が横たわり、長軸は1.05mであり、短軸は現状で0.6mであるが、岩の下部では0.74mの長円形の整ったブ

ランを呈する。横壁は傾斜が緩く、底面寄りでカーブする。最深部は0.3mを計る。底面は中央部に長円形の深い窪みを有する、梢円形もしくは卵形のプランで、横壁に向かい僅かに深くなる。

遺物は曾利Ⅲ式土器の大形破片を出土したが、確認面近くの土壙最上部である。しかし底面と平行して水平で、中央部の窪みと一致していることからすれば、本址の構築と強い関係が想定できる。

また、北東部を33号と重複し、これを切っているが、33号は時期を決定できる資料を欠いている。

第35号土壙（第14図）

調査区中央部の、E-10・E-11ライン上に位置する。確認面は南東側が重複し、北東一南北方向の長軸は1m・短軸は0.7mで北東側は円形、南西・西端は角ばって突出し直線状で重複部も反対側と同様に拡がれば五角形状のプランを呈したことになる。横壁は直線状の急傾斜のもので、深さ0.67mを計る。底面は中心部に向かって深くなり、確認面とは逆に拡がる釣鐘状のプランとなる。

遺物は曾利Ⅲ・堀之内式土器片が少量出土し、本址の時期決定の手掛りとはならない。

また、重複関係は27号とともに南側の横壁部が、32号と切り合い、本址は27号を切っている。27号は資料がなく、32号は曾利Ⅲ期以降で、本址が32号を切っていると思われることから、曾利Ⅲ期以降となる。さらに北端を42号と重複しこれを切っているが、42号は資料がなく、本址は土壙群の中間部に合せて構築されたことになる。

第36号土壙（第14図）

調査区中央部の、C-10・C-11・E-11・E-10に位置する。確認面は東西方向に長軸を有し0.94m、短軸は0.68mで北西部が窪むが、長円形のプランを呈する。横壁は上部が直立し、中部で急に傾斜し、下部で再び直立し、深さ0.85mを計る。底面は平坦で東側に僅かに傾斜し、確認面と一致した梢円形のプランとなる。

遺物は井戸尻・曾利Ⅳ・堀之内式土器の小破片で、いずれも土壙上部で検出されているため、本址の時期決定は困難である。

また、重複関係を本址は持たないようであるが、横壁中位の段の存在は同一プラン内での重複の可能性も考えられる。しかし、上・下の横壁が直立しているが、中段の傾斜部が底面とは異っていることから、外部の大形の土壙が掘られた後に、中央部に小形の土壙が掘られる。この時点では上部の土壙はほとんど埋没していなかったと思われる。

第37号土壙（第15図）

調査区中央部東側の、C-9・C-10・D-10・D-9に位置する。確認面では2号と38号のプランの中に含まれ、この2基の調査中に確認できたもので、上部のプランは長軸0.67m・短軸0.62mの円形を呈する。カーブしながら上部で直立する急傾斜の横壁で、深さ0.98mを計る。底面も緩い曲線を描き平坦面は存在しない。

遺物は上部に土器片や礫が認められるが、本址に属するものかどうかは明らかではない。

また、本址は重複関係を有し、南の2号は曾利Ⅲ期の遺物を検出し、西の38号は時期が不明で、切り合い関係も判明しない。さらに北側に一まわり外部に拡がり、もう1基の重複の可能性もある。

第38号土壤（第15図）

調査区中央部の、D-9・D-10ライン上に位置する。西側が1号・南東が2号・北東が37号と重複し、南北の一部しか確認面は残らない。南北方向は1.07mで、東西方向は不明である。横壁は傾斜が緩く、南壁は上部で外側へ拡がり、深さ0.56mを計る。底面は東西方向に伸びる平坦面である。

遺物は少なく外縁部は重複する土壤との帰属を判定できず、土器も時期決定できる資料はない。

また、重複関係は曾利Ⅳ期の遺物を出土した1号、曾利Ⅲ期の遺物を出土した2号と37号であるが、切り合いによる新旧も明らかにし得ない。

第39号土壤（第15図）

調査区北部西寄りの、F-8・F-9・G-9・G-8に位置する。確認面は南西部が重複で明らかでないが、北東一南北方向に長軸を有し現状で0.65m・短軸0.55mを計り、長軸は推定で0.9~1mの長円形のプランを呈する。横壁は傾斜が緩く上部で急傾斜になるが直立しない。深さ0.3mで底面との境界は不明瞭である。底面は中央に径0.3~0.5mの長円形のピットを有するため平坦面は狭い。このピットは深さ0.2mで全体に緩くカーブする。

遺物は五領ヶ台・曾利式土器の小破片が少量で、時期の決め手を欠いている。また、重複関係は、曾利Ⅲ期の遺物を出土した21号と横壁部を切り合っているが、新旧を判定できない。

第40号土壤（第15図）

調査区東端の中央部、A-12・B-12ライン上に位置する。41号と重複し確認面は北東部のみで、現状では幅0.55mで先端が尖がる。横壁は緩い傾斜で底面より曲線を描いて上がるが上部でも傾斜はあまりきつくならない。底面は僅かの残存部で全容は推定できない。深さ0.17mを計る。

遺物は北東隅に、五領ヶ台式土器の底部が、底部を下に底面と平行して出土していることから、本址は五領ヶ台期の可能性がある。

また、重複関係は曾利Ⅲ期の遺物の出土した41号に切られている。

第41号土壤（第16図）

調査区中央部西端の、A-12・B-12ライン上に位置する。プランは確認面で南東一北西方向に長軸を有し1.6m・短軸は1.08mで、北側に幾分拡がる長円形もしくは橢円形を呈する。横壁の傾斜は緩いが直線状で、深さ0.63mを計る。底面は長軸方向の中央部で一段下がり、低い南東側の底面はさらに中央が窪み、高い方の底面は平坦である。

土壤の中位を主にプラン全体に大形礫の集石が認められ、一部は底面付近にも遺存する。遺物は五領ヶ台・井戸尻・曾利Ⅲ式土器片が出土するが、五領ヶ台・井戸尻式は上部に検出され、

曾利Ⅱ式は集石に伴なうため、本址は曾利Ⅱ期の構築としてよいであろう。

また、重複関係は北側で40号を切り、西側は曾利Ⅱ期の土器を出土した72号に切られている。

第42号土壙（第16図）

調査区中央部の、E-9・E-10ライン上に位置する。確認面は南端が重複で不明であるが、南北に長軸を有し、現状では0.78mであり、0.9m前後は存在したらしく、短軸は0.78mを計り、東側が短い台形状のプランを呈する。壇壁は急傾斜で直線状をなし、深さ0.47mを計る。底面は平坦で確認面と同様台形状である。

遺物はまったく検出されず、時期は判定し得ないが、南側を、曾利Ⅱ期の遺物を検出した35号に切られるため、本址は曾利Ⅱ期には既に構築されていたことになる。

第43号土壙（第16図）

調査区北部の、E-8・E-9ライン上に位置する。確認面は北側と北東側に重複を有し、この部分を除くと最大径1.56mの円形のプランを呈する。壇壁は南西側しか残らず、カーブしながら上部は直立する。底面はプラン内にも重複がありほとんど残らないが、深さは0.8mを計る。

遺物は曾利Ⅱ式土器の破片が主体で、上部には井戸尻式や早期・後期の土器片も混じえるが、本址は曾利Ⅱ期の構築の可能性が強い。

また、重複が多くプランの外周は73・86・47号の3基で、73号は曾利Ⅱ期の遺物が検出されているが、切り合による新旧は不明である。プラン内部は中央に67号が位置し、本址は67号に切られている。

第44号土壙（第16図）

調査区北端の、E-4・E-5・F-5・F-4に位置する。長軸は東西方向の南寄りで1.56m、短軸は重複のため確実ではないが1.2m前後と推定される。長軸方向に突出し、他は直線的で、台形状のプランを呈する。確認面は西側に下る傾斜面となり、壇壁は東半部で直立し、西側は下部の傾斜が緩く上部は直立し、深さ0.48mを計る。東西の一部に地山の花崗岩が突出し削平されない。底面は平坦であるが南東の壇壁より続く花崗岩が中央部まで進出する。

遺物は曾利Ⅱ式の土器片が土壙中位より検出され、本址を切る12号も曾利Ⅱ期の遺物を出土しており、曾利Ⅱ期には本址が構築されていたことになろう。

第45号土壙（第17図）

調査区中央部の、C-12・C-13・D-13・D-12に位置する。北東一南北方向に長軸を有し、0.78m・短軸0.64mを計る梢円形のプランを呈する。壇壁は急傾斜で下部は若干緩くカーブする。東～南は地山の花崗岩を削平し、壇壁を掘って、確認面よりの深さ0.59mを計る。底面も北東部は岩を削るが、完全に平坦面をなさず、壇壁側に高くなる。

遺物は、土壙の上部より曾利Ⅱ式土器の破片が1点のみで、時期の決定はできない。

また、本址は重複関係は持たず、北西方向に井戸尻期の遺物を出土した46号が位置するが、他は周囲に土壙がない。

第46号土壌（第17図）

調査区中央部の、D-12を中心位置する。確認面は長軸が東西方向で1.25m・短軸は0.95mで、ひし形に近いプランを呈する。塙壁は西側で直立し、他は急傾斜をなす。底面は西に下る平坦面で、深さ0.2mを計る。底面の東・西・南は塙壁に接してピットを有し、深さはいずれも0.2m前後で、ピット内の底部は傾斜したり、カーブして平坦面はない。ピット以外の底面上は集石が認められ、扁平な礫は底面に密着した例もある。

遺物は集石に伴なって井戸尻式土器の破片が主体となり、上部に曾利式土器片が少量検出され、本址の時期は井戸尻期の可能性が強い。

また、本址は重複関係を持たず、南東部に45号が位置する以外、近くに土壌はない。

第47号土壌（第17図）

調査区北部の、D-8・E-8ライン上に位置する。確認面は重複が多く、東西の一部分しか残らない。東西方向1.19mでプランは南北方向に長軸を有する楕円形と推測される。塙壁は急傾斜でカーブし、深さ0.83mを計る。底面は平坦で南へ若干下る。

遺物は曾利Ⅱ式土器1片のみで時期を決定できる資料がない。

また、重複関係は北側に74号・南に67号と43号と切り合っているが、新旧を明らかにし得ない。

第48号土壌（第17図）

調査区中央部の、E-12・E-13ライン上に位置する。確認面は南部が重複で不明瞭で0.93mの円形のプランを呈したらしい。塙壁は傾斜が緩いが直線状で、深さ0.3mを計る。底面は平坦で南北に長い楕円形をなすが、南部は明らかではない。

遺物は曾利Ⅱ式土器の破片が少量検出されるが、時期を判定する資料とはならない。

また、本址は南部を60号と重複し、60号も遺物が少なく時期が不明であるが、切り合いは本址が60号を切っている。

第49号土壌（第18図）

調査区中央部の、C-14・C-15ライン上に位置する。南北方向に長軸を持ち1.38m・短軸0.9mの長円形を呈する。塙壁東側は急傾斜で、西側は傾斜が幾分緩い。確認面は西に低くなるが、深さは最大0.37mを計る。塙壁中には小礫が突出する。底面は平坦であるが、底面に密着して礫が認められる。

覆土は塙壁沿いと底面上がロームを含む褐色土で、土壌の中央は黒色系の土層で、中位に礫が数個遺存する。遺物は曾利Ⅱ・堀之内式土器の破片で、前者が主体をなし土壌中位に検出され、後者は少量で上部で出土するため、本址は曾利Ⅱ期の可能性が強い。

また、本址は重複関係を持たず、周囲に他の土壌はなく、単独で孤立する。

第50号土壌（第18図）

調査区北西端の、G-5・H-5ライン上に位置する。確認面で0.64mの最大径を有する円形のプランで、南端が僅かに突出する。塙壁は直立し底面との境界でカーブし、深さ0.54mを計る。

底面は中央で窪み、東西方向に長い不整形となる。

遺物は曾利Ⅲ式土器が主体となり、本址の構築は曾利Ⅲ期の可能性がある。

また、本址は重複関係を持たず、西に51・83号、東に25号の単独の土壙が存在し、他の方向も重複した土壙群によって包囲され、北側の一部に空白部が認められる。

第51号土壙（第18図）

調査区北西端の、II—4・H—5 ライン上に位置する。南北方向の長軸は0.64mで、短軸は0.63mで、北東—南西方向の隅丸方形状を呈する。横壁は傾斜が緩く直線状で、深さ0.35mを計る。底面は中央に向って落ちて、平坦面は狭い。

遺物は曾利Ⅲ式土器の小破片を主体とし、他は時期の判定できるものはないため、一応曾利Ⅲ期の構築とも考えられる。

また、本址は重複関係を持たないが、曾利Ⅲ期の遺物を出土した84号と、北東部が近接する。

第52号土壙（第18図）

調査区北西端の、G—6・H—6 ライン上に位置している。確認面は南西部が重複で不明瞭であり、南北方向の長軸1.05m・短軸0.94mの梢円形のプランを呈する。横壁上部は急傾斜であるが、底面近くで傾斜が緩く境界ははっきりしない。南半部は特に傾斜が緩く底面の延長線にすぎず、壁とはよびにくるものである。底面は北東寄りに位置するが、中央に窪み平坦面はない。

遺物は曾利Ⅲ式土器片が主体で、藤内式土器が1片検出されているが、本址は曾利Ⅲ期の可能性が考えられる。

また、重複関係は東側が井戸尻期の遺物を出土した76号、南西が曾利Ⅳ期の遺物を出土した53号と切り合い、本址は76号を切り、53号に切られ、両者の中間に構築され、土器型式とも一致する。

第53号土壙（第19図）

調査区北西端の、G—6・II—6 ライン上に位置する。確認面は北東部以外重複し明らかでない。長軸0.9m・短軸0.83mではほぼ円形のプランを呈する。横壁は急傾斜で上部は直立する。底面は西寄りでやや高くなる平坦面で、深さ0.34mを計る。

遺物は曾利Ⅳ式土器の破片が主体となり、本址の構築も曾利Ⅳ期に属する可能性が考えられる。

また、重複関係は多く、南西に87号・南に88号・南東に89号・北東に52号と切り合いを持つが、土層による新旧は52号を本址が切ること以外は、判定できない。遺物からみれば、87号は曾利Ⅳ期・88号と89号は曾利Ⅲ期で、後者は本址に切られたことになるが、87号との新旧は手掛りがない。

第54号土壙（第19図）

調査区北部の、C—8・C—9・D—9・D—8 に位置する。確認面は南東～東に重複し不正確な部分がある。長軸0.94m・短軸0.77mで東西方向に長く卵形のプランを呈する。横壁は

傾斜が緩くカーブし、深さ0.6mを計る。底面は中央部に向って下る傾斜で平坦面は少ない。

遺物は曾利Ⅳ式の大形土器が、土壤の上位に蓋状に出土しているため、本址は曾利Ⅳ期の所産と考えられる。

また、重複関係は南東部の19号・東部の55号と横壁の一部を切り合うが、土層による新旧は判定できない。19号は曾利Ⅲ式の埋甕をもつことから、本址に切られているようであるが、55号との関係は明らかにし得ない。

第55号土壤（第19図）

調査区中央部西側の、C—8・C—9ライン上に位置する。プランは西端が重複で不明であるが、南北0.57m、東西方向は現状では0.9mで、1m前後と推定される。東寄りに最大幅を有するため、卵形のプランといえるが、凹凸が多く不整形でもある。横壁は直立するが、底面付近でカーブするため境界は不明瞭で、深さは0.47mを計る。底面も横壁より続く曲線で中央部で平坦面となるが、外周は高くなる。

遺物は曾利Ⅳ式土器が1片のみで時期の決定をする資料を欠いている。また、重複関係は西側の54号と横壁の一部を切り合っているが、新旧は判定できない。

第56号土壤（第19図）

調査区北部西寄りの、F—8・G—8ライン上に位置する。確認面のプランは外周部に重複が多く、南北の一部と西側しか残らない。長軸は南北方向で0.92m・短軸は0.84m前後を計る椭円形もしくは卵形のプランを呈する。横壁は急傾斜で、底面との境はカーブしてはっきりしない。底面は中央に向って下り、西端に径0.3mのピットを有する。深さは、0.62mで、ピットは0.15mを計る。

遺物は、井戸尻・曾利Ⅳ式土器の小破片が少量で、時期を決定できない。南西に57号・北西に39号・東側に71・77号と重複関係を有するが、いずれも遺物が少なく時期決定の資料を欠くもので、土層観察による切り合いの判定も困難であった。

第57号土壤（第20図）

調査区北部西寄りの、F—7・F—8・G—8・G—7に位置する。確認面は南東部が重複で明らかでない。北西—南東方向に長軸を有し、0.57m・短軸は0.47mの椭円形のプランを呈する。横壁は急傾斜でカーブし上部は直立し、深さ0.74mを計る。底面は横壁に続きU字状で平坦面はない。

遺物は曾利・堀之内式土器の小破片で、時期決定の資料を欠いている。

また、重複関係は南東部が56号と切り合っているが、新旧の判定はできない。さらに、北部は92号と接するが、92号も遺物はなく、時期不明である。

第58号土壤（第20図）

調査区南部の、E—16・F—16ライン上に位置する。プランは長軸1.3m・短軸1.19mの円形を呈する。横壁は急傾斜で下部は底面にかけてカーブし、深さ0.29mを計る。北壁部は人頭大の礫がくい込むが、他は一様な横壁が続く。底面は横壁寄りが若干落ち込み、中央部が平坦面を

有し、底面に密着して縞が1列にならぶ。

遺物は曾利Ⅱ式土器の破片が土壙中位に集中して出土した。

また、本址は土壙間の重複関係は有さないが、住居址のプラン内に位置し、住居址の床面精査中に確認したもので、住居址の西壁に接しているが、土壙の確認面には張り床は検出できず、住居址を切って構築されたらしい。しかし、住居址も曾利Ⅲ期に属し時期的に近いことや、壁が接していることから、両者には密接な関係があったことが窺えよう。

第59号土壙（第20図）

調査区南部の、D-15・E-15ライン上に位置している。確認面は南北方向の長軸が0.82m・短軸が0.75mで南側が僅かに開くほぼ長方形のプランを呈する。横壁は傾斜が緩く、深さ0.27mを計る。底面は平坦面をなし、確認面と一致したプランであるがコーナーは丸くなる。

遺物は曾利Ⅱ・Ⅳ・縄之内式土器の破片が出土しているが、本址は浅く各型式の土器片が混在するため、時期の決定は不可能である。

また、南部を住居址と重複関係を有するが、住居址の北壁中央部を切っているため、本址は曾利Ⅲ期以降に構築されたようである。周囲には住居以外土壙は存在せず単独で位置している。

第60号土壙（第20図）

調査区中央部のE-12・E-13ライン上に位置する。南北方向が0.7m・東西方向が0.8mで、北部が突出し東西の南寄りにも突出し、隅丸三角形状のプランを呈する。横壁は急傾斜であるが直線上で、南側は途中に段がある。底面は平坦で中央部に縞が1個埋まり上部が露出し、深さ0.58mを計る。

遺物は縄文の施された土器片が2片出土したが、型式は明確にできない。北部の縞は重複する48号に属するもので、48号に切られているが、48号も時期を決定する資料を欠き、本址の時期も不明とせざるを得ない。

第61号土壙（第20図）

調査区中央部の、E-12・E-13・F-13・F-12に位置する。確認面は北西-南東方向に長軸を有し0.7m・短軸0.57mを計る梢円形のプランを呈する。横壁は直立するが全体にカーブし、深さ0.28mを計る。底面は横壁寄りに少し高く中央部は平坦面をなす。

遺物はまったく検出されず、重複関係もなく時期の決定は不可能である。

第62号土壙（第21図）

調査区南部の、B-14を中心位置する。確認面のプランは、北東-南西方向の主軸が0.98m・短軸が0.7mで、直線状の部分が多く四角形状であるが、北側は波打っている。横壁は南半部が直立し、北半部は急傾斜で、深さ0.27mを計る。底面の南側は一段高くなり、プランは確認面同様波打って不整形をなす。

遺物は曾利Ⅱ式土器の破片が主体で、諸磯式土器片が1片で混入品と考えられ、本址は曾利Ⅲ期の構築の可能性が強い。

また、本址は重複関係を持たず、周囲に土壤はなく単独で存在する。

第63号土壤（第21図）

調査区中央部の、E-10・E-11ライン上に位置する。確認面は北東・南東部以外は重複し不明で、長軸は北西-南東方向に0.77m・短軸0.58mを計り、南東部がやや狭くなる卵形のプランを呈する。墻壁は上部が急傾斜で下部は緩くなり、そのまま底面中央部に続き、深さ0.65mを計る。

遺物はまったくなく時期決定の資料を欠く。また、重複関係は西側が曾利Ⅲ期の遺物を出土した32号・南東は28号・北は27号と墻壁の一部分が切り合うが、28・27号は遺物がなく、いずれも土層観察による新旧を判断できなかった。

第64号土壤（第21図）

調査区中央部の、E-10・E-11ライン上に位置する。南北方向の長軸は0.57m・短軸は0.46mで、台形状もしくは卵形のプランを呈する。墻壁は上部で直立しているが、下部にいくにつれカーブし底面に続きU字形となり、確認面よりの深さ0.45mを計る。

遺物はまったく検出されず、時期が決定できない。また、重複関係は北東部が32号の墻壁部と切り合うが、新旧は明確にし得ない。

第65号土壤（第21図）

調査区南部の、E-13・E-14・F-14・F-13に位置する。東西方向に長軸を有し、0.87m・短軸は0.65mを計る梢円形のプランを呈する。墻壁は直立し、東側は小窓が下部で密着する。底面は墻壁より緩い傾斜が続き、中央部でさらに一段深く落ちる。確認面よりの深さ0.48mを計る。

拳大の窓が底面付近に遺存し、小窓が多い特徴があるが、遺物はまったく検出できず、重複関係も持たないため時期の決定ができない。

第66号土壤（第22図）

調査区中央部の、B-10・C-10ライン上に位置する。確認面は長軸1.05m・短軸0.86mで、南東-北西部にふくらむ卵形のプランを呈する。墻壁は西半部で傾斜が急で、東半部は傾斜が緩く底面へ続く。深さ0.5mを計り、底面は西に寄り平坦面は少ない。

遺物は土壤上部に無文の土器の小破片が検出されたが、時期は不明で、本址の構築期を知る資料は重複関係をもたないこともあり、まったくない。

第67号土壤（第22図）

調査区北部の、D-8・D-9・E-9・E-8に位置する。プランは長軸0.92m・短軸0.74mで、北東-南西方向が平行し、長方形もしくは台形状である。墻壁は残存部が浅く0.1mに満たないため明らかにできないが、底面付近はカーブする。底面は中央が平坦で、集石の窓が一部密着し、周囲の土壤の確認面からは0.89mの深さを計る。

遺物は曾利Ⅲ式土器片のみが集石に伴なって検出され、本址の構築時期は曾利Ⅲ期に属することになる。

また、本址は43・47号のプラン内に重複し、43号は曾利Ⅲ期の遺物を検出しているが、この43号を切っているようで、47号も同時に切って構築されたと考えられる。

第68号土壙（第22図）

調査区南部の、E-13・E-14ライン上に位置する。プランは最大径1.08mを計る円形である。壇壁は傾斜が緩い直線状で、深さ0.42mを計る。底面は壇壁寄りが若干凹凸を有するが、中央部は平坦面をなす。

遺物は曾利Ⅲ式土器の把手部・ミニチュア土器が、土壙中央部の中位から出土していることから、本址の構築は曾利Ⅲ期と考えられる。

また、本址は重複関係を持たず、西側には曾利Ⅲ期の遺物の出土した70号、北西には65号が存在するが、東側は付近に土壙がなく空白部が拡がる。

第69号土壙（第22図）

調査区中央部西寄りの、E-10・E-11・F-11・F-10に位置する。確認面は北東部が重複で明らかでない。長軸0.77m・短軸0.59mで、南西に拡がる卵形のプランを呈する。壇壁は傾斜が急で全体にカーブし底面に続き、深さ0.62mを計る。底面はU字状で平坦面は少ない。

遺物は曾利Ⅲ式土器の破片が、土壙の中央部の中位に集中し、上部では若干の縦之内式土器の小破片が検出されるが混入と考えられ、本址の構築は曾利Ⅲ期の可能性が強い。

また、重複関係は32号の壇壁部と切り合っているが、新旧関係は判定できない。数多くの土壙の重複群の南西端にあたる。

第70号土壙（第22図）

調査区南部西寄りの、E-14・F-14ライン上に位置する。長軸1.22m・短軸1.16mを計り、南西部が突出するがほぼ円形のプランを呈するといえる。壇壁はカーブして傾斜が緩く、北側は大形の地山の花崗岩が突出し、他の部分も小礫等の突出が見られる。底面は壇壁付近で若干高くなるが、中央は平坦面が拡がり、底面は、表面が平坦な礫が一部くい込むように遺存している。

遺物は、五領ヶ台・曾利Ⅲ・縦之内式土器の破片が検出されるが、曾利Ⅲ式土器が主体となり土壙中位に集中する。五領ヶ台式は少量で、縦之内式は土壙上部から出土するため、本址の構築は曾利Ⅲ期としてよいであろう。

また、本址は重複関係を有さず、単独で散在する土壙の多い部分に位置している。

第71号土壙（第23図）

調査区北部の、F-7・F-8ライン上に位置している。確認面は北側が重複し不明である。長軸0.94m・短軸0.84mで西側に突出部を有し、五角形状もしくは台形状のプランを呈する。壇壁は東側と西側のごく一部しか上部まで残らないが、傾斜が緩く直線状で深さ0.48mを計る。底面は北寄りに下る平坦面で、北側に壇壁を切り込んで径0.2m弱の浅いピットを持つ。

遺物は縦文を施した土器片が数点検出されたが時期の決定はできず、重複関係は北西に80号・南西に56号・南東に77号が切り合っているが、いずれも壇壁部に限定されるため、土層観

察による新旧は判定できない。また、いずれの土壤も遺物がなくこの点からも本址の構築時期を知る手掛りを欠いている。

第72号土壤（第23図）

調査区中央部東寄りの、A—12・B—12ライン上に位置する。確認面は東半部が重複し不明である。北西—南東方向が短軸と想定され、0.65mを計り、長軸方向は1m弱と考えられ、長円形のプランを呈するようである。墻壁の傾斜は緩いが直線状で、深さは最大0.58mである。底面は西側の一部しか確認できないが平坦面をなし、人頭大の礫が長軸方向にならび、土壤中位に遺存する。

遺物は集石上に曾利Ⅱ式土器の大形破片が、土壤中央より南西に検出され、本址の構築は曾利Ⅱ期に属するらしい。

また、本址は重複関係を東側の41号と有し、41号は曾利Ⅱ期の遺物を出土しており、土器からは新旧が判明しないが、切り合いは、本址が41号を切っていることから、本址の方が新しくなる。

第73号土壤（第23図）

調査区北部の、E—8・E—9・F—9・F—8に位置する。確認面の東側は重複して不明で南北方向に長軸を有し0.87m。短軸は約0.8mと想定され、東側が幾分拡がるため現状は梢円形であるが、隅丸三角形状のプランとも考えられる。墻壁は直立するが底面近くでカーブし、底面はU字状に窪み、深さは最大で0.76mを計る。南寄りに大形の礫が2個浮いて残存し、底面のプランは梢円形となる。

遺物は曾利Ⅱ式土器の破片が多く、土壤中位に集中するため、本址は曾利Ⅱ期に構築された可能性がある。

また、東側は曾利Ⅱ期の遺物を出土した大形の43号と重複しているが、遺物の時期は同じで、切り合いによる新旧も判定できなかった。

第74号土壤（第23図）

調査区北部の、D—7・D—8・E—8・E—7に位置する。確認面は南部が重複で不明瞭であり、東西方向0.93m・南北は現状では0.83mであるが重複部を含めても、長軸方向は東西にあると想定される。残存部から見る限り、南西方向に狭くなる卵形のプランを呈するといえる。墻壁は上部で直立するが、中位で傾斜が緩くなり、下部で再び急傾斜となるが、全体としては傾斜は急となる。底面は僅かしか残らず、南に下る平坦面で、深さ0.8mを計る。

遺物はまったく検出されず、土壤内は北寄りの墻壁沿いに人頭大の礫が一個浮いていたのみである。また、本址は南側を47号と重複しているが、時期が不明で、切り合いの新旧も判定できず、本址の構築期を知る資料に欠けている。

第75号土壤（第24図）

調査区北部の、F—6・F—7・G—7・G—6に位置する。確認面は東と北に重複があるが、残存部からは東西方向の長軸で0.95m・南北方向の短軸が0.8mの梢円形のプランを呈す

る。墻壁は北西側が急傾斜で、南東側は傾斜が緩く、墻壁の途中から礫が突出し、深さ0.48mを計る。底面は平坦面が拡がっている。

遺物はまったく検出されず、時期決定の資料を欠く。また、重複関係は東が94号・北が78号でともに出土遺物がなく、切り合いによる新旧も判定できず、本址の構築時期を知ることはできない。

第76号土壙（第24図）

調査区北西部の、F-6・F-7ライン上に位置する。確認面の南東と北西は重複で不明瞭であるがこの方向に長軸があり、現状では1.05mであるが、実際には1.8m前後と推定され、短軸は0.89mを計り、細長い梢円形のプランを呈する。墻壁は直線状の急傾斜で、深さ0.48mである。底面は確認面と一致した長梢円形に平坦面が拡がり、東端では墻壁に接してピットを有するが、このピットも長梢円形で長軸は0.57mで、上部の拡がるU字形の断面を呈し、底面より0.25m深くなる。

遺物は井戸尻式土器の口縁部破片を中心に、小破片が土壙中位に集中することから、本址は井戸尻期の構築の可能性が強い。

また本址は周囲を78・79・52号と重複するが78・79号は曾利Ⅲ期の遺物が出土し、これらを切っているが、52号との切り合いは判定できない。

第77号土壙（第24図）

調査区北部の、F-8を中心位置する。確認面は北側と西側に重複があり、不明瞭で、長軸は南北方向で現状は0.95mであるが、1.4m前後と推定され、短軸も0.9m程度と思われ、梢円形のプランを呈する。墻壁は急傾斜で直線状であり、深さ0.45mを計る。底面は確認面と一致して平坦面が拡がり、墻壁寄りが僅かに低くなる。

遺物はまったく検出できず、時期決定の資料を欠き、重複関係も北側の71号・西側の56号とも時期を決定できる遺物がなく、切り合いによる新旧も判定できない。

第78号土壙（第24図）

調査区北部西寄りの、F-6・F-7・G-7・G-6に位置する。長軸1.05m・短軸0.59mの長円形もしくは梢円形のプランを呈する。墻壁は急傾斜の直線状で、深さ0.48mを計る。底面はプランと逆に拡がる卵形に平坦面が占め、南東半部は径0.45mの梢円形のピットが掘られる。このピットは底面より0.15mほど深くなり、底面は平坦となる。

遺物は井戸尻・曾利Ⅲ式土器の破片が検出され、曾利Ⅲ式土器が土壙中位に主体をなし、上部は井戸尻式土器が少量であるため混入品と考えられる。

また、本址は重複関係が、南東部の75号、北西部の76号とあり、76号は井戸尻期の遺物を出土していることから、これを切って構築されているが75号との関係は明らかではない。

第79号土壙（第25図）

調査区北西部の、G-6・G-7ライン上に位置する。確認面は東と南の一部しか残らないが、長軸は南北方向に0.94m・短軸は0.58mで北端部は不明確であるが、長円形のプランを呈する。

横壁は南側で傾斜が緩く、他は急傾斜で直線状をなす。深さは周囲の土壙の確認面より0.55mを計る。底面は長円形の平坦面が、確認面と一致して拡がっている。

遺物は曾利Ⅰ式土器の大形破片が土壙の中央部の中位より出土し、上部に井戸尻式土器の小破片が少量出土したが混入品と考えられ、本址は曾利Ⅱ期の可能性が強い。

また、重複が多く、南に85号・西に89・53号・北に52・76号と切り合いが認められるが、いずれも横壁の一部で、土層観察による新旧は判定できない。しかし、遺物からは井戸尻期の76号を切り、曾利Ⅱ期の52・89号・曾利Ⅳ期の53号に切られたことになる。

第80号土壙（第25図）

調査区北部の、F-7・F-8ライン上に位置する。確認面は外周部に重複が多く、東・北西・南西の一部しか明らかでない。長軸0.8m・短軸0.68mの円形のプランを呈する。横壁は急傾斜でカーブし上部は直立し深さは0.49mを計る。底面は平坦面が不整形に拡がる。

遺物はまったく検出されず、時期決定の資料を欠いている。また、重複関係は北が93号・南北が71号・西は92号と切り合っているが、いずれも時期を決定できる資料はなく、切り合いによる新旧も判定できない。

第81号土壙（第25図）

調査区北端の西隅、G-3・G-4・H-4・H-3に位置する。確認面は南西部が重複で不明瞭で、南北方向は最大幅0.62mで東西方向は測定できない。長円形もしくは円形のプランを呈する。横壁は急傾斜で底面付近からカーブし、上方に開くU字状の断面で、深さは0.25mを計る。

遺物は曾利Ⅳ式土器の大形破片を、土壙の上部と下部に位置し、曾利Ⅰ式土器の破片が土壙中央部に立っている。この曾利Ⅰ式の土器は、隣接する曾利Ⅱ期の土壙を切って本址を構築する時に出土したものを利用したもので、本址の西側の横壁の代用品的な意味で用いられ、東側に同様な土器は存在しない。その上下を曾利Ⅳ式土器ではさむように配置し、組合せの棺状の遺構を形成している。北西の82号は曾利Ⅱ期の遺物が検出されており、曾利Ⅳ期の本址は82号を切っていることになる。

第82号土壙（第25図）

調査区北西端の、G-3・G-4・H-4・H-3に位置する。確認面は南～東に重複がありはっきりしない。短軸は0.54mで長軸は推定で1m弱の長円形のプランを呈するようである。横壁は傾斜が緩く直線状で深さ0.35mを計る。底面は西側に下る平坦面が残る。

遺物は曾利Ⅰ式土器の破片が土壙の中央部の中位に検出され、本址の構築は曾利Ⅲ期の可能性が強い。

また、重複関係は北東に81号・南東に84号と切り合うが、土層観察による新旧は判定できない。しかし、遺物からは81号で曾利Ⅳ期の遺物が、84号は曾利Ⅱ期の遺物が検出されており、本址はその中間に位置づけられよう。

第83号土壙（第26図）

調査区北端の西側、G-6・G-7・H-7・H-6に位置する。長軸は東西方向で0.85m・

短軸は南北に0.81mのほぼ円形のプランを呈する。壇壁は北～西側上部で開く傾斜の緩いもので、南東部は底面近くから緩い傾斜であるが途中で直立し、深さ0.30mを計る。底面は東寄りに若干低くなる平坦面で、西に扁平な礫が底面に密着する。

遺物は五領ヶ台・曾利Ⅲ式土器の破片が、土壤の中央部中位に検出され曾利Ⅲ式土器が主体で、上部と下部には遺物はほとんどないため、本址の構築は曾利Ⅲ期としてよいであろう。

また、本址は重複関係を持たず、50・51・52・53号に包围されるが、西は調査区外で不明である。

第84号土壤（第26図）

調査区北部西端の、G-4・H-4ライン上に位置する。最大径1.28mの円形のプランを呈する。壇壁は東側で直立し、西側は急傾斜で上部が外部に向って開いている。底面は中央部が僅かに高くなる平坦面で、中央部は礫が密着し、深さ0.70mを計る。

遺物は曾利Ⅰ式後半～Ⅱ式土器が検出され、北東側は81号に切られ完存しないが、大形の土器片と礫の組合せで棺状の遺構を形成する。さらに土壤中央部は集石が認められ、この部分は黒色系の土層で、他の部分より黒味が強く湿度が高い。

また、重複関係は81・82号に切られ、南西部は51号が近接している。

第85号土壤（第26図）

調査区北部西側の、G-6・G-7・H-7・H-6に位置する。確認面は北部が重複で不明瞭であるが、東西方向の短軸0.48mで、南北方向の長軸は0.8m前後と推定され、梢円形のプランを呈する。壇壁は急傾斜で南は礫が密着し、深さ0.25mを計る。底面は平坦で北部に小礫が一個密着する。

遺物はまったく検出されず、構築時期を決定する資料を欠く。また、重複関係は北側に曾利Ⅲ期の遺物が出土した79号と切り合うが、新旧の判定は不可能であった。

第86号土壤（第26図）

調査区北部の、D-8・D-9・E-9・E-8に位置する。確認面は西側が重複し不明瞭であるが、長軸は南北方向で1.04m・短軸は0.9m前後で、梢円形もしくは南方が狭くなる卵形のプランを呈する。壇壁は上部が急傾斜で底面近くでカーブし、深さ0.82mを計る。底面は中央部がさらにもう一段薄くなり、ピットを有しこの底面はU字状で、内部に小礫が2個遺存した。

遺物はまったく検出されず、時期決定の資料を欠き、重複関係は西側で43号とその内部の67号とが切り合い、86号は67号には切られるが、43号との新旧は判定できない。

第87号土壤（第27図）

調査区北部西端の、H-6・H-7ライン上に位置する。確認面は北東部で重複してはっきりしない。短軸は北西～南東方向で0.91m、長軸は1.25m前後で長円形もしくは梢円形のプランを呈する。壇壁は傾斜が緩く、深さ0.26mを計る。底面は中央部が僅かに窪み、北西部の壇壁寄りに大形の礫が残る。

遺物は曾利Ⅳ式土器が底面に接して正位に出土し、その他は少量の土器片で、確認面に底部

破片が1点検出された。

また、重複関係は南東の88号が曾利Ⅲ期の、北東の53号が曾利Ⅳ期の遺物を出土し、遺物から本址は88号を切っていると思われるが、53号との新旧は明らかにし得ない。

第88号土壙（第27図）

調査区北側西端の、G-6・G-7・H-7・H-6に位置する。確認面の北半部は重複で明らかでないが、長軸は東西方向で1.44m、短軸は0.78m程度の長方形もしくは長円形のプランを呈する。塙壁は傾斜が緩く、深さ0.80mを計る。底面は中央が窪み西側は径0.60m前後のピットを有し、このピットはプラン外部に突出していることから、重複とも考えられる。

遺物は井戸尻・曾利Ⅲ式土器の破片が土壙中央部の中位に出土するが、井戸尻式土器は小破片でごく少量であり、曾利Ⅲ期の構築が考えられる。

また、重複関係は北半部で南より87・53・89号と切り合い、87・53号は曾利Ⅳ期・89号は曾利Ⅲ期で、いずれも本址を切っていたらしい。

第89号土壙（第27図）

調査区北部西端の、G-6・G-7・H-7・H-6に位置する。確認面は南北の極く一部に限定され、プランは径0.8m弱のほぼ円形のプランを呈する。塙壁は直立するが深さは0.1mに満たず、周囲の土壙の確認面からは0.46mの深さを有する。底面は北側に低くなる平坦面が残り、曾利Ⅲ式土器の完形品が、底面に接して出土し、それ以外の遺物はなく、本址は曾利Ⅲ期の所産と考えられる。

また、重複関係は東が曾利Ⅲ期の遺物を出土した79号・北が曾利Ⅳ期の53号・南が曾利Ⅲ期の遺物が出土した88号と切り合い、遺物から本址は79・88号を切り53号に切られていることになる。

第90号土壙（第27図）

調査区北部の、F-7を中心に位置する。南北に重複があり、東西幅は0.65mで、南北に長軸を有する、長円形もしくは橢円形を呈するようである。塙壁の残存部は直立し、東側は地山の花崗岩が露出し、深さ0.55mを計る。底面は平坦で、東西方面に拡がる。

遺物はまったく検出されず、重複する93・94号とも遺物はなく、土層も黒色系であるため、切り合いを判定するのは困難で、時期を決定する資料を欠いている。

第91号土壙（第28図）

調査区中央部の、B-11・C-11ライン上に位置する。確認面の東側は攪乱で不明であるが、最大径1.16mの円形プランを呈し、西側が突出する。塙壁は傾斜が緩く、深さ0.20mを計る。底面は中央部がやや高くなるが、プランと一致した平坦面が拡がる。

遺物は無文の土器片が少量で、時期の決定できる資料はない。

また、重複関係は持たず周囲に土壙はなく、単独で位置する。

第92号土壙（第28図）

調査区北部の、F-7・F-8・G-8・G-7に位置する。南北方向に短軸を有し、0.63m

で、東西方向に長軸を有するようで、楕円形もしくは卵形のプランを呈する。横壁は急傾斜で、深さ0.37mを計る。底面は平坦で、西端は径0.2mのピットを有する。

遺物はまったく検出されず、重複する80号も遺物ではなく、切り合いによる新旧も判定できず、時期決定の資料を欠いている。

第93号土壙（第28図）

調査区北部の、F-7・F-8ライン上に位置する。南北は重複して不明で、東西の最大幅0.71mを計り、ほぼ円形のプランを呈するようである。横壁は傾斜が緩く直線的で、深さ0.57mである。底面は西に寄って径0.30mのピットが掘られ、平坦面は僅かしか残らない。このピットはU字状で底面より0.1m程度掘り込まれる。

遺物はまったくなく、重複する80・90号も同様で、切り合いによる新旧も判定できず、時期決定の資料を欠いている。

第94号土壙（第28図）

調査区北部の、F-6・F-7ライン上に位置する。確認面は南部と西部が重複で不明であるが、北東一南西方向に長軸を有し、1.08mで、短軸は0.75m前後で、北東が狭くなる卵形のプランと想定される。横壁は急傾斜で、深さ0.60mを計る。底面は北東部と南西部にピットが掘られ、それぞれ外縁部に礫を有する。

遺物はまったくなく、重複は西が75号・南が90号と切り合うが、いずれも遺物がなく、時期決定の資料を欠く。

配石遺構（第4・5図）

調査区南端の、E-20・E-21・F-21・F-20を中心に位置する。この付近は耕作が浅く、他の土壙群の確認面もしくはその上面で、多数の礫が集中し、北・南東・北西に頂点をもつ三角形状をなす。これらの礫は大きさ・形状が不揃いで、拳大～人頭大さらには0.5mを越えるものも含まれる。また、中央部は上下に重なって、大形のものが上部に位置し、扁平なものもみられるが、敷石状をなさない。遺物は土器片が、礫の上面や礫の中に、そして一部は礫の下に検出され、礫の中には石皿の欠損品もみられる。以上から配石と称して、集石と区別することにした。

配石の下部には、調査区の本址より北に多数検出されたと同様の土壙が認められ、土壙群の性格を知る上で重要な手掛りとなるものである。

配石下の土壙は、4基の土壙が重複したものと同様の状況を呈し、便宜上北側の大形のものをA土壙・南西部をB土壙・南東部の北側をC土壙・南側をD土壙と区別する。

A土壙は直線状の多角形のプランを呈し、南東部は幅が狭く、もう1基重複していたと見ることもできるが、この部分を含めた北西一南東方向の最大長は2.24mで、東西方向が1.66mを計る。横壁は北東側が直立し、西側は傾斜が緩くなり、深さ0.27mを計る。底面は平坦であるが広いため途中に段差や、若干の凹凸が見られる。南寄りは径0.35m前後のピットが2個並列し、底面より0.1mに満たない浅い皿状をなす。北東部は横壁沿いに拳大の小礫が4～5個集中

するが、他の部分に礫は認められない。

B 土壇は、A 土壇のプランの南西部に突出するように位置する。北東一南北方向に長軸を有し、1.07m、短軸0.67mを計る長円形の整ったプランを呈する。横壁は直立し、深さは最大で0.58mを計る。底面は東側にかなり深くなり、底面上に礫が密着し一部は底面に埋まり、全面に礫が分布するが、上下に重複しない。

C 土壇は、A 土壇の南東端に接し、切り合いはない。南北方向の長軸で0.55m・短軸0.51mの椭円形のプランを呈する。横壁は急傾斜で東側は底面近くでカーブする。底面は南に深くなり、0.39mを計り、土壇内に礫は認められない。

D 土壇は、C 土壇の南でA 土壇の南東端に接し、プランの北側は不明で、長軸は計測できないが、北東一南北方向にあり、短軸は0.55mで、南東に突出する椭円形のプランを呈する。横壁は傾斜が緩くカーブし底面に続き、底面は礫が密着して散在し、深さ0.22mを計る。

土壤と配石の関係は、土壤群のプランと配石の範囲がほぼ一致しているが、B 土壇の南西部とD 土壇の南部に礫が少なく、土壤内部の礫も含めると、全域に礫が分布することになる。またプラン外部は北部・西部に礫が拡がり、大形の礫が多い。

遺物は土壤内部からの出土は皆無で、すべて配石に伴出したもので、A 土壇南端のC 土壇とD 土壇の重複部にかけて曾利V式土器の完形品が東西方向に横位で、配石に乗るように検出された。またプラン外の北部に散在する大形礫の南側より、重弧文土器の口縁部片が出土した。

住居址(第29図)

調査区南部の、C-15・C-18・F-18・F-15に位置する。確認面は礫が多く不明瞭な部分があるが、プランは脛部の嶺から膨らむ隅丸長方形を呈する。主軸は南に寄る東西方向で、5.27m、南北方向の最大幅は4.35mを計る。周壁は残存部が僅かで深さ0.1mに満たない部分もあり、床面との境界部で、傾斜は緩く不明瞭である。床面は平坦面が続くが、一部は地山の花崗岩が露出し、多数の礫が散乱し、中には床面にくい込んだものもある。また床面に張り床等の施設はなく軟弱で、柱穴の確認は困難であった。径0.3m弱のピットを6個検出し、主軸に合せたように配列されているが3個しかなく、南東部にはピットが検出できず、いずれも深さ0.4mを越えるものではなく、柱穴とは断定できない。

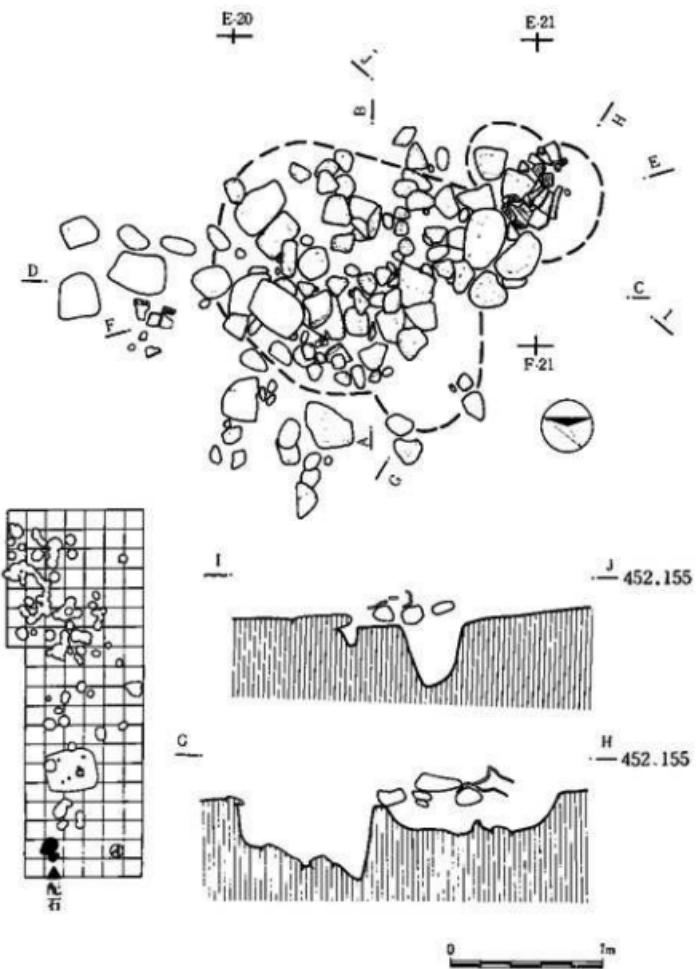
炉址はプランの中心部より東に寄り、主軸上に炉址の北辺が一致する台形状の石圓炉で、東辺は板状の石を、他は扁平な石を立てて炉辺を構成し、床面より5~10cm上部に突出している。内部は10cm弱で黄褐色土に達し、焼土は少量しか検出されなかった。炉址の北に接する様にピットが1個あり、炉址と主軸をはさんで位置しているが、この部分の炉石は湾曲していることから両者は密接な関連を有することが窺える。

炉の東側に、炉石と接して扁平な石が3個配され、いずれも平坦面を上に、床面と同レベルに位置し敷石と考えられる。幅0.5mで主軸方向では0.3mに満たないもので、周囲は礫が散乱するが、敷石に用いられたものではなく、部分的な敷石で破壊は受けてはいない。

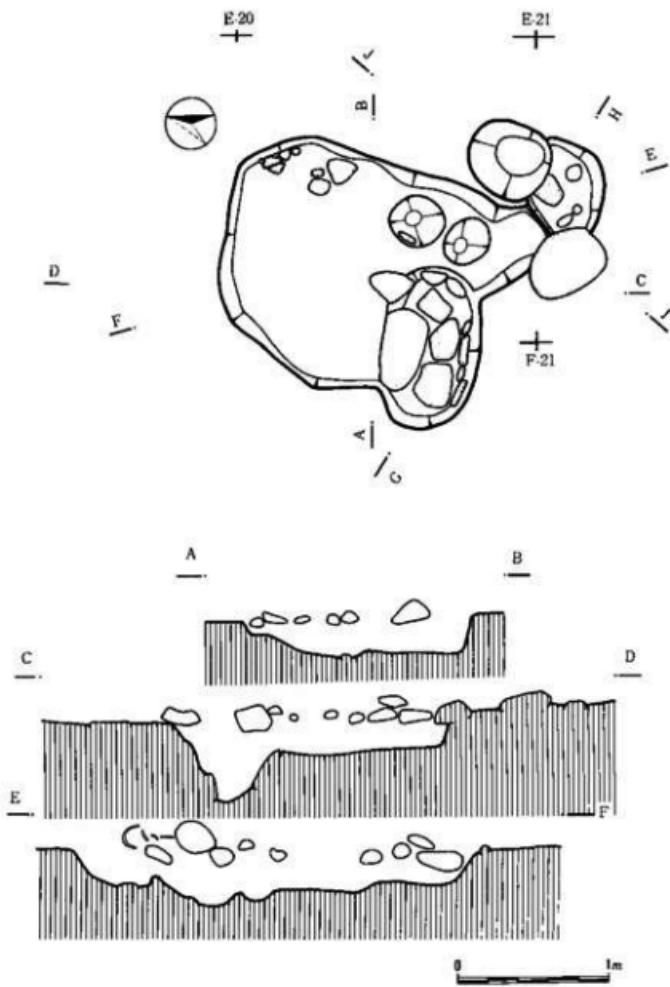
遺物は上部が削平されるため少ないが、土器片は床面より5cm前後浮いて検出され、プラン

の北半部に分布が密である。曾利Ⅲ式土器の小破片が多く、炉址の北側で中形の把手付土器が検出され、少量の五領ヶ台・井戸尻・堀之内式の土器片が認められるが、混入品と考えられ、本址は曾利Ⅲ期の構築となる。

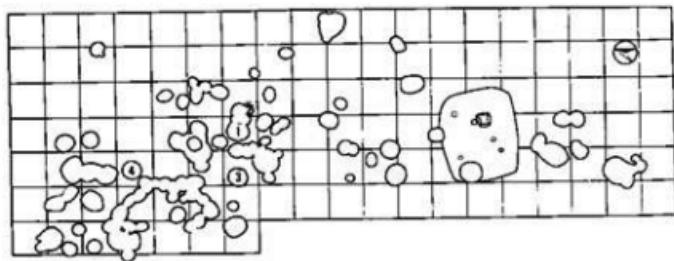
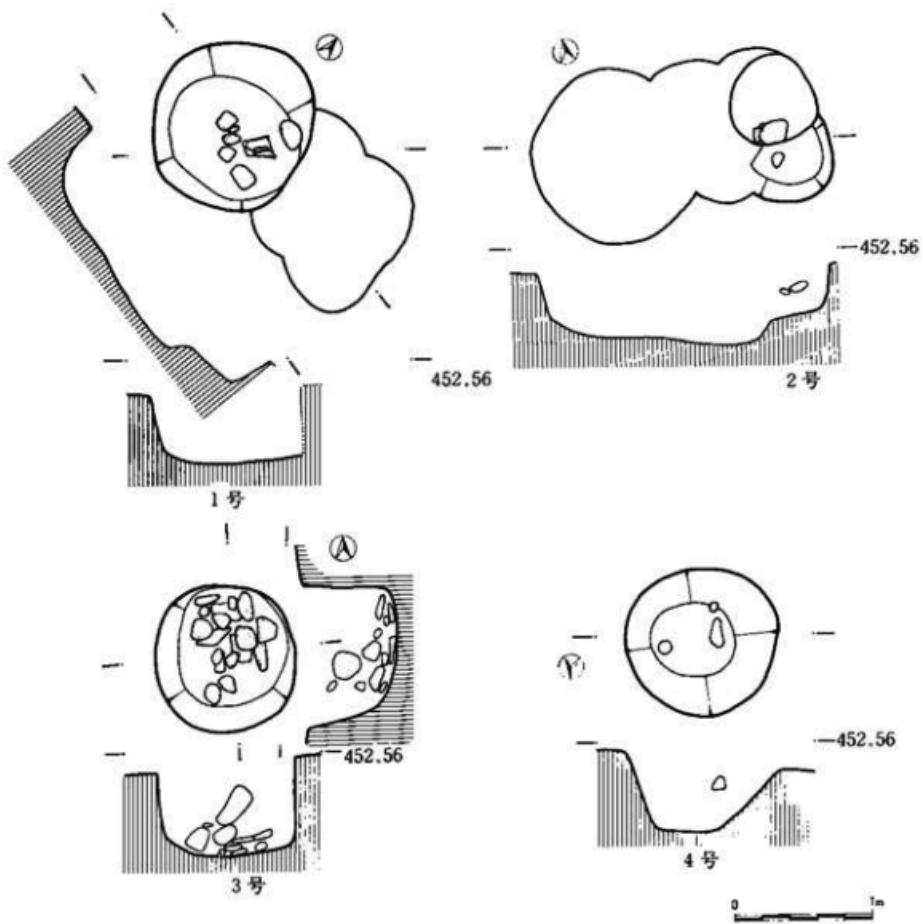
また、北壁上に59号土壙、西壁沿いに58号土壙に切られるが、両者は曾利Ⅲ期の遺物が内部より検出され、時間的な隔差は小さいと思われる。このことは58号が周壁と接して住居址の内側に、59号が周壁部のみを切って外側に構築されることからも窺えよう。



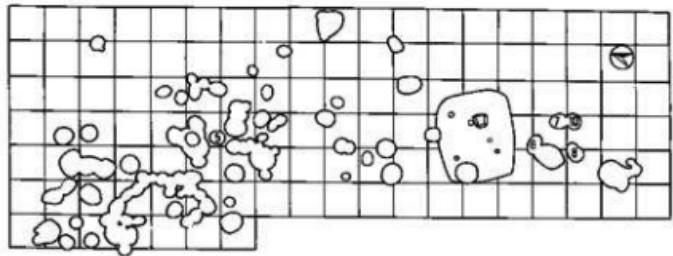
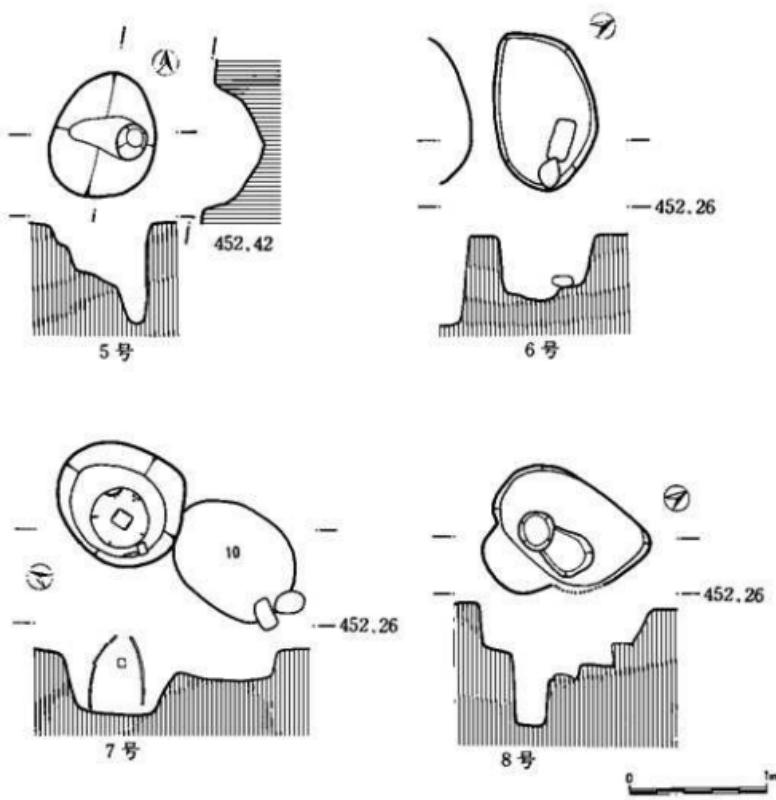
第4図 配石造構 その1



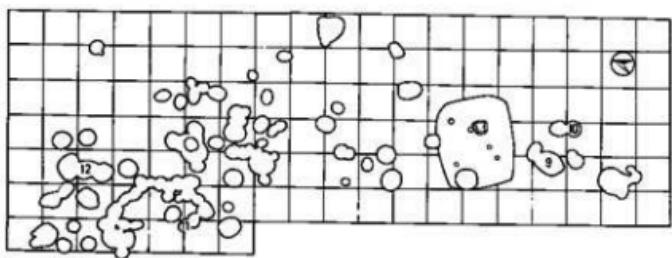
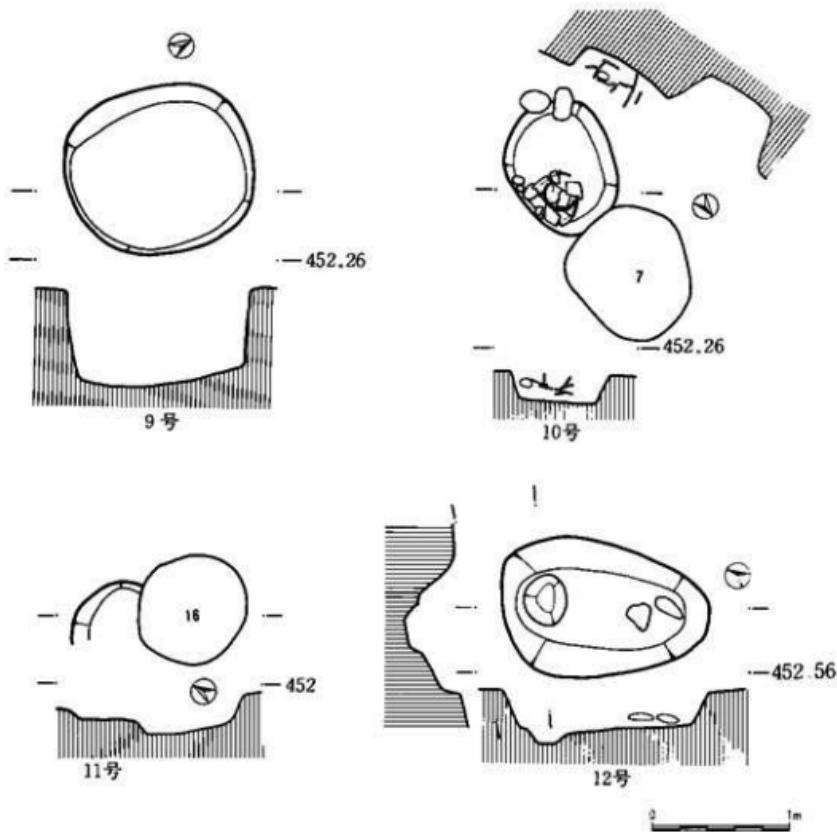
第5図 配石造構 その2



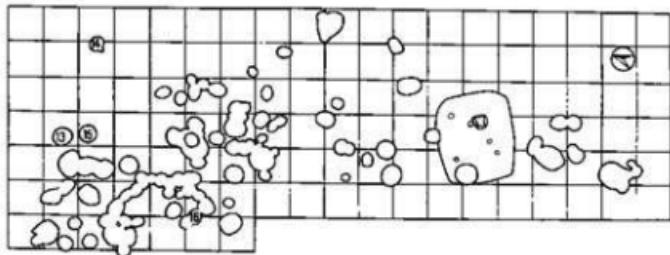
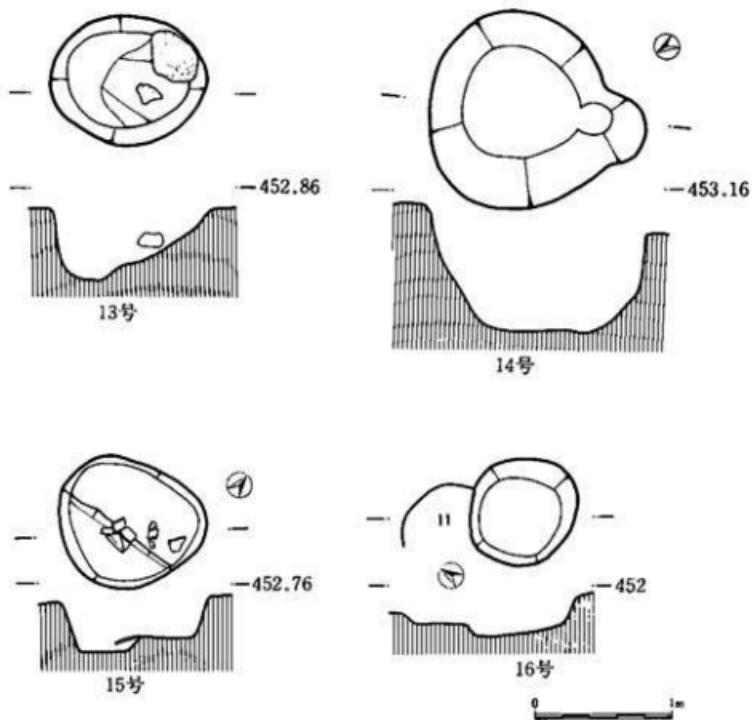
第6図 1~4号土壤



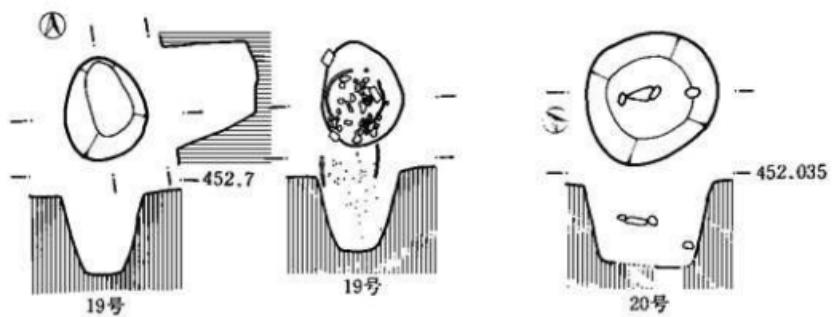
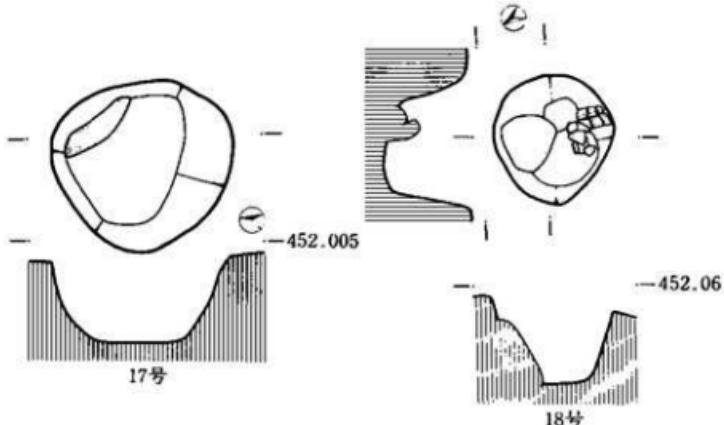
第7図 5～8号土壤



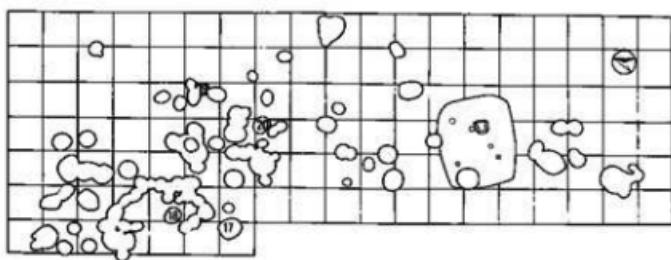
第8図 9~12号土壤



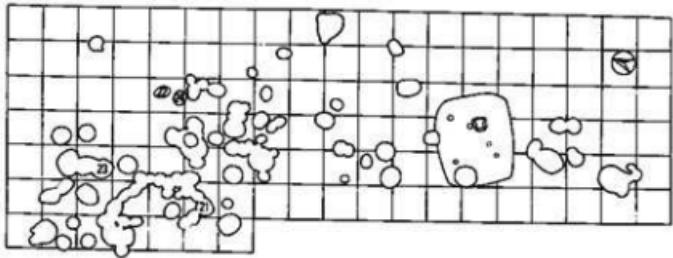
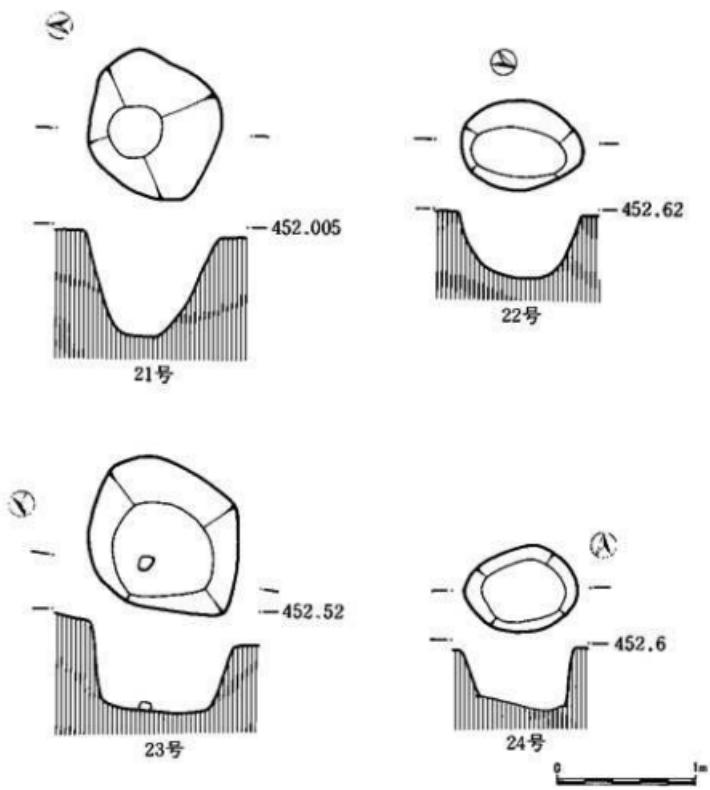
第9圖 13~16号土壤



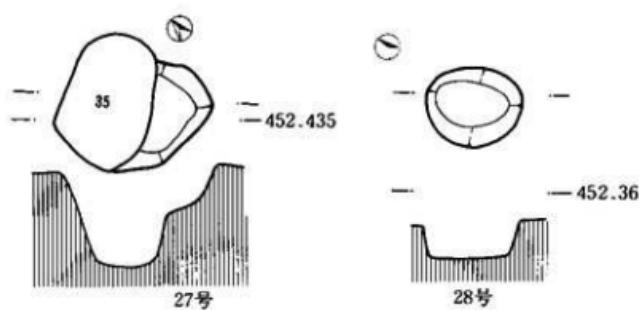
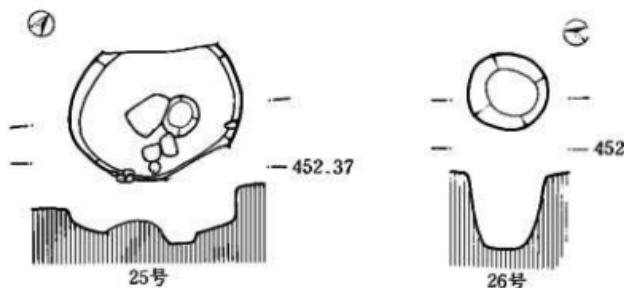
0 1m



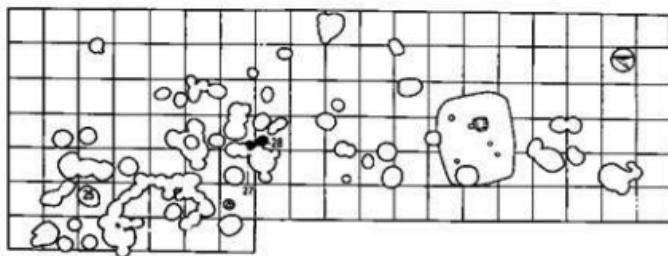
第10図 17~20号土壤



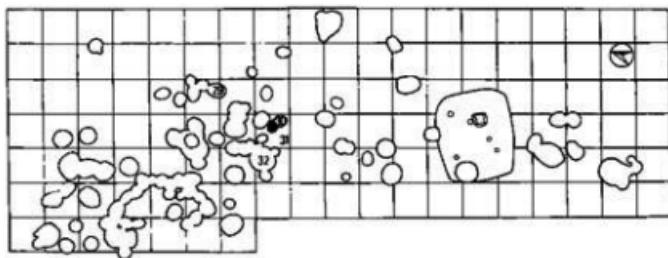
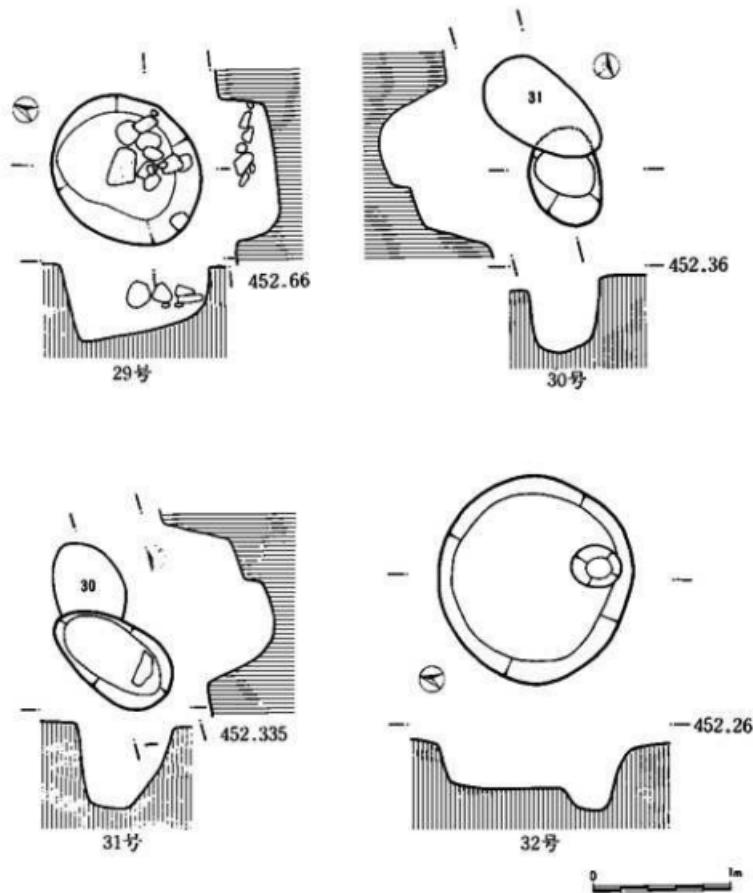
第11図 21~24号土壤



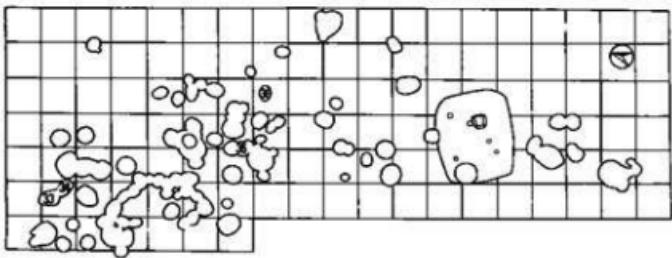
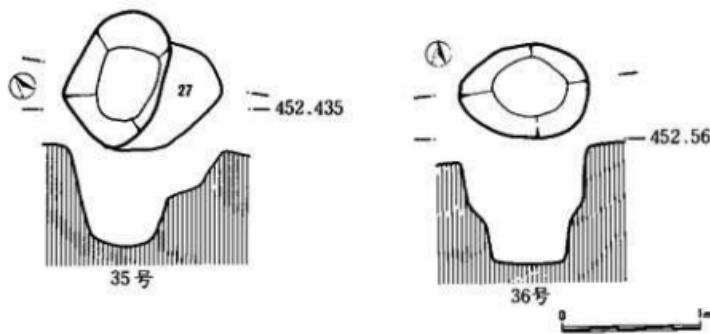
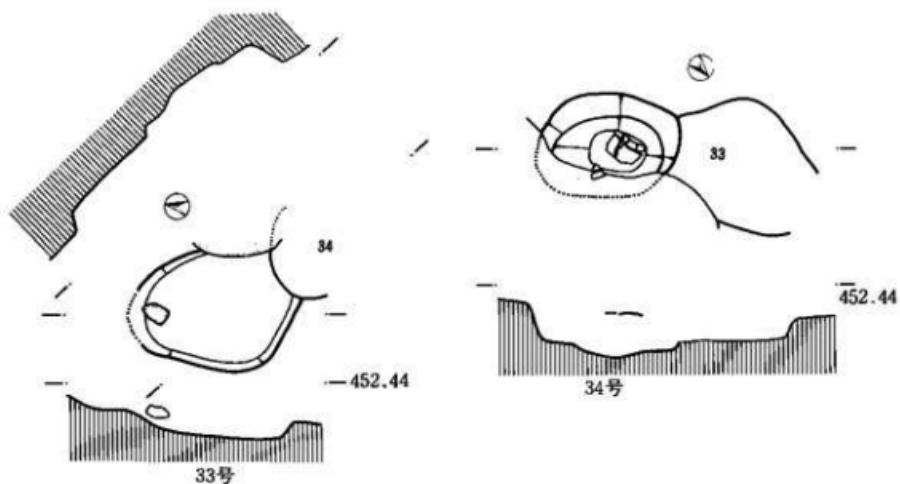
0 1m



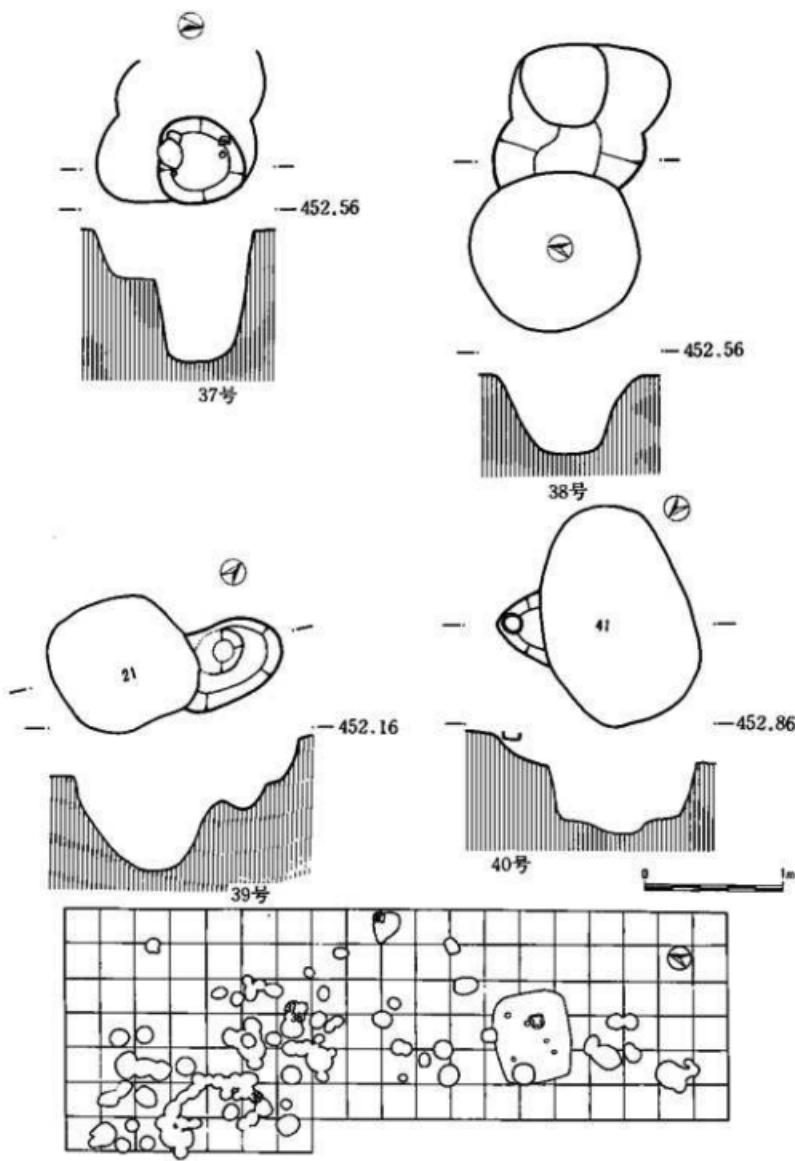
第12図 25~28号土壤



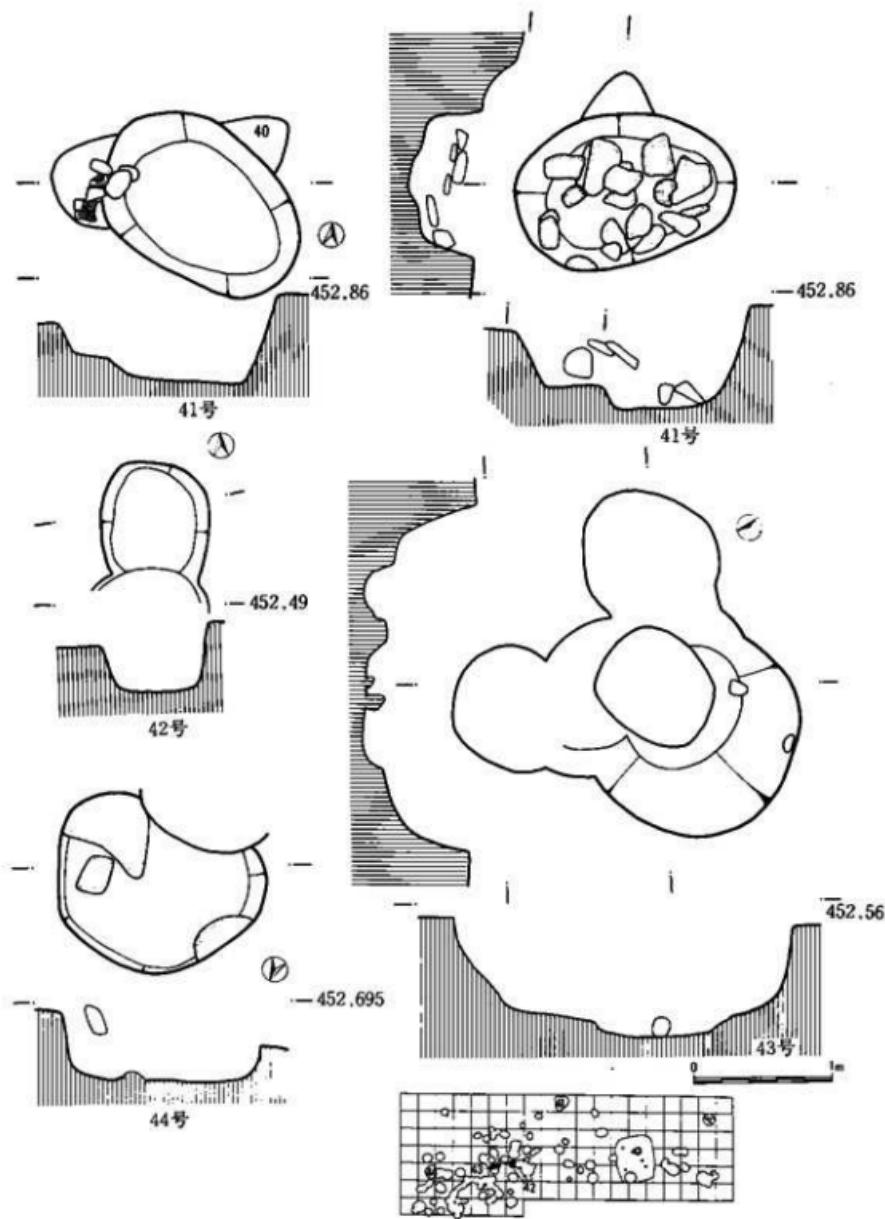
第13図 29~32号土壤



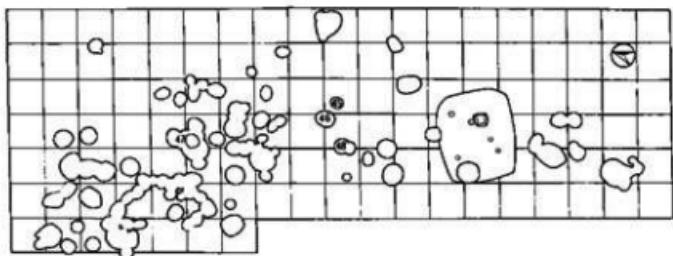
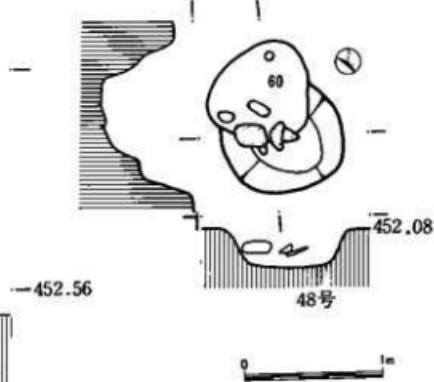
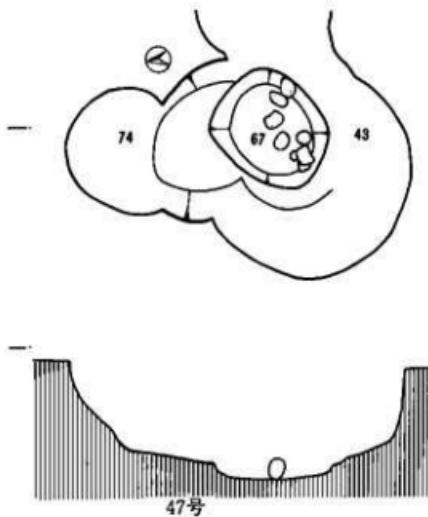
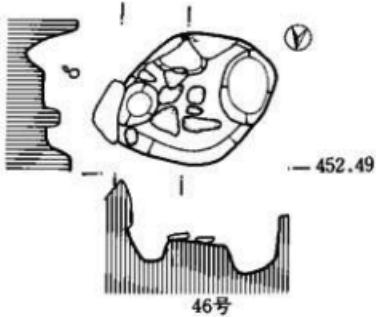
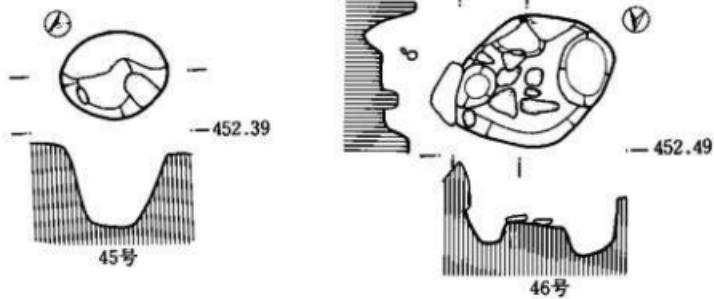
第14図 33~36号土壤



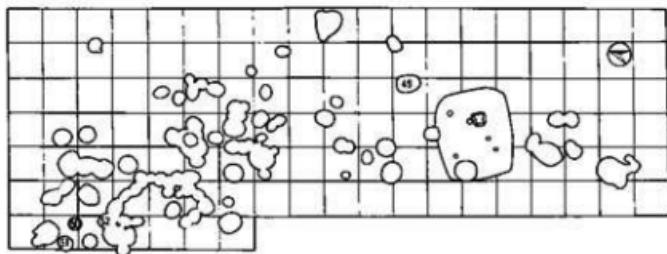
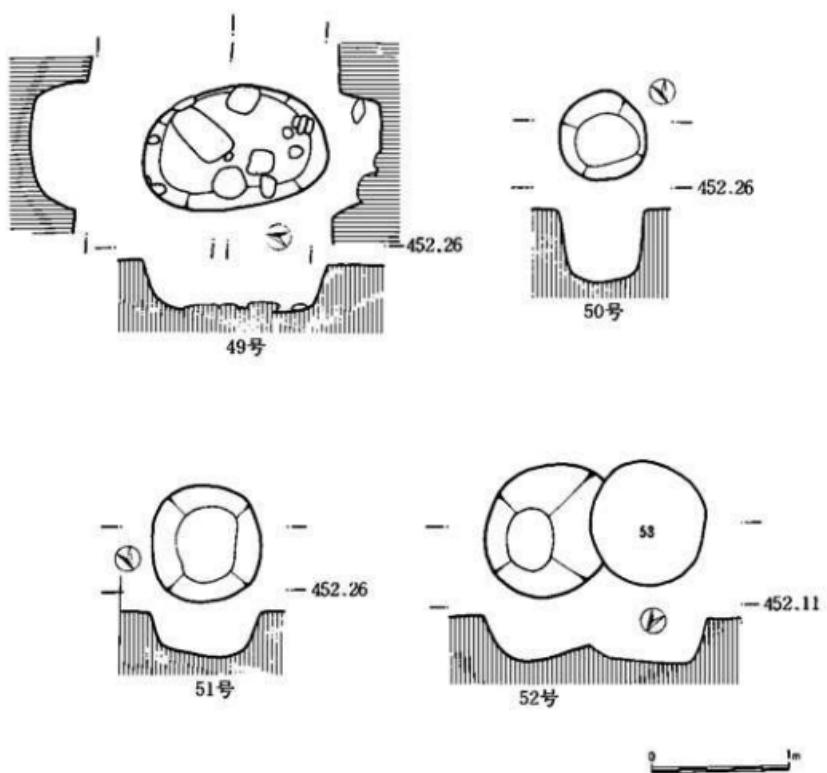
第15図 37~40号土壤



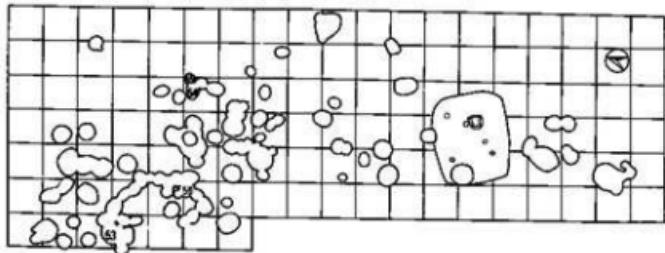
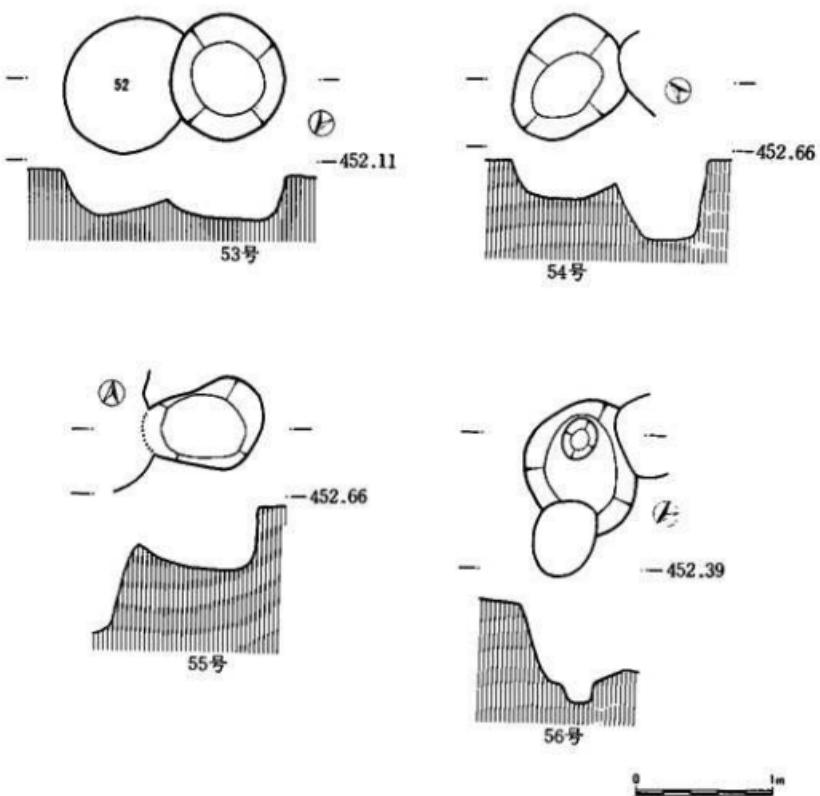
第16図 41~44号土壤



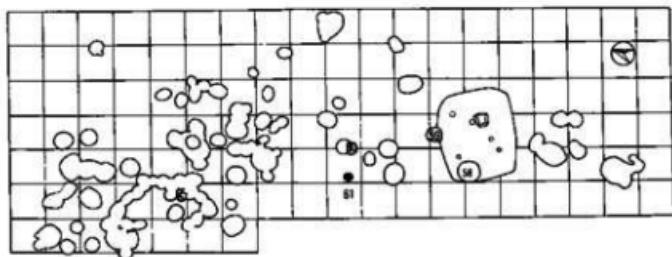
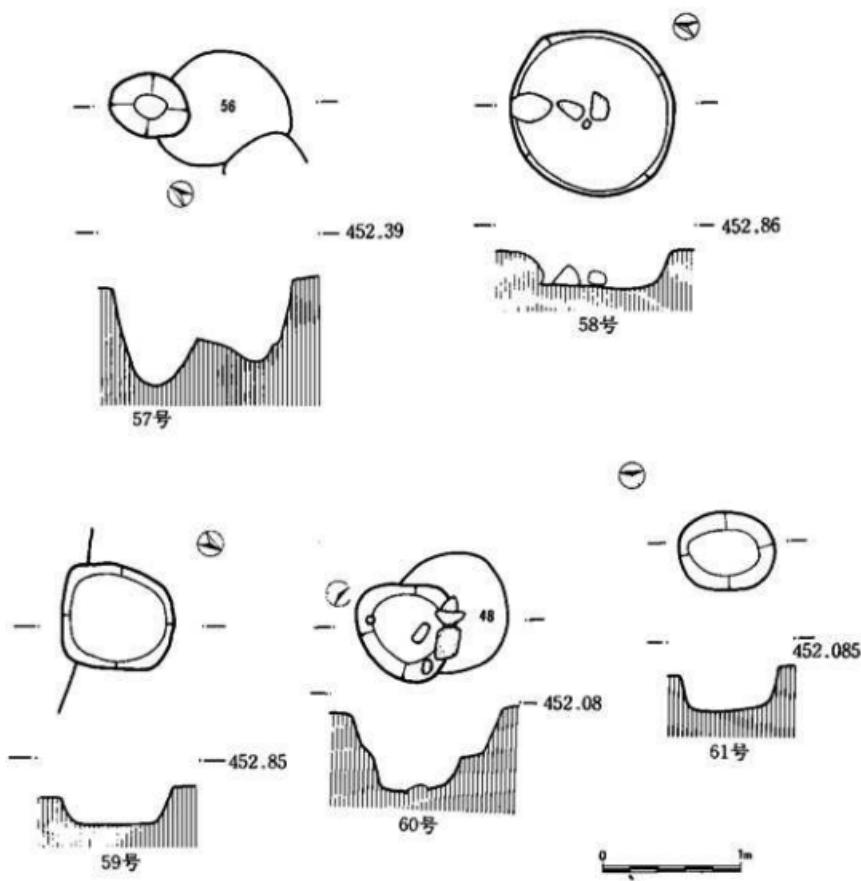
第17図 45~48号土壤



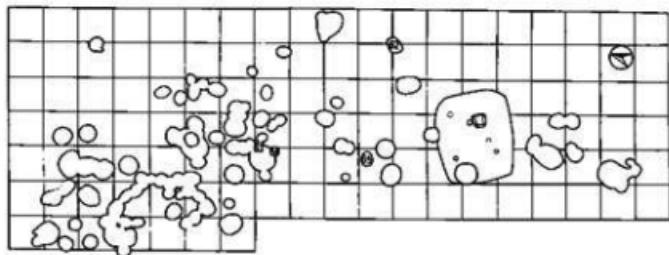
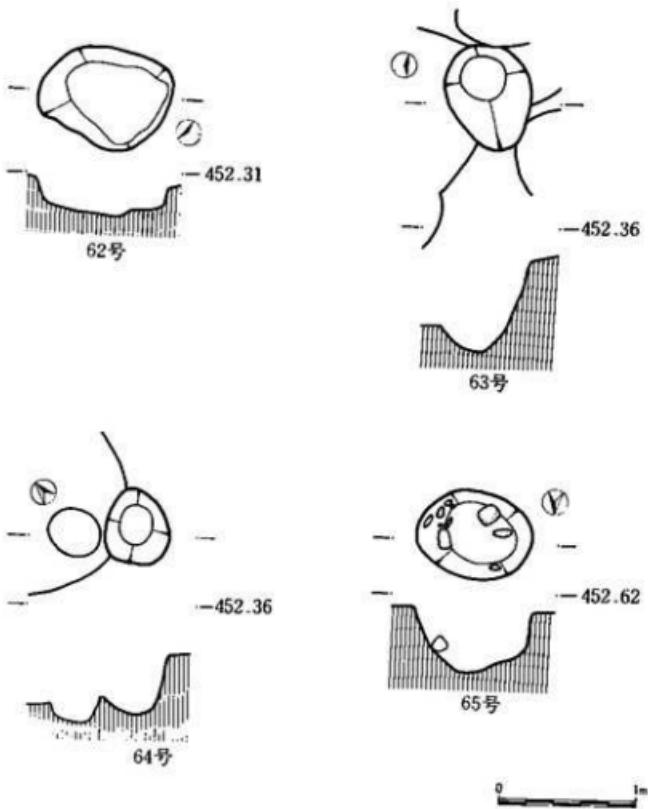
第18図 49~52号土壤



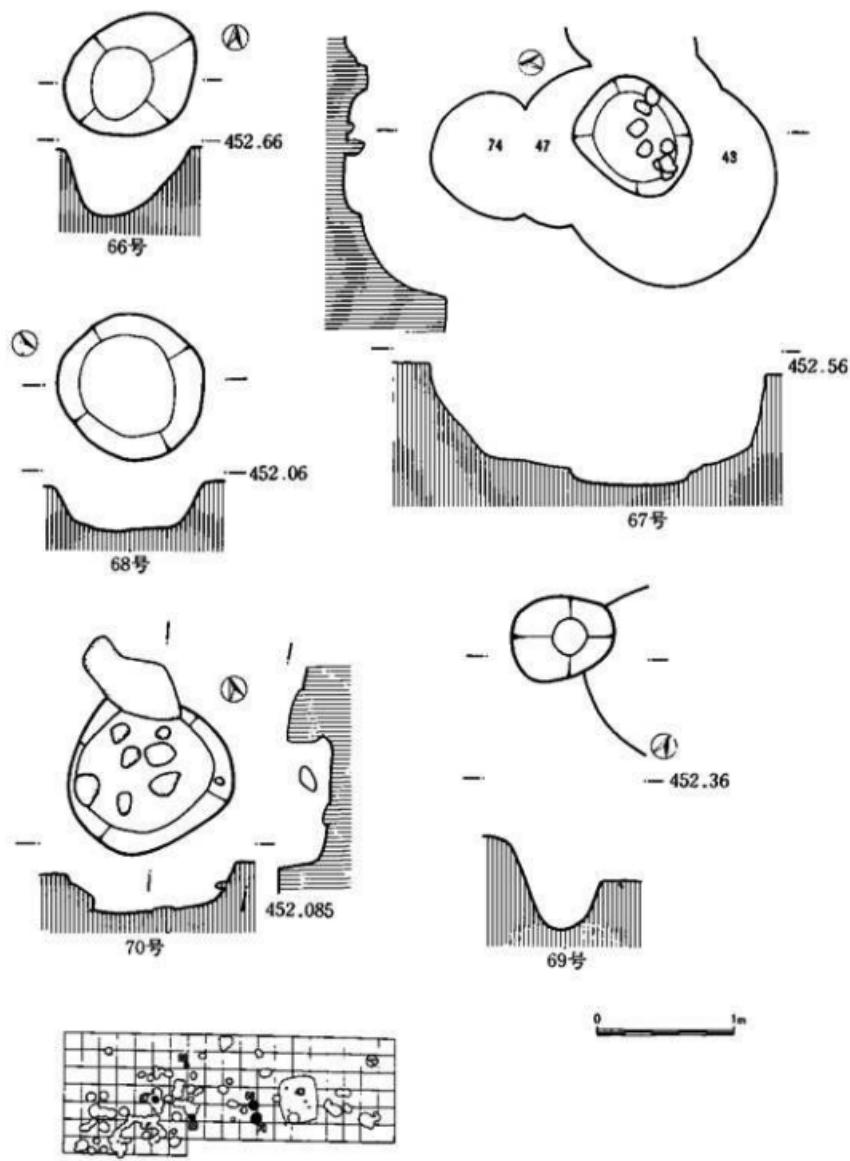
第19図 53~56号土壤



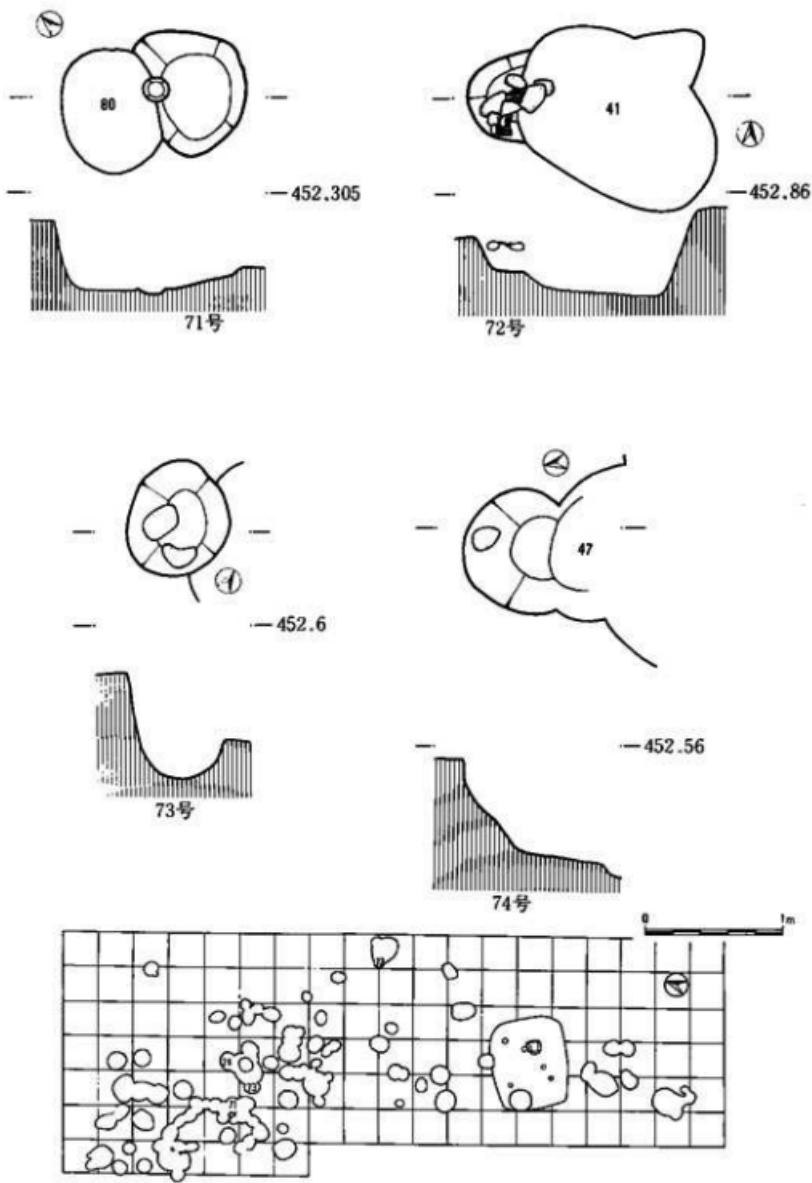
第20図 57~61号土壤



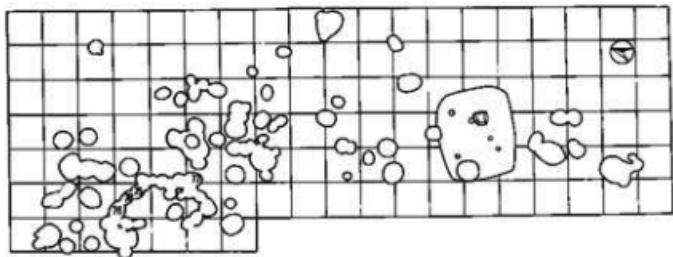
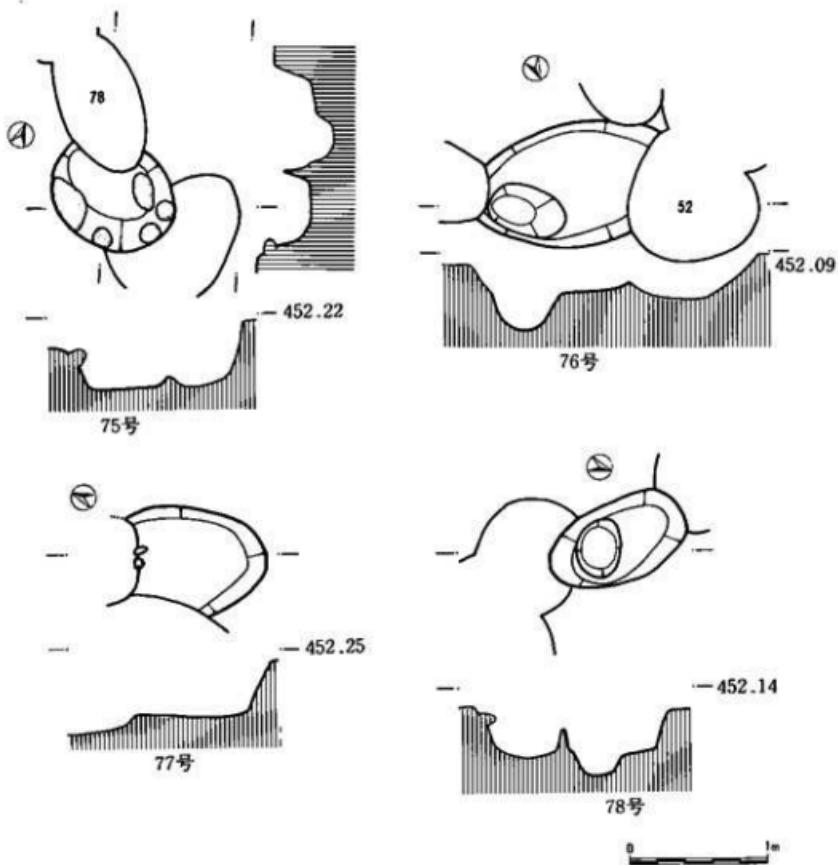
第21図 62~65号土壤



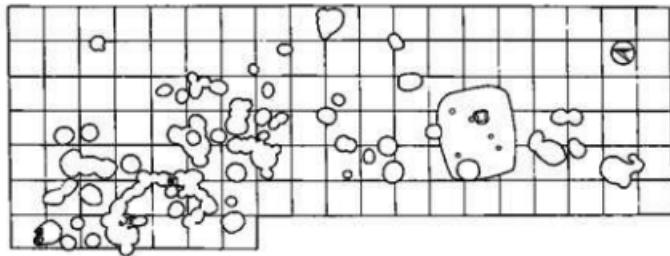
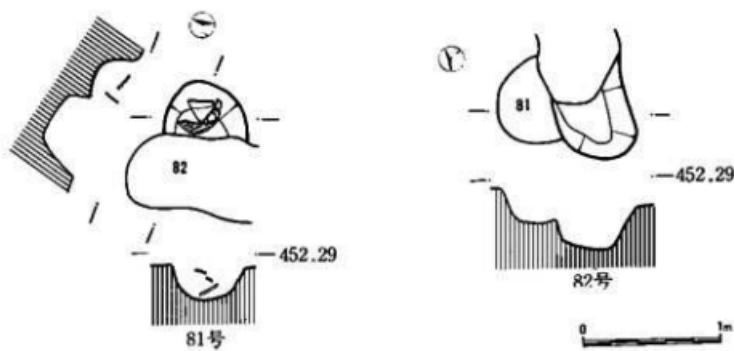
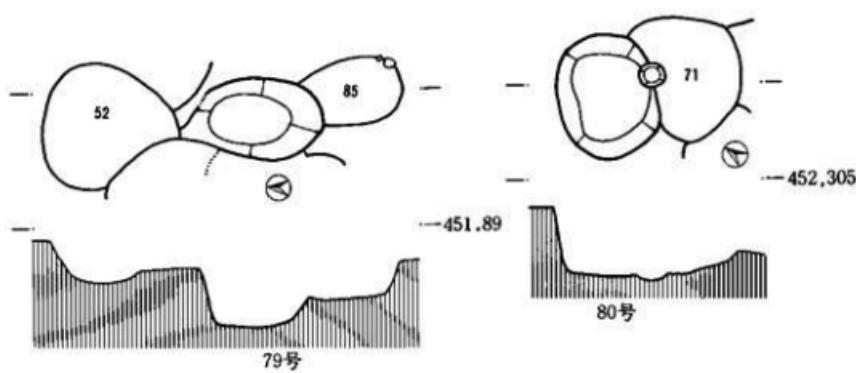
第22図 66~70号土壤



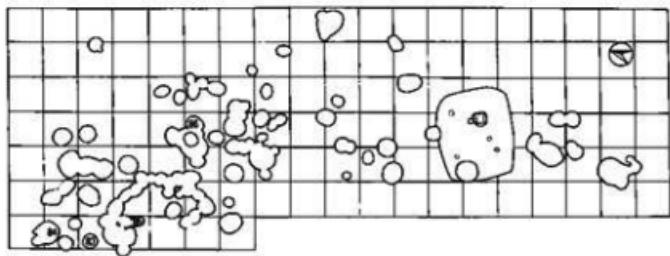
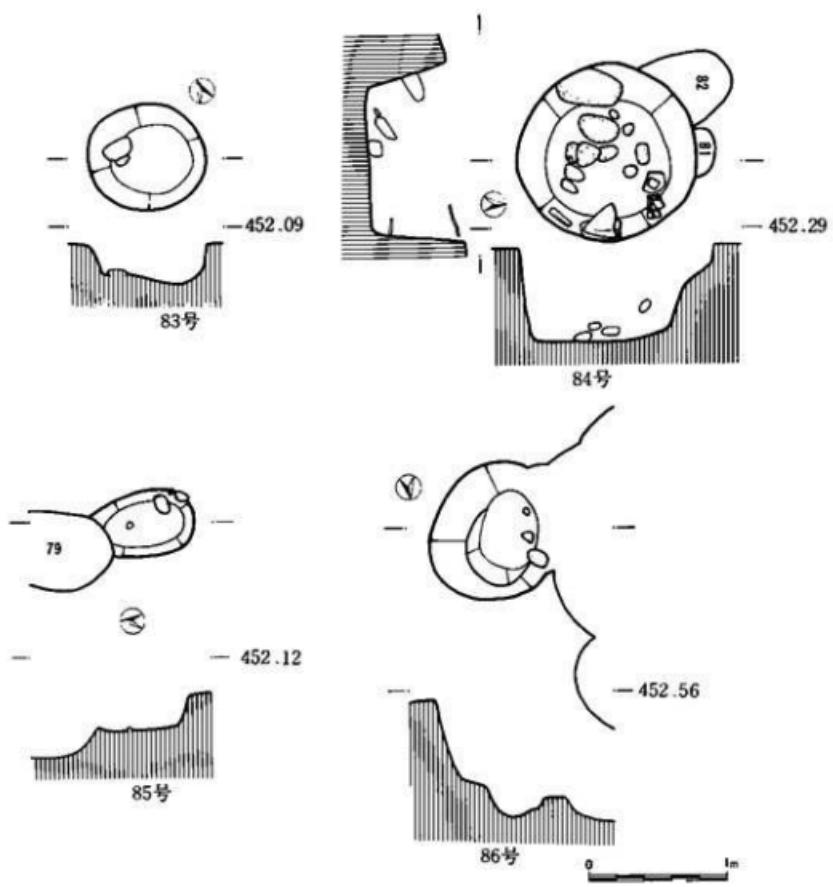
第23図 71~74号土壤



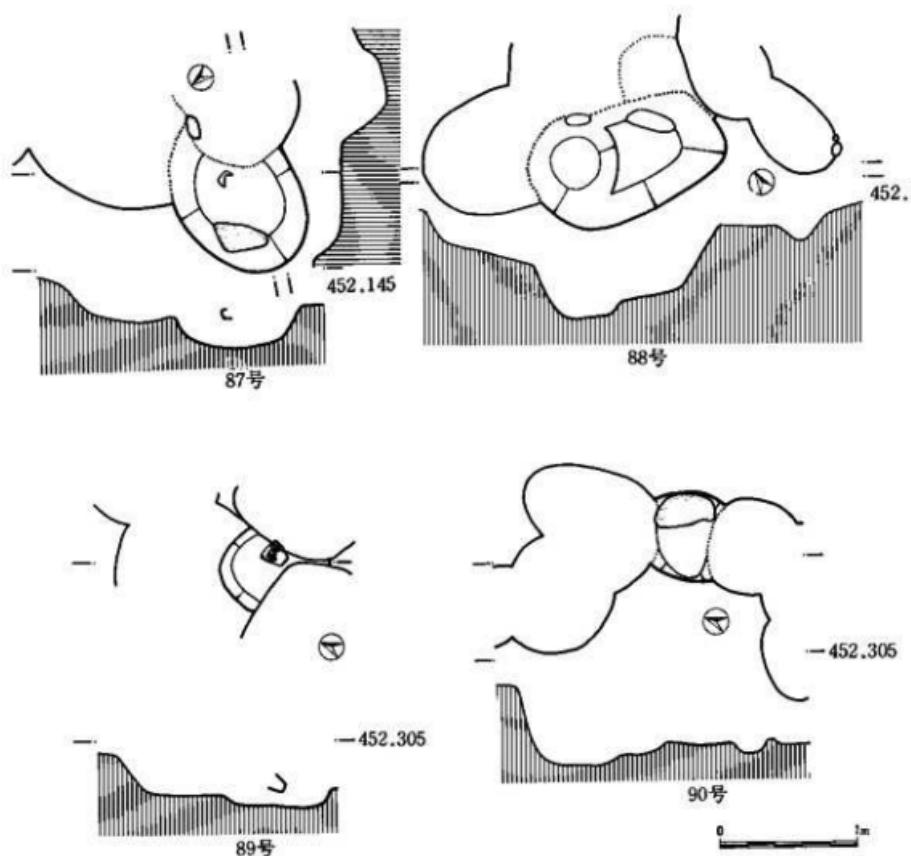
第24図 75~78号土壤



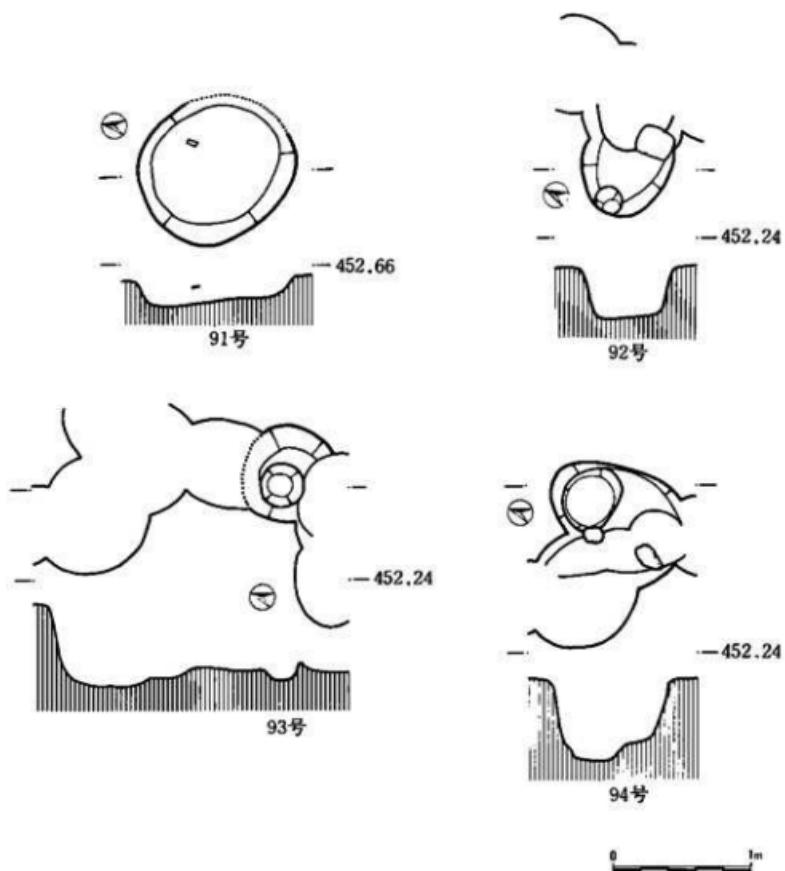
第25図 79~82号土墻



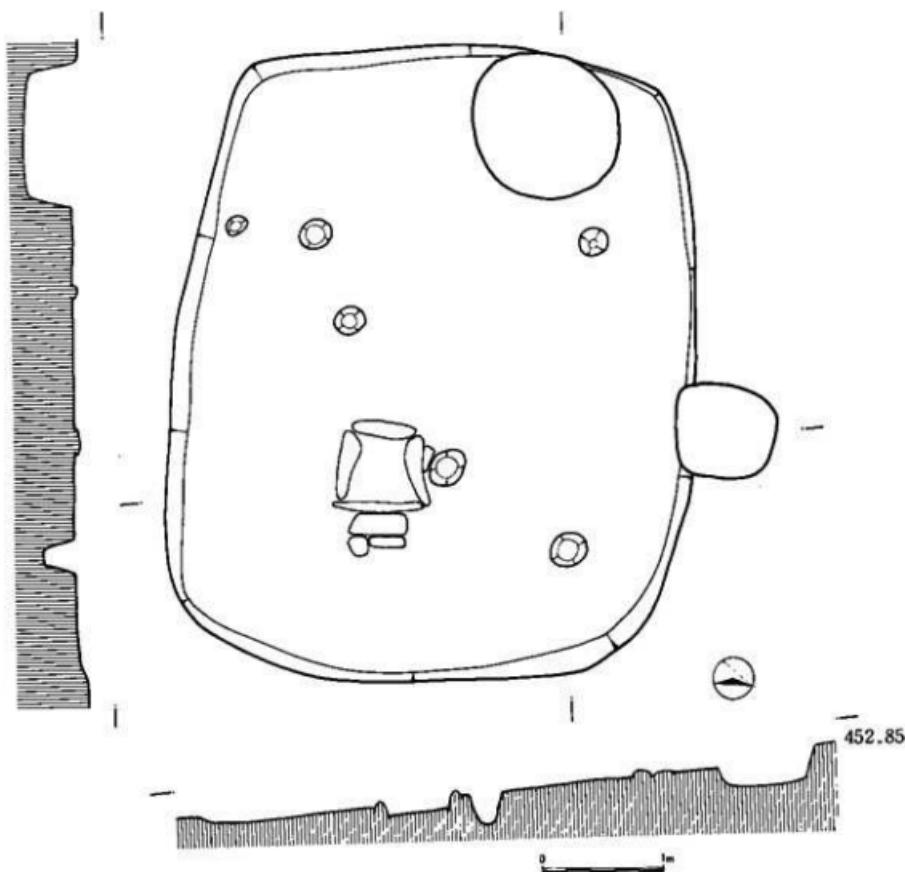
第26図 83~86号土壤



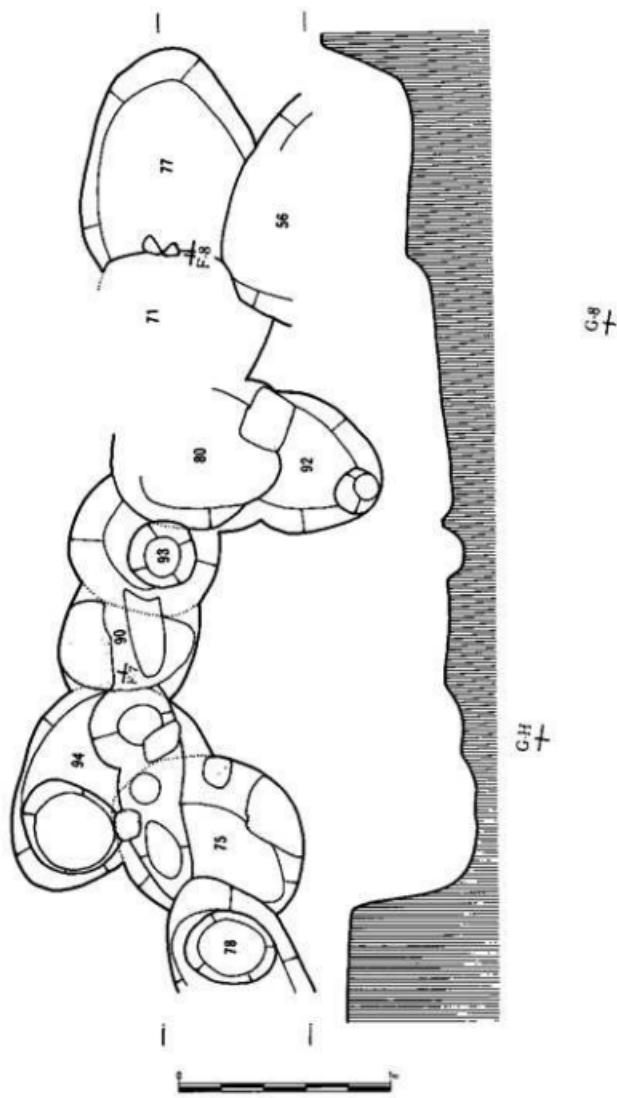
第27図 87-90号土壤



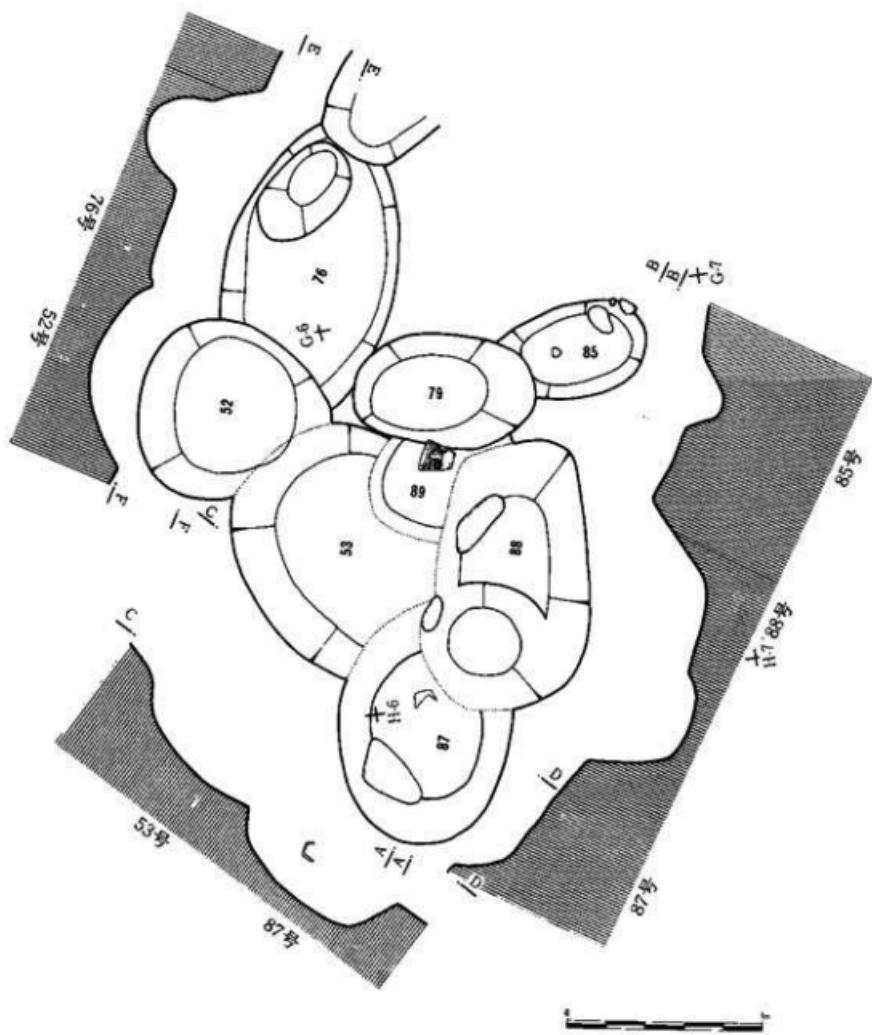
第28図 91~94号土壤



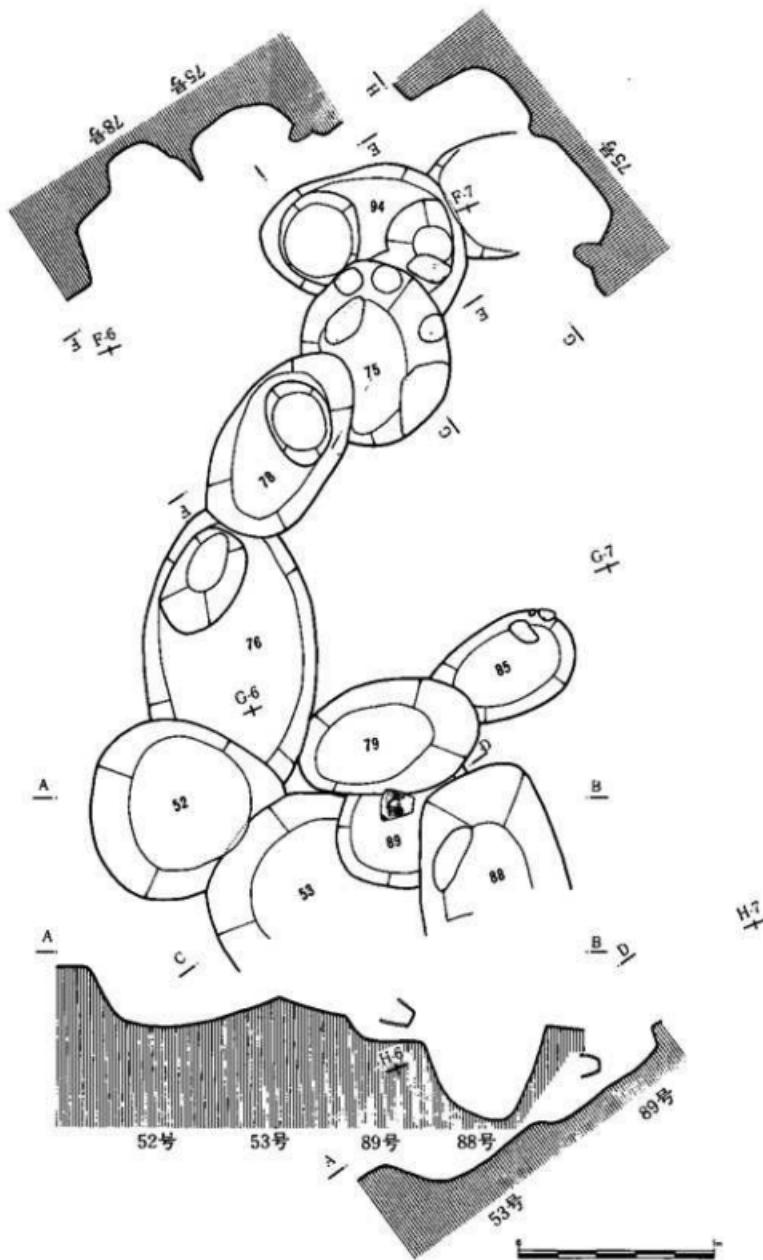
第29圖 第1號住居址



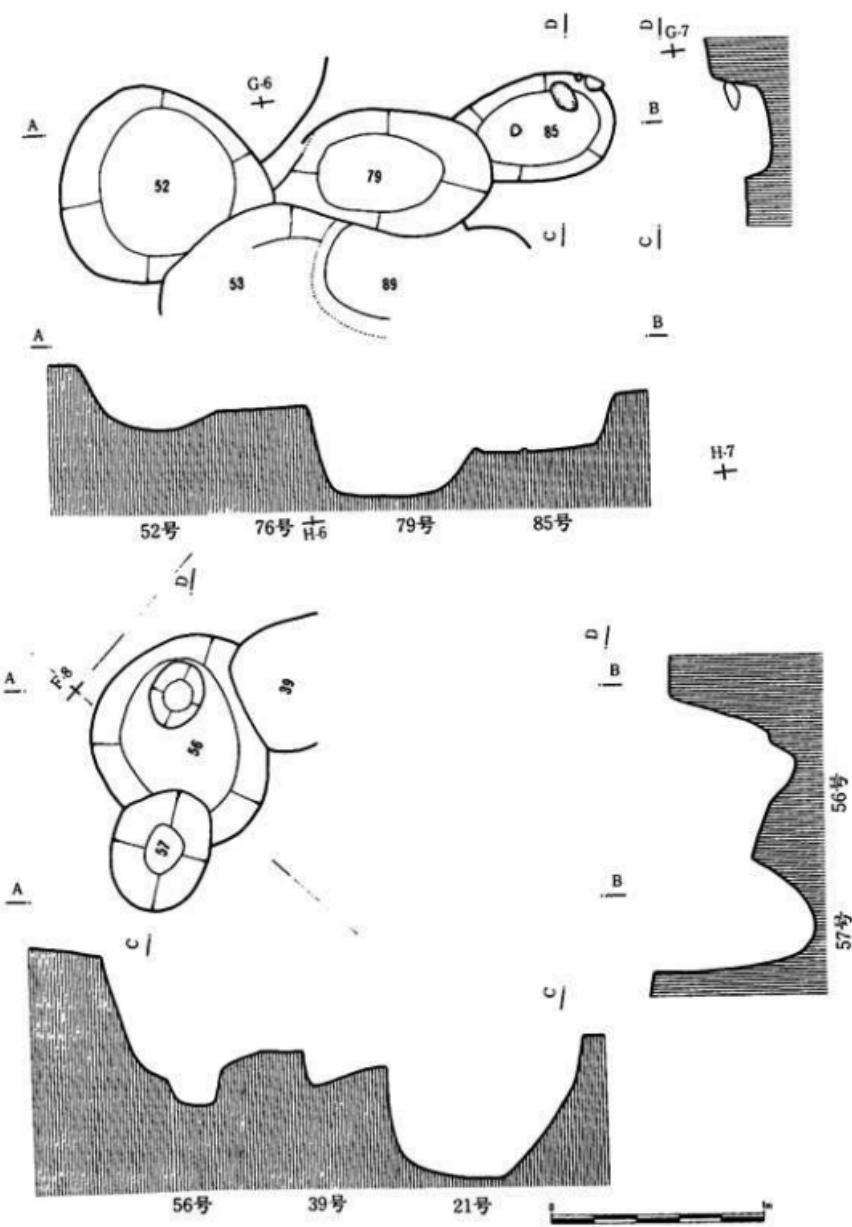
第30図 土壌群切合関係実測図



第31図 土壌群切合関係実測図



第32図 土壌群切合関係実測図



第33図 土壌群切合関係実測図

(2) 出土遺物

遺物は調査区の全域より多量の土器が検出され、石器類は石棒・雨垂れ石・石皿が少量出土した。土器は小破片が多く、土偶等の他の土製品は含まれず、すべてが容器としての土器類に限定される。

出土土器のうち、最も分布が広く、多量に検出されたのは、曾利I・II式に属するものである。しかし、本遺跡は住居址が1軒で他は土墳群が主体で、生活遺構内部の普遍的な廃棄状況や遺存状態とは異なるため、完形土器もしくは器形の復元できる資料は少ない。当然、土器のセット関係も追求できるものではない。

そこで、以下にまとめた土器の概要是、文様・文様帯の変遷・器形の変化等の、編年的分析や地域性の抽出までには至らず、土墳群の時期判定の補助手段としての分類に留まっており、混乱を避けるため『井戸尻編年』等既成の編年に準拠している。

第一群

縄文早期の茅山上層式に比定される。文様の特徴として口縁部に連続の圧痕が横位に施され、下半では条痕文が施される。本遺跡では図示の(48図-16)1点と他に2点が出土したのみである。いずれも胎土は纖維を含まず緻密で、焼成は良好で色調は茶褐色を呈し硬い。

第二群

縄文前期後半の諸磯B式に比定される。地文に縄文2段Rしが施され、その上に平行沈線文が施される。図示した(40図-40)を始め3cm前後の小破片で、焼成は悪く色調は暗褐色を呈する。胎土に石英粒子の混入が目立つが、器面は整形され平滑である。

第三群

本遺跡の中心となる縄文中期の土器を一括し、それをI~VII類に分ける。

I類

五頭ヶ台式に比定されるものをまとめた。口縁部では鋸歯状・波状文や印刻文等の刺突による施文に、沈線の集合文を組み合わせたものが主体をなす。中には、(50図-36)の様に地文に縄文2段Lを施す例も少量見られる。

鋸歯状文は(44図-39・47図-13)に示した様に、横位の沈線の中間部に小三角形の刺突を上下にずらせて交互に反復するもので、部分的には刺突が沈線からみ出したり、離れて孤立したり乱雑である。

波状文は、棒状工具の交互刺突によるもので、(44図-39・46図-45・47図-20)に見られる様に口縁部の最上部に1条巡らせる。(44図-33・50図-36)は縦位に波状文が施され、前者は縦位の沈線と接し、後者は単独で用いられる。

連続爪形文は(47図-19)の様に、口縁部の屈曲部に隆線を貼り付け、その上に爪形文が波状文と同様の位置に施される。

印刻文は波状文と組み合わせて用いられ、三角印刻文は正位の例（46図-2・55図-17）、逆位（44図-39・46図-2・45）があり、後者は周囲を平行沈線でY字状に区画するものが多い。（46図-8）は円形印刻文が沈線上に施される。

集合沈線文には、縦位・横位・斜位・交錯とバラエティーに富み、更にこれらが組み合わされる例もある。縦位沈線文は、等間隔で面的に連続するもの（42図-40・44図-41）、部分的に施されるもの（44図-33・34）がある。斜位のものは、三角印刻文の中間部を埋めるもの（46図-32）は単独であるが、多くは矢羽状に二方向のものを組み合わせた例には、（45図-27・46図-8）があり、前者は縦方向・後者は横方向と異なる。この部分が重複した斜格子文は、平行沈線で区画され、無文部と接するもの（48図-28）、他の集合沈線と接するもの（55図-28・29）がある。いずれも小破片で区画部が認められることから、狭い範囲に施文されたらしい。

平行沈線によるY字状の区画は三角印刻文との組合せが多いが、（40図-11）の様に地文の縁文の上から施されるものや、横位の例（55図-20）等の特異なものもみられる。口縁部は屈曲や隆線による肥厚が目立ち、平坦なものは（46図-8・47図-15）等が少なく、後者は浅鉢片で内面に3条の連続爪形文が施される。

屈曲する例は直立した先端部に、外方に強く突出し、下部は内側に伸びる器形（47図-19・20）で、破片は大形で器形も他の例より大きいらしい。

口縁端が膨らむものでは、外部に隆線を貼り付けたもの（46図-2・47図-13）、内部に隆起するもの（44図-39）があり、（46図-2）は上面が僅かに窪む。（46図-45）は逆に口縁先端が尖がる。

他の破片はいずれも胴部の小破片で、（41図-28）が肩部片である以外は部位を明確にできない。

胎土に金雲母が多く含み焼成が悪く、暗褐色を呈するものが多いが、（42図-40）は硬く、（47図-16・19・20）は茶褐色を呈する。

（34図-8）は40号土壙の出土品で底部が強く振り出す器形で、内部は直立する。器面は金雲母が目立ち、磨滅が著しい。底部は全周が完存するが、上部は欠損し土壙内で破片が検出されない。さらに、欠損部のレベルが増っていることからすれば、この部分を削って埋設用に使用されたものと考えられ、埋設土器としては完形品といえる。

I 類

藤内式に比定されるものを本類とした。隆線の両側に接して、連続爪形文を施したものには、（40図-38・43図-41）があり、隆線が屈曲し抽象文的なものもある。また、隆線上に細かい縞文を施すものでは、円形の区画文を構成するものが認められる。これらはいずれも胴部の小破片で、量的にも僅少である。

（41図-15）は本類に入れておいたが、巾広い沈線を平行させ結果的に中間部が微隆起し、斜位に連続する押し引きの小形の爪形文で、藤内期に先行する可能性もある。

Ⅲ 類

井戸尻式に比定されるものである。連続爪形文に加え、矢羽文・キャタピラ文等の連続文とともに、沈線による半肉状のモティーフが見られる。

連続爪形文は深い沈線に区画されたものが多く、縦位（56図-9）、屈折（50図-35）、斜位（47図-29）、カーブするもの（47図-30）で、前二者は周間に無文部が続く。

矢羽文は隆線上に施文されるものが通例で、縦位（53図-29）、横位（41図-13・50図-32・56図-11）、斜位（40図-34）等があるが、屈曲・屈折する例は認められない。（43図-25）の様な平坦な器面に施される例は少なく、中央に沈線を有する点でも他の矢羽文とは異なるようである。（56図-11）は途中から上下の交互刺突に変化するため、当然、隆線の巾に規制されるが、矢羽文の間隔とは無関係である。

彎曲の弱い連続爪形文をキャタピラ文として分離すると、（56図-5）の様な小形のものと、（56図-7）の様な大形のものに分かれる。前者は沈線により両側を区画するため、連続爪形文と近似する。図示した例は沈線が屈折し複雑になるが、爪形の方向は沈線の方向の変化に対応しきれていない。

浅い巾広の沈線を組み合せた半肉状のモティーフは、円形状（49図-1）、三角形状（42図-27・43図-37）、渦巻き（40図-34）があり、いずれも口縁部・屈折部の例が目立つ。

2本の平行沈線の上下を交互に刺突する文様は、内側に屈折する口縁上に施文された（53図-26）、横位（42図-37・50図-34・56図-11）、縦位～斜位（47図-30）があり、（42図-37）を除くと、上下の交互刺突が連続せず途中で沈線に変わる例が多いが、（56図-11）は矢羽文に変化する。

（41図-7）は縦位の平行する巾広の隆線に長円形の刺突が連続する例で、井戸尻末期に属するものであろう。

口縁部の形状は、水平で内側に屈折する例（53図-26）、外側する例（49図-1）、肥厚するもの（43図-23）があり、ほぼ器形を推測できる。（40図-34）は口縁部破片か把手部の破片で、これらは無文と沈線を組み合せた文様を持つ。

底部は（56図-7）で、屈折底という井戸尻期の特徴をよく表している。

Ⅳ 類

曾利1式に比定される一群である。施文の特徴は、隆線が盛行し地文に集合沈線が縦位に施される。（54図-7）は巾広の隆線を地文の集合沈線と同様に縦位に貼り付け、その両側を浅い巾広の沈線で地文と区画し、隆線上にも同様の沈線を用いるが、連続せず途中で切れてH字状をなし、上下に繰り返される。（45図-12）は平坦な口縁の一部に半円状の突出部を有する例で、隆線が突出部に合せて施され、下部は縦位に2本が平行して続き、この隆線の両側に円形の刺突文が連続する。

（36図-1）は84号土壤の礫と組み合せて棺状に用いられた埋設土器で、口縁部と底部を欠く大形土器である。頸部は沈線と粘土紐の貼り付けを交錯させ籠目状をなし、胴部との境は粘土

紐の波状文で区切られる。それ以下は縦位の集合沈線を地文とし、波状の粘土紐を懸垂文状に貼り付け、一部は直線状の粘土紐と組み合せて、H字状に施される。これは曾利Ⅰ式の後半からⅡ式の古式に比定されるものであろう。

V 類

曾利Ⅰ式に比定されるものをまとめた。深鉢は頸部に粘土紐貼り付けによる波状文を2条施し胴部と区画する。地文を沈線とする胴部は、粘土紐の縦位波状文や、直線の懸垂文と組み合された渦巻文が繰り返される(35図-6)。

浅鉢は口縁部が無文で、頸部には粘土紐貼り付けによる横位の波状文が、それ以下で縦文2段R Lの地文部を区画するもの(34図-2)や、無文の口縁部に続く頸部に、沈線による横位の長梢円形を呈する区画文が一周する。(35図-5)は三重の沈線による長方形の横帯文以外に文様はなく、口縁部は肥厚し内外に拡がる。器面は赤色顔料が塗布され、よく整形されている。これらの図示した3点はいずれも10号土壙の棺状埋設土器である。

籠目状文は(56図-1)に見られる様に粘土紐の波状文と組み合せで、二重の波状文の周期が一致するため縦長の菱形が連続する。(51図-3)は粘土紐の懸垂文上に円形の押し引きが連続し、(54図-2)は縦位の平行する粘土紐の両側に波状文を施す例である。

VI 類

曾利Ⅱ式に比定されるもので、本遺跡では出土量が最も多い。

口縁部には無文の例は少なく、(49図-20)の先端は欠損するが、口縁部で無文部と粘土紐の波状文を組み合せる。

籠目文は(39図-5・48図-2)に見られ、両者とも粘土紐が剥落するが、斜位に貼り付けられた痕跡が残り、沈線は垂直で地文の沈線を延長する。頸部で内側に屈曲し、波状文で文様帶を区画する。口唇部は肥厚し内側に突出するもので、両者とも器形が近似する。

重弧文は沈線巾に差が大きく、巾広のものは口縁部先端で施文方向が逆になるもの(58図-16・18)、変化しないもの(58図-20)に分かれるが、いずれも沈線が断絶し表面と口唇部内側は別々に施文され、沈線の狭いものは口唇部でも連続する。(39図-24・58図-19)また(57図-12)は小形の重弧文で、中間部に縦位の波状の粘土紐を貼り付ける。これらの重弧文土器片は配石に多く、施文は近似するが、個々に若干差異があり、同一個体とは考えられない。

区画文は巾広の沈線で横位に区画するもので、沈線を2本用いて中間部を浮き彫りにする例も多い。区画内は縦位の沈線(39図-20・48図-23・52図-1・57図-7・17)があり、縦文で充填する例は(55図-35・61図-17)で、前者は直立し、後者は彎曲する器形で方向が一定しない。(59図-24)は長方形の小区画を連続し、内部にも梢円形の隆線文を用い、他の区画文とは系統を異にする。

渦巻や円形による区画文は、いずれも器面がよく整形されている。縦位の集合沈線文を区画する巾広の沈線が渦巻くものは(43図-1・57図-18)があり、区画と区画の中間部から沈線が垂下するもの(57図-23・61図-5・61図-27)で、区画が完結しないもの(61図-18)、

無文のもの（55図-12）があり、いずれも区画内と外では地文が異なっている。（38図-34・48図-33）は地文のR L縄文上に粘土紐の貼り付けによる区画文をもつ例である。また（59図-15・16）は地文の縦位沈線上に連弧文的に区画を連続する。

その他では、口縁部に隆線を施すもの（57図-16）、巾広の沈線（51図-10）があり、いずれも横位で、地文の沈線と直交し口縁部を区別する。（58図-31）は縄文で外に開く器形である。

頸部は深鉢の破片が多く、籠目状文が目立ち、（52図-32・55図-34・61図-20）は粘土紐の波状文で上下を区画し、（59図-28）は粘土紐の平行線を波状文の内側に施す。（61図-20）は籠目状文の下に粘土紐の同心円文が続き、他は縦位の波状文が垂下する。

胴部片は縦位の沈線を地文とするものが主体を占める。粘土紐の波状文も縦位が多く、2本接近させるもの（40図-28）、直線との組み合せ（47図-6）、（55図-11）は地文が縄文で直線状の粘土紐を貼り付ける。

粘土紐貼り付け波状文のネガとなる蛇行沈線文も、地文は沈線文が主で、地文が斜行するもの（50図-18・51図-8）、地文が垂直なもの（57図-1・60図-18・25・28・33）があり、（57図-8）は蛇行沈線の左右で地文の斜行沈線の向きが逆になる。地文が縄文の例は（49図-24・59図-1）がある。蛇行沈線は2本平行に用いる例（49図-24・60図-28・33）もあり、（60図-25）は角ばっている。また、蛇行部の細かいもの、ゆるく大きく蛇行するものなど多様である。

胴部の渦巻文は粘土紐の貼り付けが多く、隆線を2～4本平行させるものには（42図-7・43図-22・48図-11）があり、波状文が伴うもの（53図-32）もある。（45図-1・47図-8）は小形の渦巻文が縦位の隆線と組み合される。いずれも地文は沈線で、（42図-7）は沈線の方向を変化させる。

（39図-1・52図-7）は把手部の破片で形態は異なるが、両者とも粘土紐の貼り付けで、その下端は円形となる。（34図-11・12）はX字状把手の破片で、把手部にも数条の沈線が施され、後者はさらに正面に爪状の刺突を連続する。

（34図-6）は住居址の出土品で、頸部に文様帯を有し、X字状把手で四分割され、一単位は半肉状の渦巻が対峙し、中間部に縦位の沈線を充填する。

（36図-2）は19号土壙の埋甕に用いられた土器で、正位に埋設されたため上半部は削平され残らない。おそらく頸部は貼り付けと半肉状の隆線の組み合せによりX字状把手が施されたものと思われ、胴部では縦位の集合沈線に五本の粘土紐が平行する渦巻文を横位に四単位用い、その中間部は波状の隆線が縦走する。

（34図-1）は89号土壙の出土品で、口縁部は楕円区画文が横位に2個ずつ連接して一周する。胴部は渦巻状文が2単位施され、区画内は沈線を充填するものと無文部が繰り返される。

（35図-2）は配石の外縁部よりの出土品で、口縁部は重弧文で頸部の粘土紐が後退して半肉状の隆線が3本とそれから下に伸びる懸垂文で、胴部は3～5本の隆線による渦巻文が横位に大小の繰り返しで連続し、地文は集合沈線である。

Ⅶ 類

曾利Ⅳ～Ⅶ式に比定される一群である。口縁部には2～3条の平行沈線が横走し、下部は沈線から伸びる縦位の沈線により文様帶が構成されるものが主体をなす。

地文は集合沈線が多く、(54図-12)の様な繩文の例は少ない。

口縁部の横走する平行沈線の最下部の1本は縦位の沈線との接合部で途切れる例もあり、縦位沈線の中間部は無文が多い(51図-6)。地文の沈線には縦位のもの(59図-18・60図-3)、斜位の例は縦位の沈線を境に方向が逆になるもの(49図-14・57図-15・59図-20)が多く、(60図-2)は一方が斜位で他方が横位の特異な例である。

曾利Ⅵ式のメルクマールとなる逆ハ字文の文様帶構成も同様で、口縁部の沈線の本数が少なく巾広となる。

(34図-3)は81号土壙の出土品で、口縁部の無文部と胴部の繩文を区切る沈線が横走する。地文は繩文2段RLである。

(35図-1)は配石よりの出土品で、口縁に2本の横走する沈線と、それから伸びる縦位沈線の間に繩文2段LRを施す。

(35図-3)も配石の出土品で、口縁部に横走する2本の沈線から垂下する縦位沈線は連弧文的にカーブし頸部に至る。頸部以下逆U字型の沈線が接続し、縦位方向の1単位をなす。地文は沈線による逆ハ字文が全面に施されるが、間隔が小さく一部交錯し逆ハ字文が独立しない。

(35図-4)は87号土壙の出土品で、口縁部に2本の横走する沈線で、下部のものは部分的に途切れ垂下し「」型となる。その区画内に縦位の集合沈線を充填し中央に大きく蛇行沈線を施す。

第四群

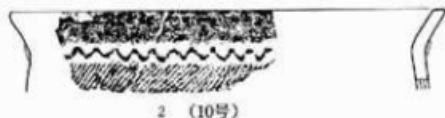
羅之内式に比定されるもので、器壁は薄く焼成は良好である。

口縁部の肥厚する把手状部は、円形の刺突が多用され(46図-26)はその間を太い沈線を屈曲させて結ぶ。波状の口縁部は僅かに隆起するもので、(49図-23)は口唇部にも沈線を施し、円形の刺突と沈線を組み合せる。口縁部は内外に施文される例が多く、刺突が貫通する場合も見られる。

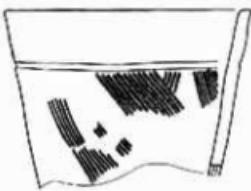
胴部では平行沈線の間に刺突を連続するもので、竹管状の工具を用いたもの(43図-2)、棒状の工具を押し引いたもの(46図-20)があり、平行沈線の屈曲に合せて施文が連続している。



1 (89号)



2 (10号)



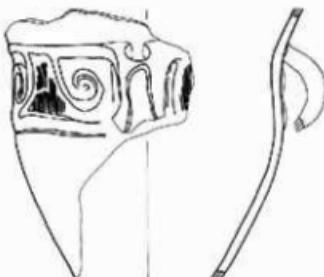
3 (81号)



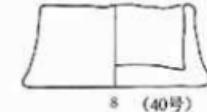
4 (15号)



5 (10号)



6 (1号住)



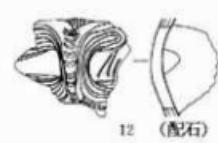
8 (40号)



11 (25号)



9 (1号)



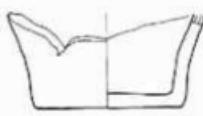
12 (配石)



13 (2号)



7 (84号)



10 (36号)



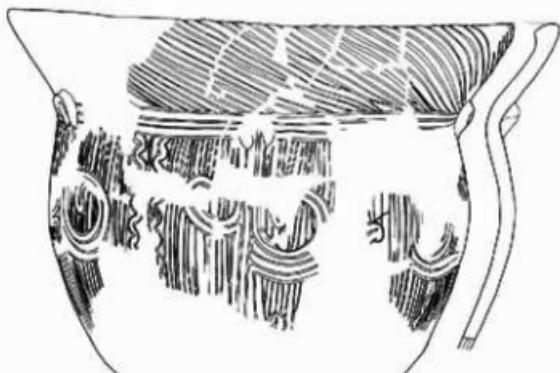
14 (3号)

10cm

第34図 土器実測図



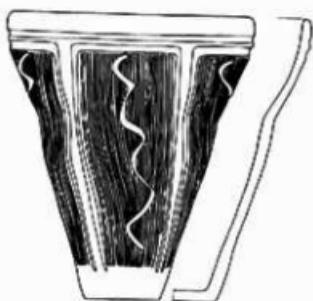
1 (配石内)



2 (配石外)



3 (配石内)



4 (87号)

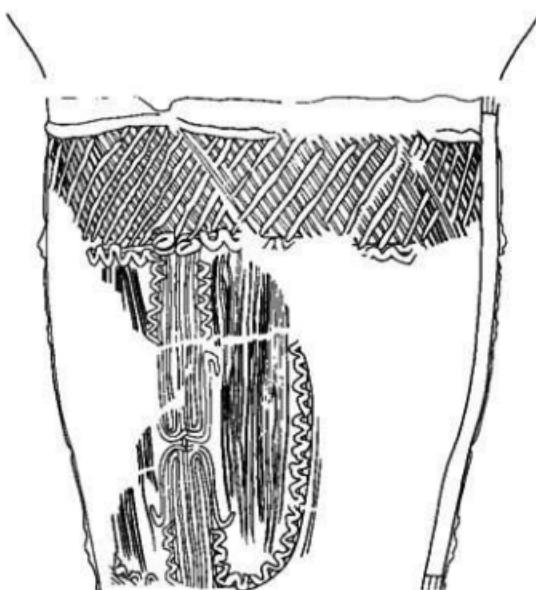


5 (10号)

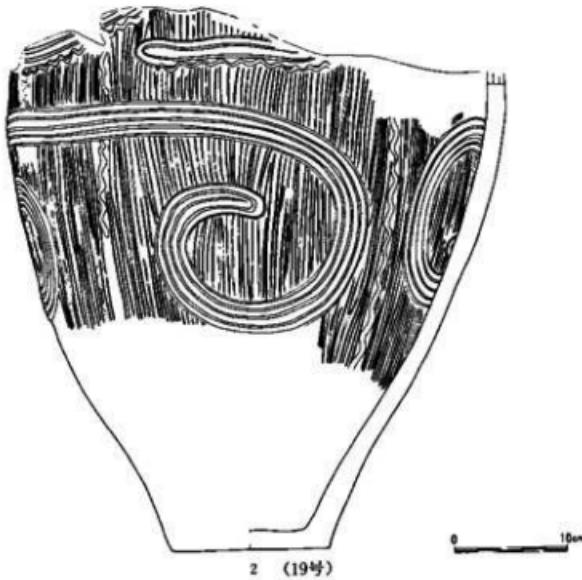


6 (10号)

第35図 土器尖剥図



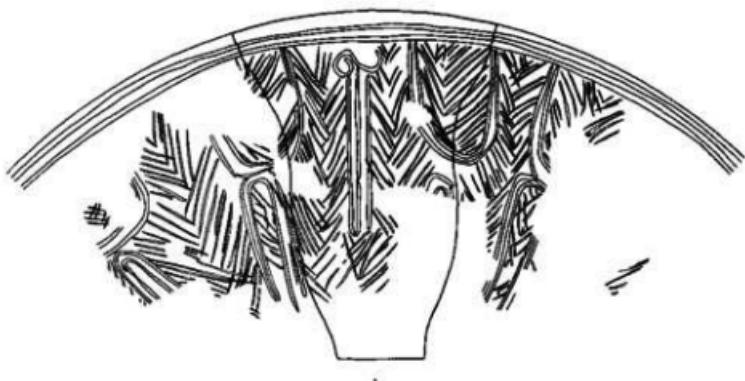
1 (84号)



2 (19号)

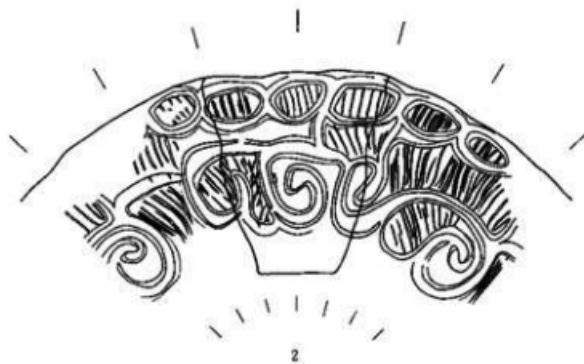
0 10cm

第36図 土器実測図



1

配石遺構土器展開図



2

第89号土壤内土器展開図

0 10cm

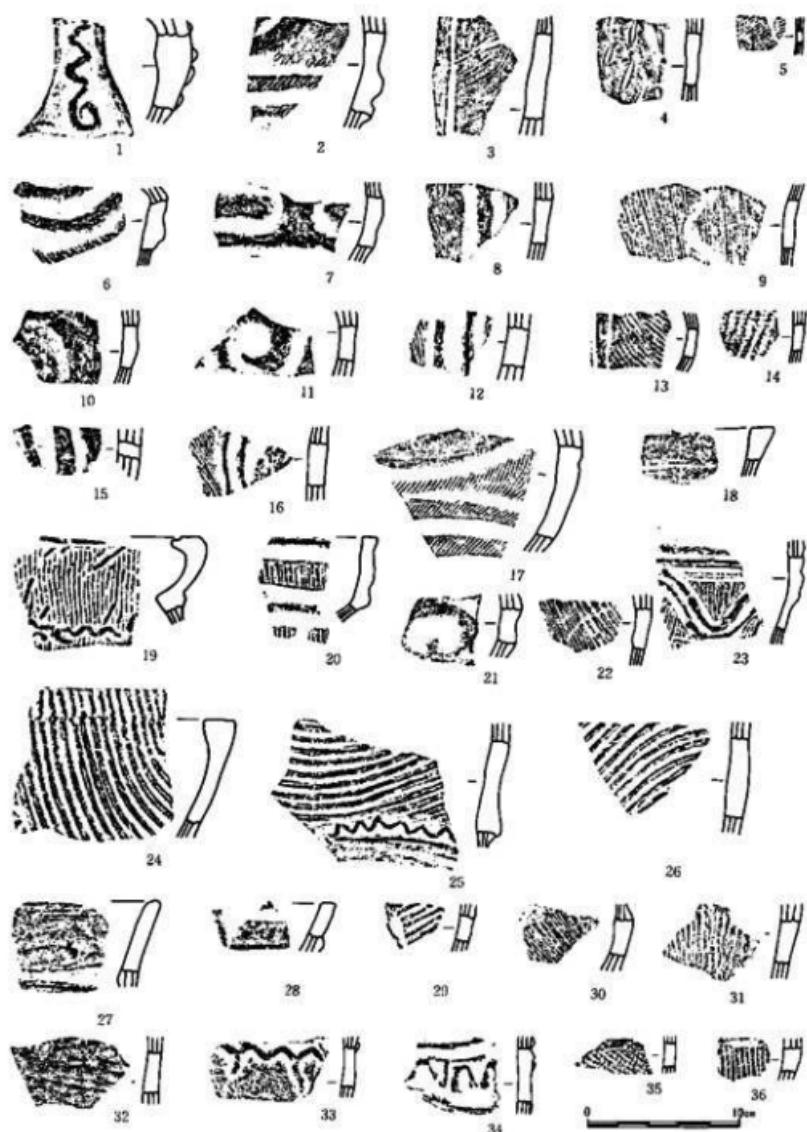
第37図 土器展開図



第38図 土壌内出土土器

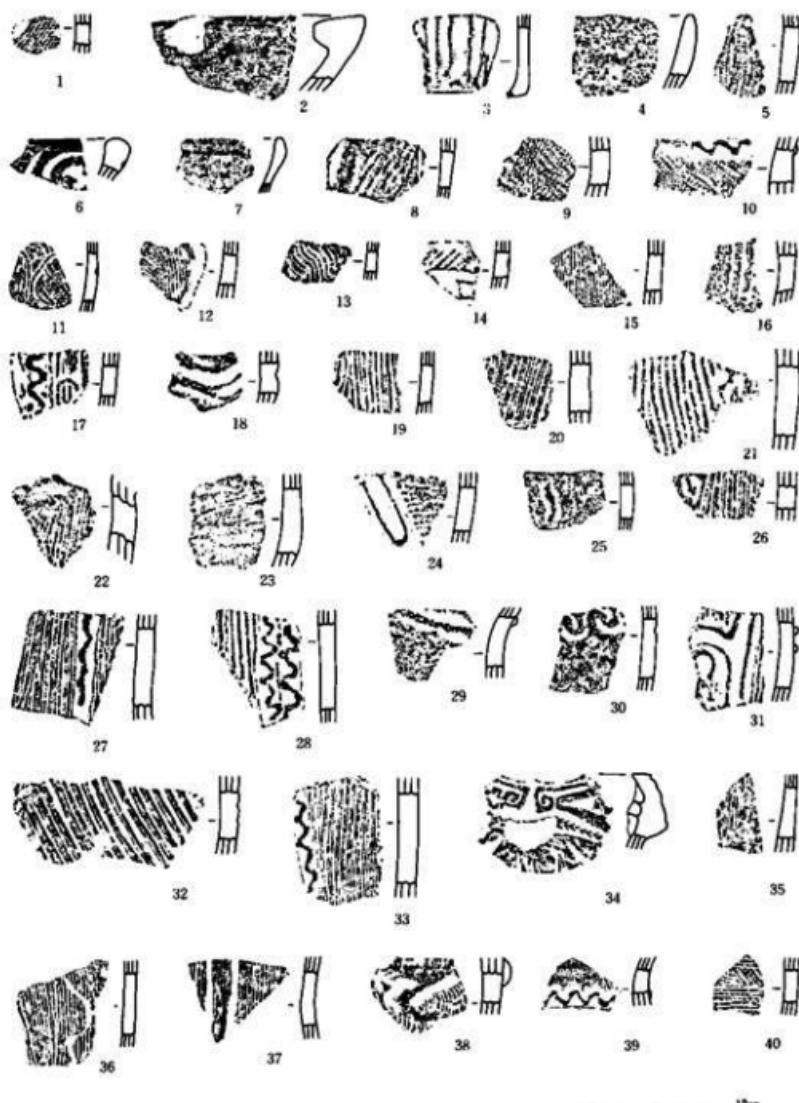
1号 1~16 2号 17~32

3号 33~36



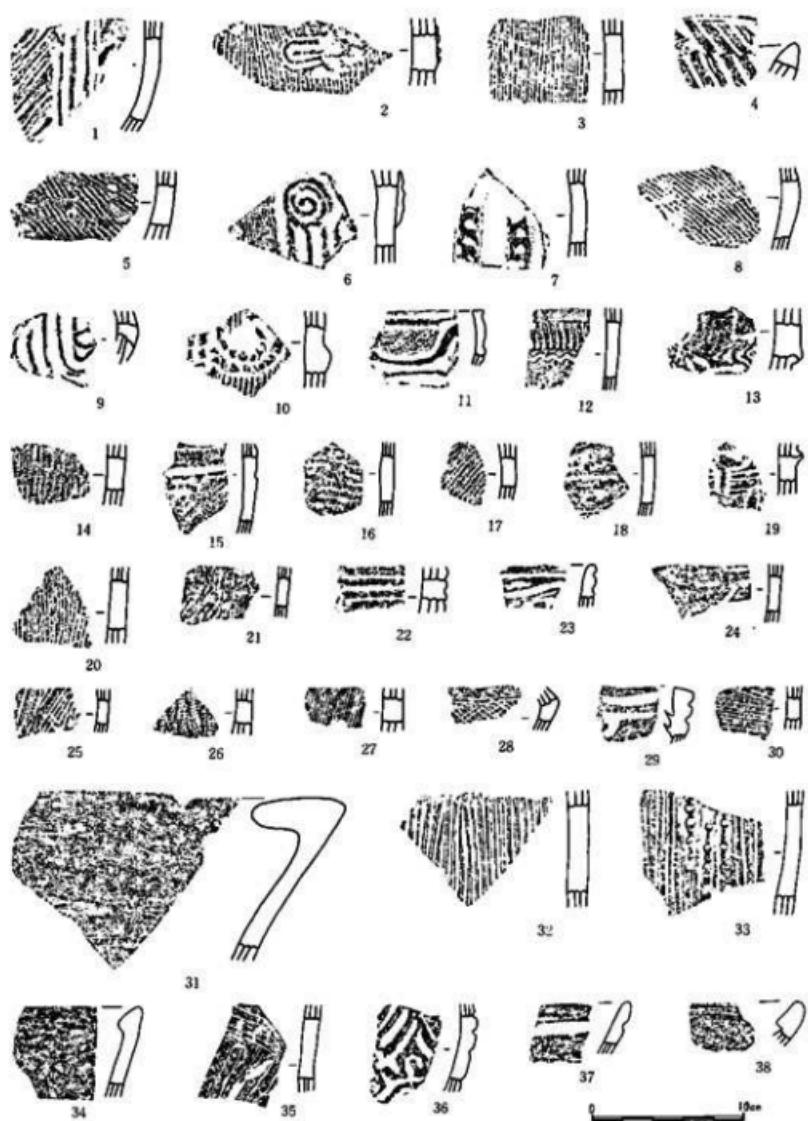
第39図 土壌内出土土器

3号 1~16 4号 17~18 5号 19~23
7号 24~31 8号 32~36



第40図 土壙内出土土器

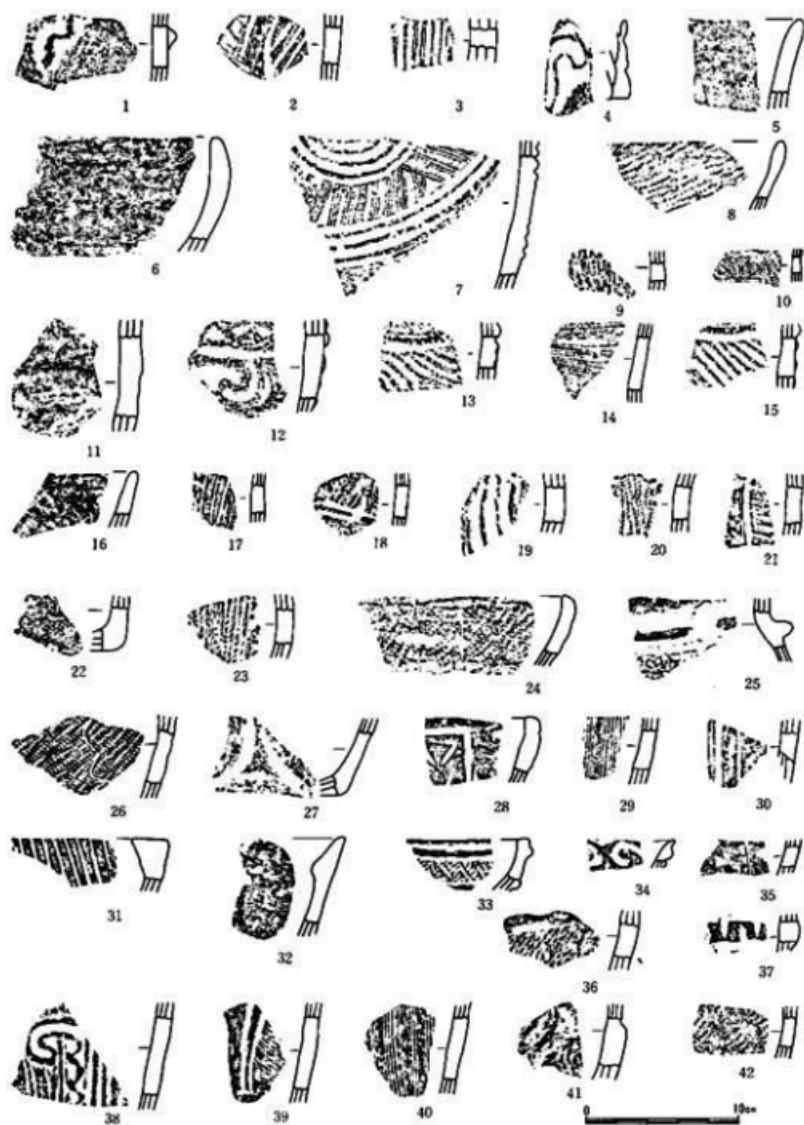
8号 1 9号 2~30 10号 31~33
11号 34~38 12号 39~40



第41図 土壙内出土土器

12号 1~23 13号 24~28

17号 29~36 18号 37~38



第42図 土壌内出土土器

18号 1~4 19号 5~23 20号 24~42

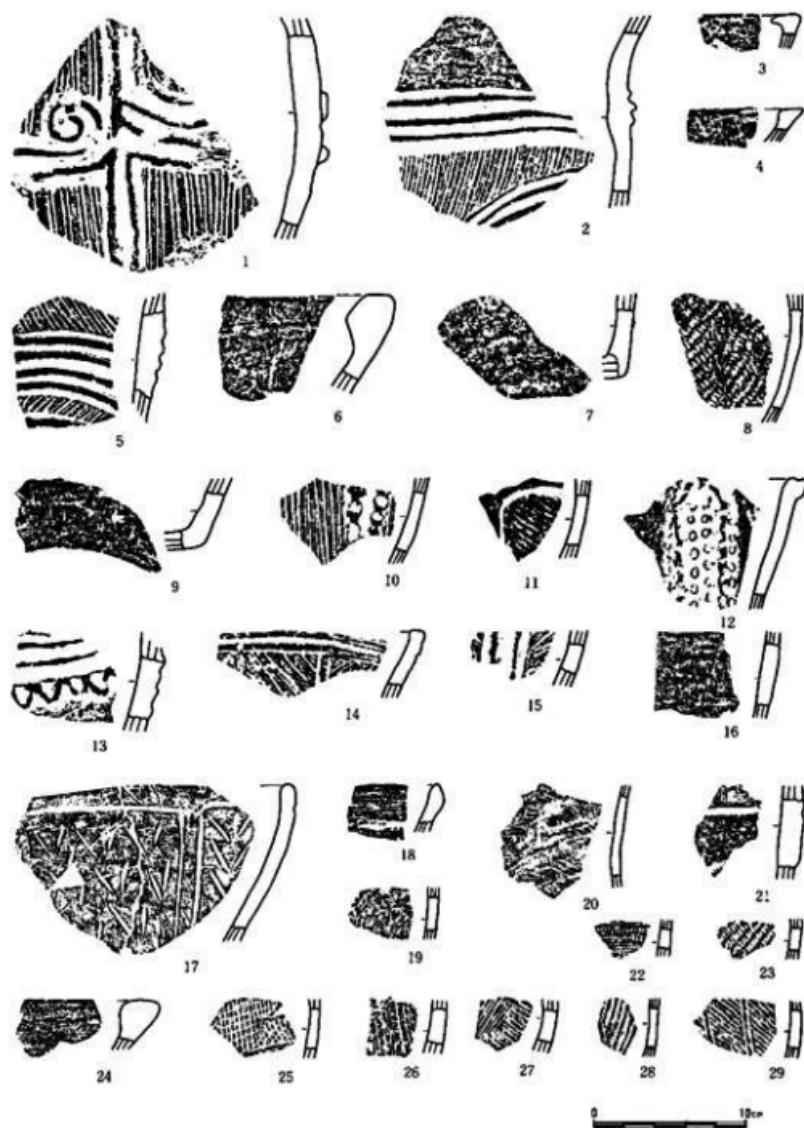


第43図 土壌内出土土器
21号 1-21 23号 22-41



第44図 土壌内出土土器

23号 1~32 24号 33~36
25号 37~58



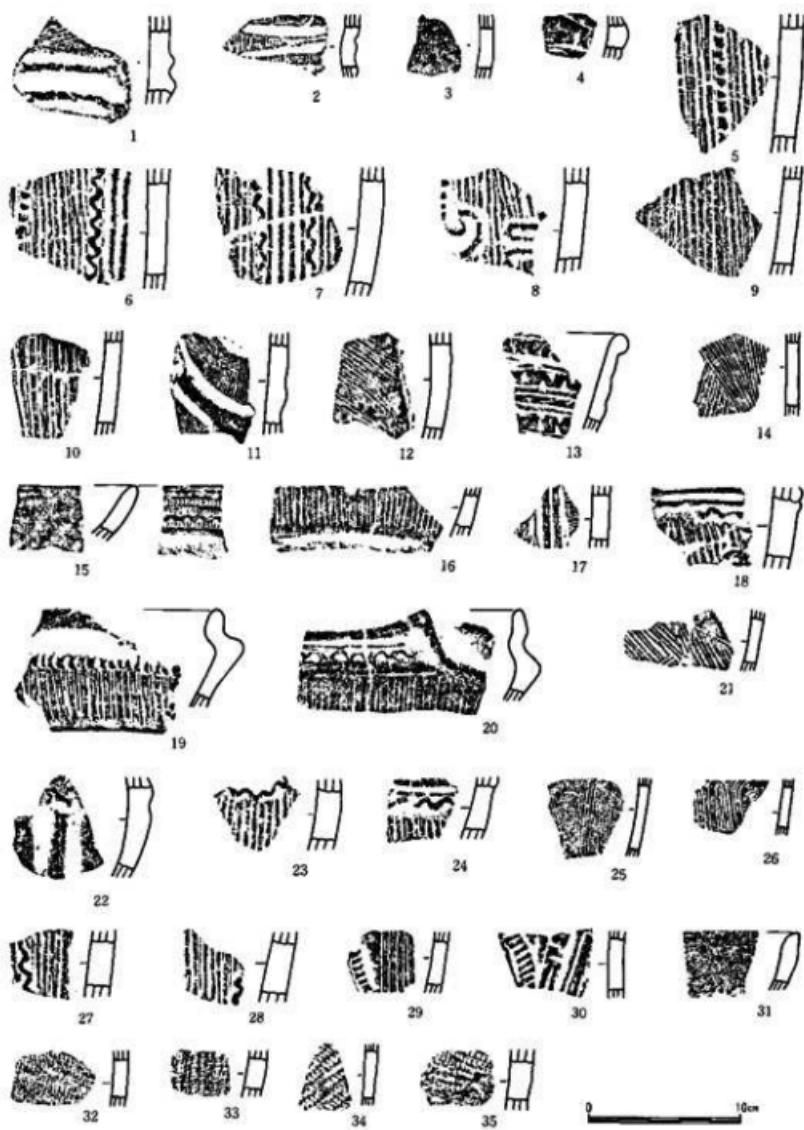
第45図 土壤内出土土器

25号 1~9 26号 10 27号 11
29号 12~15 31号 16~19 32号 20~29



第46図 土壌内出土土器

32号 1~4 33号 5~10 34号 11~19
35号 20~23 36号 24~44 39号 45~49



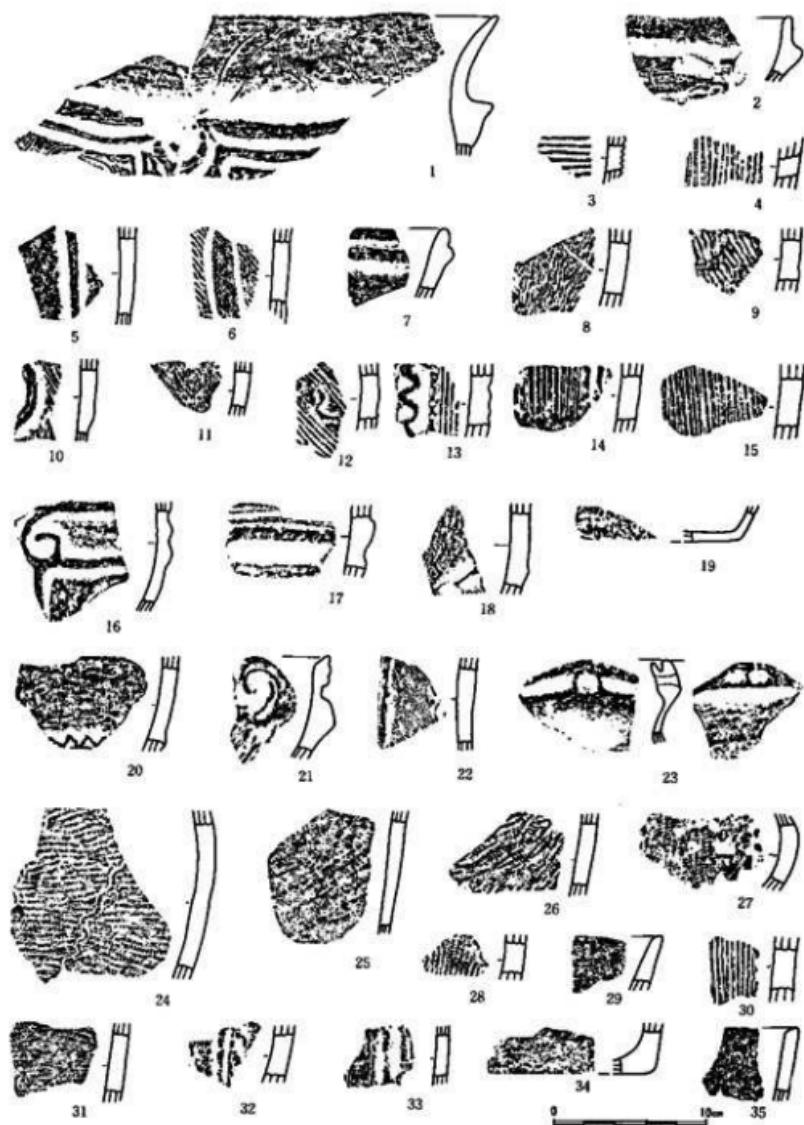
第47図 土壇内出土土器

39号 1~4 41号 5~35



第48図 土壌内出土土器

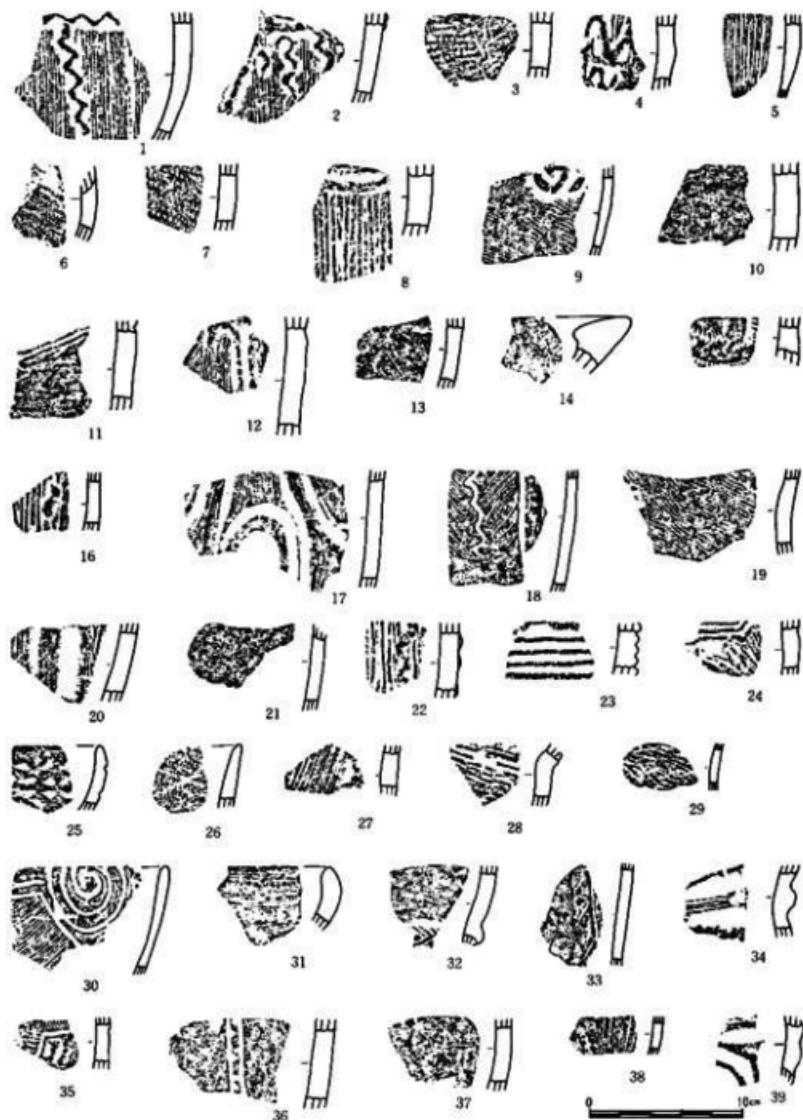
43号 1~31 44号 32~35



第49図 土壌内出土土器

46号 1~11 45号 12 47号 13

48号 14~15 49号 16~23 50号 24~35



第50図 土壙内出土土器

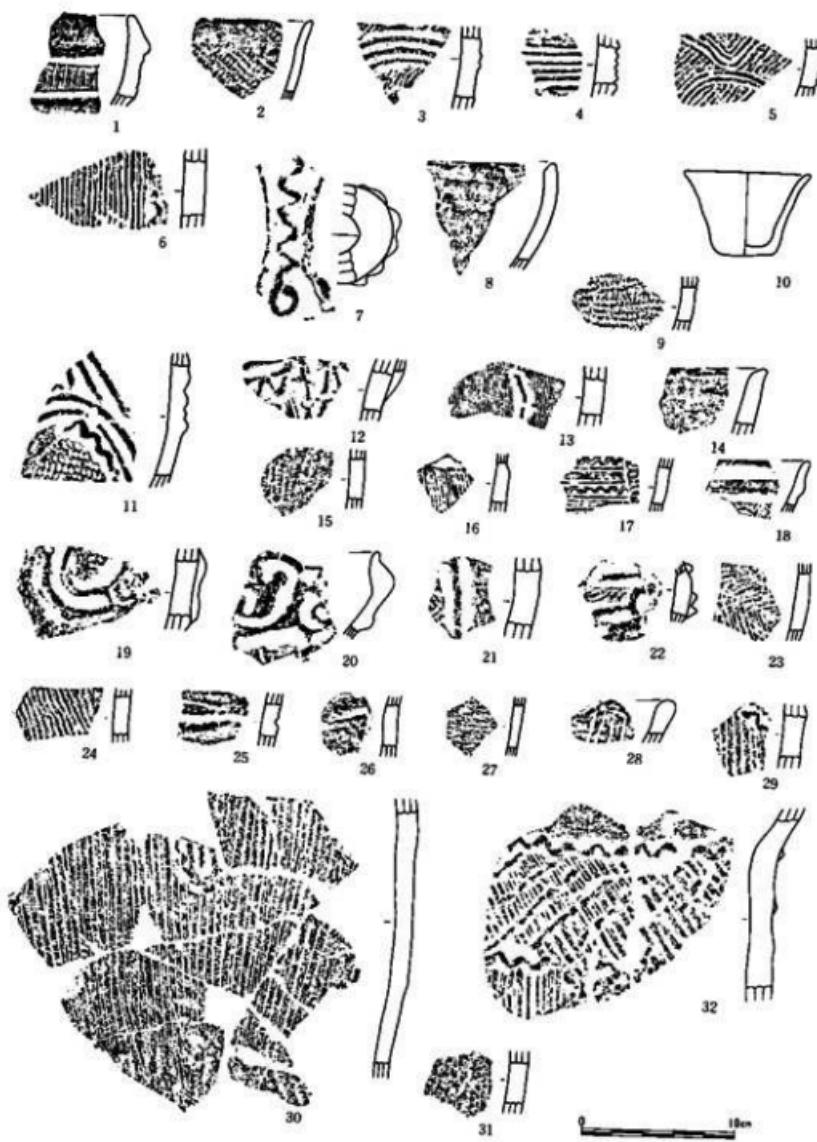
51号 1~8 52号 9~17 53号 18~30
55号 31 56号 32~36 57号 37~39



第51図 土壤内出土土器

58号 1~4 59号 5~15

60号 16~17 62号 18~29



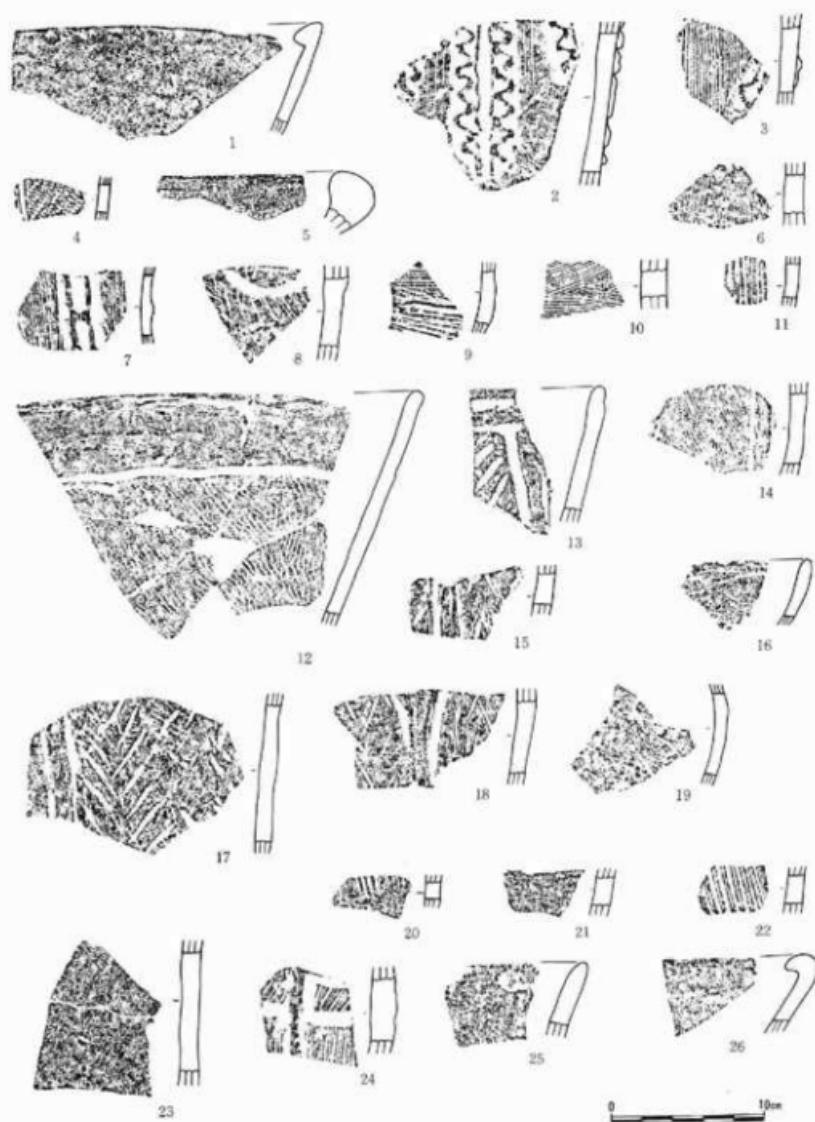
第52図 土壌内出土土器

67号1~6 68号7~10 69号11~14
70号15~23 71号24~28 72号29~32



第53図 土壌内出土土器

72号 1~4 73号 5~14 75号 15~23
76号 24~27 78号 28~37



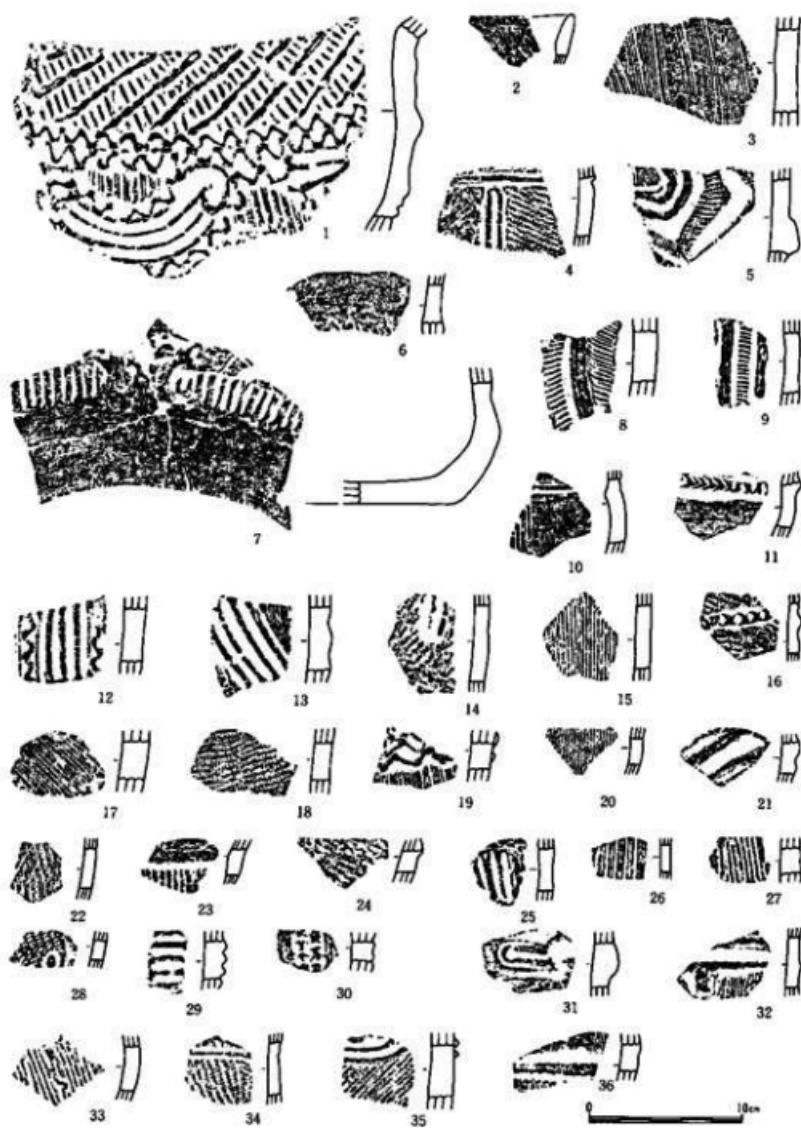
第54図 土壇内出土土器

79号 1~11 81号 12~19 82号 20~26



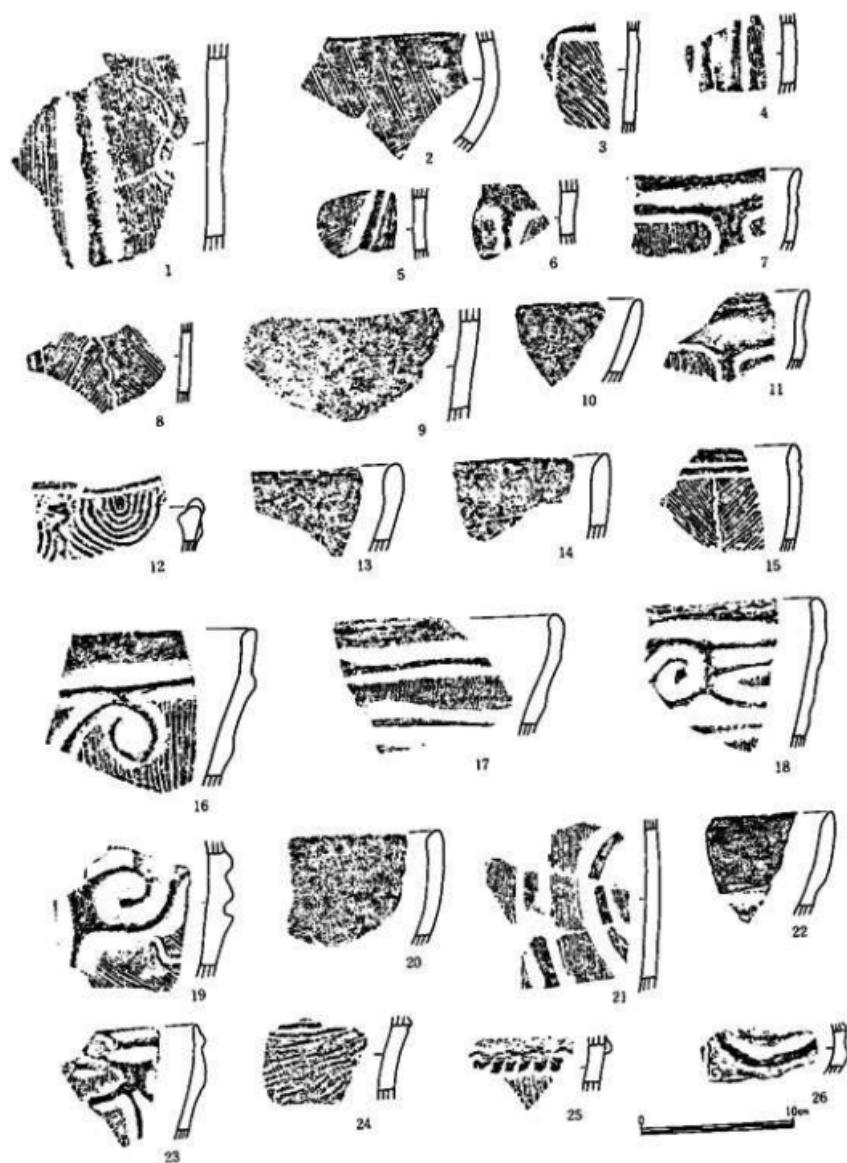
第55図 土壤内出土土器

82号 1~10 83号 11~28 84号 29~37



第56図 土壤内出土土器

84号 1~30 87号 31~36

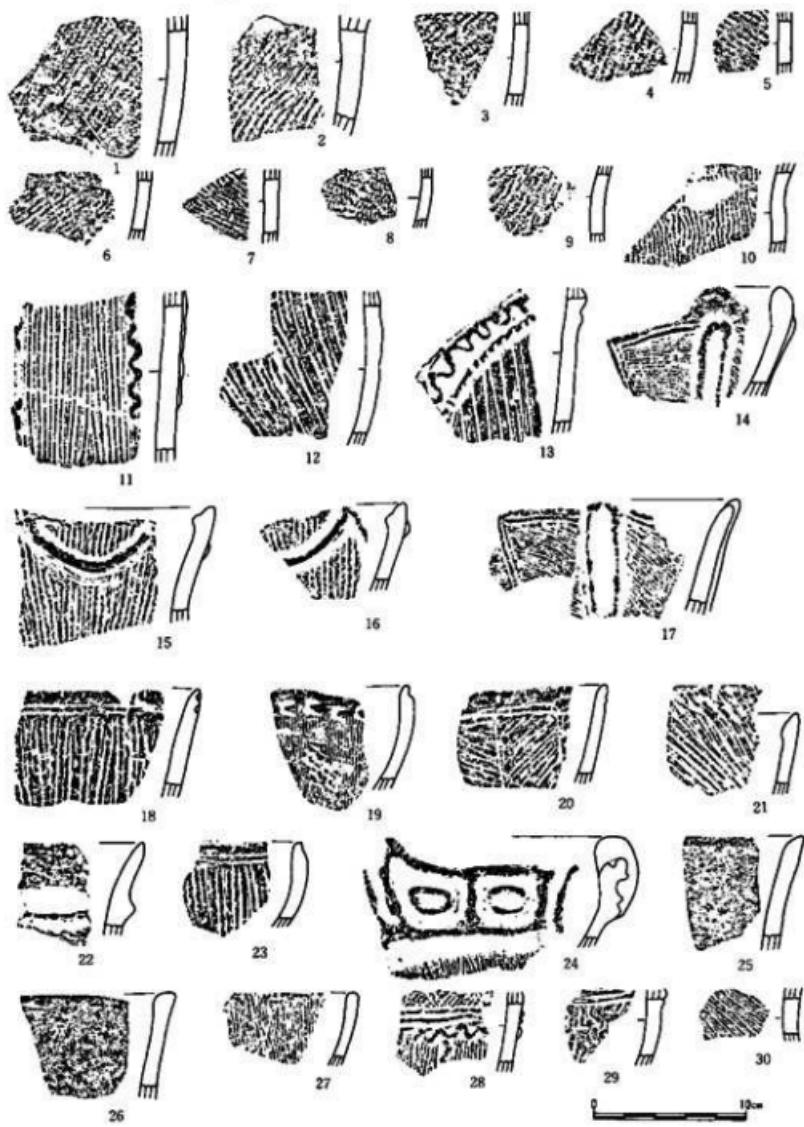


第57圖 土壤內出土土器
87號 1~15 88號 16~26

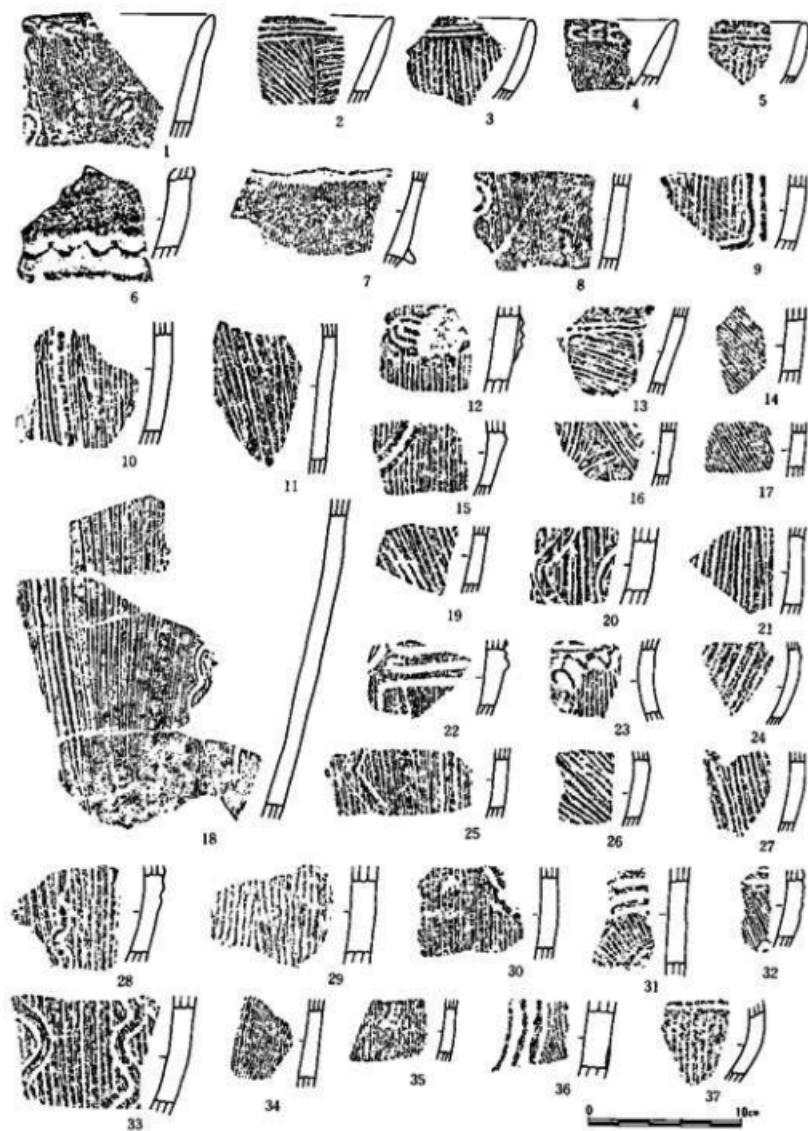


第58図 土境内出土土器

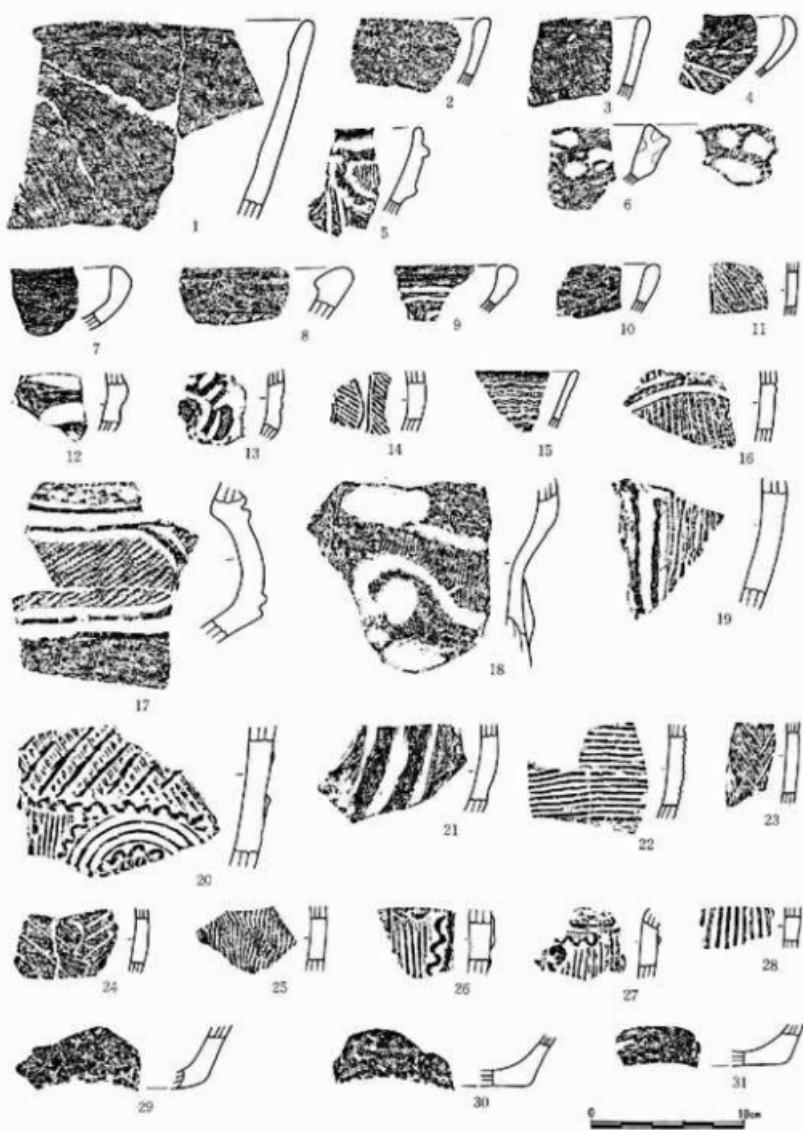
88号 1~14
配石出土土器 15~33



第59図 配石出土土器



第60図 配石出土土器



第61図 1号住居址・出土土器

4. 土壙群の検討

縄文期の土壙の性格については、食料貯蔵用（貯藏穴）・葬送用（墓壙）・狩猟用（落し穴）等の用途が推定されている。落し穴は立地・形態が他の二者と異なるため判別は比較的容易であるが、貯蔵穴・墓壙の場合は土壙内の収納物が腐敗し、残存することは稀であるため、集落内での位置・土壙の形状・時期（縄文社会の発展過程）等によって推測されているのが現状である。

牛奥遺跡の土壙群は、縄文中期の特に曾利Ⅲ期に集中し、調査区域は遺跡のはんの一部に過ぎないという制限はあるものの、住居址が1軒しか検出されず、土壙内に埋甕や上器の埋設遺構が伴う例が認められることから、墓壙としての用途を推定することは容易である。しかし、ここでは墓壙としての特定の用途を前提とせず、土壙の形状の分析を出発点としてみたい。この作業によって再度墓壙という用途が導きだされた場合は、墓の内容を一層詳しく知る手掛かりとなり、土壙の構築過程（葬送の状況）、さらには、縄文社会の構造に迫る資料の一端になるものと考えるからである。

時 期

土壙の構築時期を決定する遺物は、すべての土壙から検出されているわけではない。まったく遺物の出土しない土壙も20基を越える。

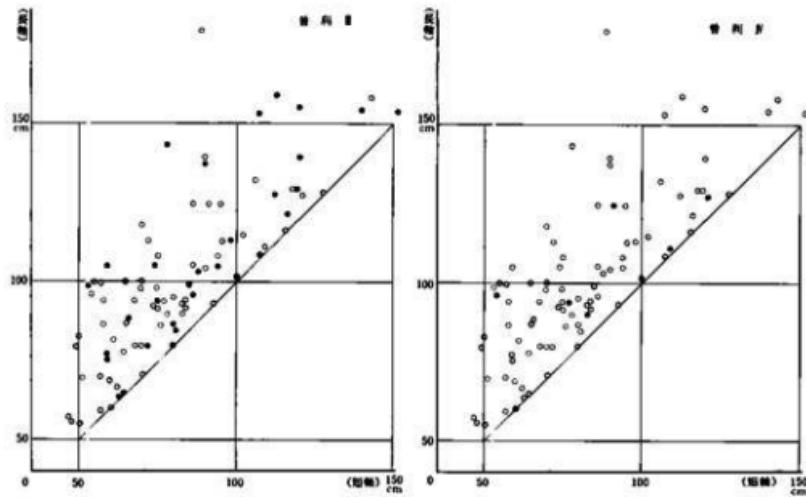
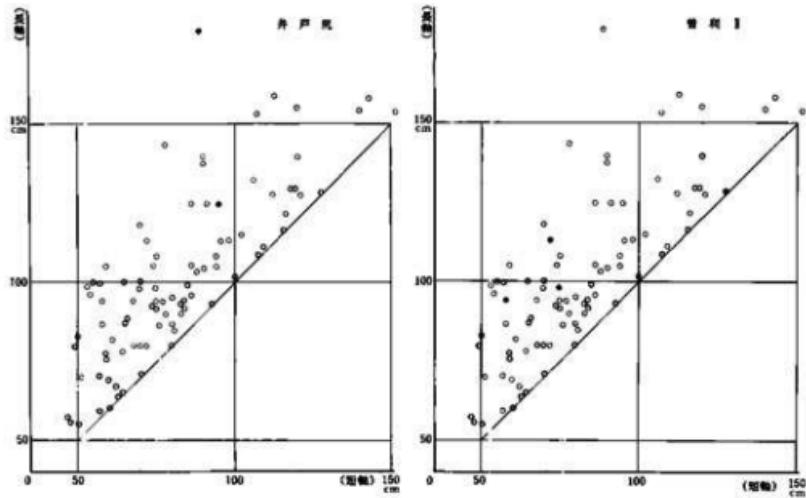
また、土器片も複数の時期に跨って出土する場合が多く、時期の限定を困難なものとしている。

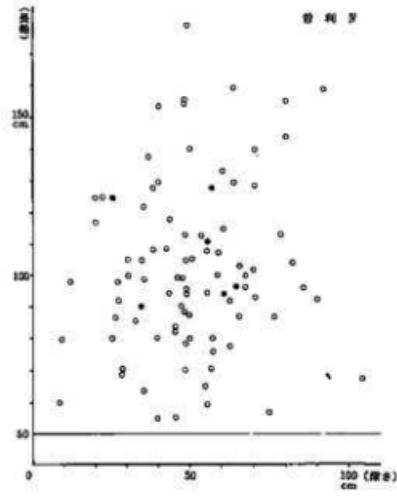
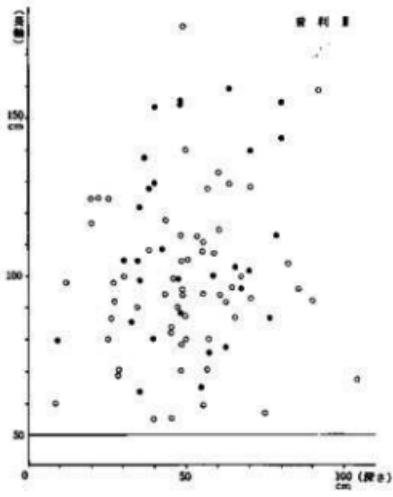
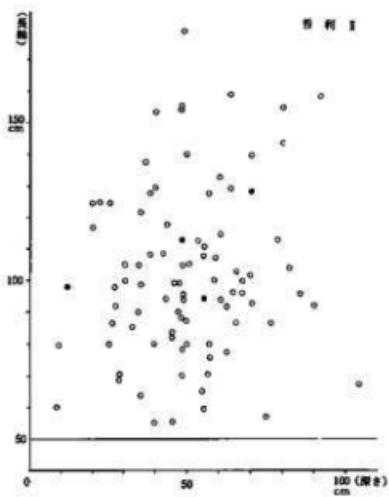
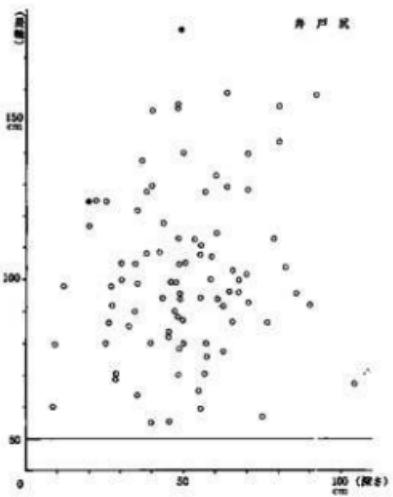
縄文前期～縄文後期の土器片が土壙内から検出されたが、土壙の構築時のものは中期に限られるようで、他は土壙掘削時か土壙の埋没が終了する以前、さらには、土壙の重複による混入と考えられる。

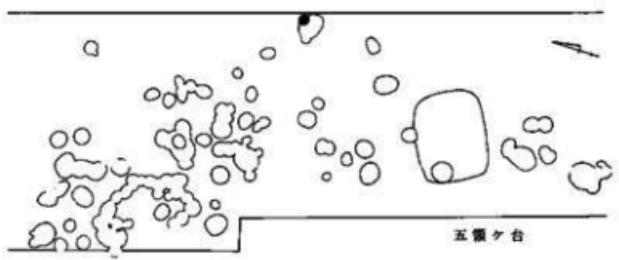
五頭ケ台期1基（40号）、井戸尻期2基（46・76号）、曾利Ⅲ期4基（6・10・79・84号）、曾利Ⅳ期37基（2・3・5・7・9・12・18・19・20・21・22・23・25・32・33・34・35・41・42・43・44・49・50・51・52・58・59・62・68・69・70・72・73・78・82・88・89号）、曾利Ⅴ期6基（1・4・53・54・81・87号）、曾利Ⅵ期2基（31・56号）、住居址は曾利Ⅲ期、配石遺構は曾利Ⅳ～Ⅵ期に属する。

残りの41基の土壙は、遺物がなく時期を決める資料を欠く場合や、土器片が少量で無文であったり、複数の時期のものが混在し主体となる時期の土器片が判定出来ない等がある。そのため、時期不明の土壙が半数近く占めることになる。

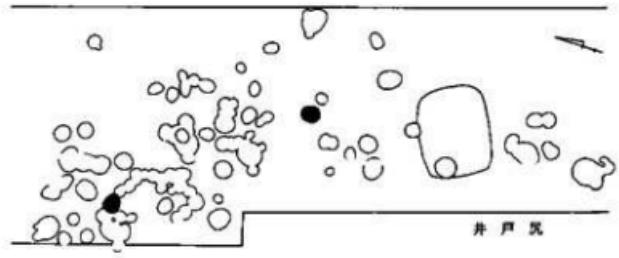
そこで、時期不明の土壙の帰属によっては、時期別の比率も大きく変化する可能性もあるが、



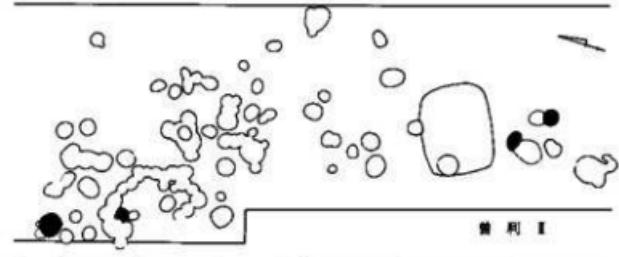




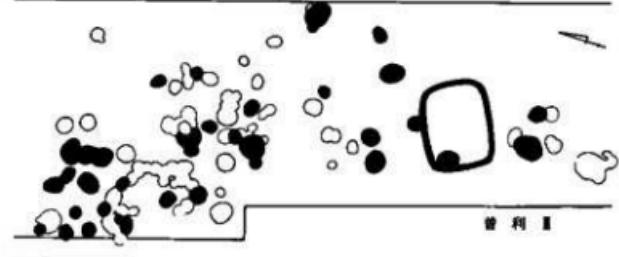
五個ヶ台



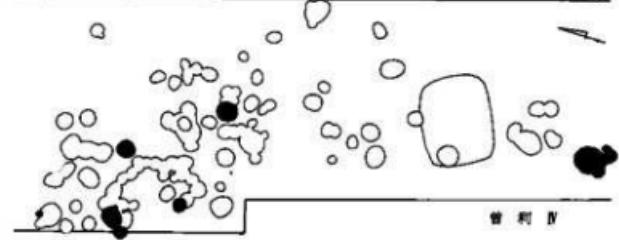
井戸尻



曾利 I



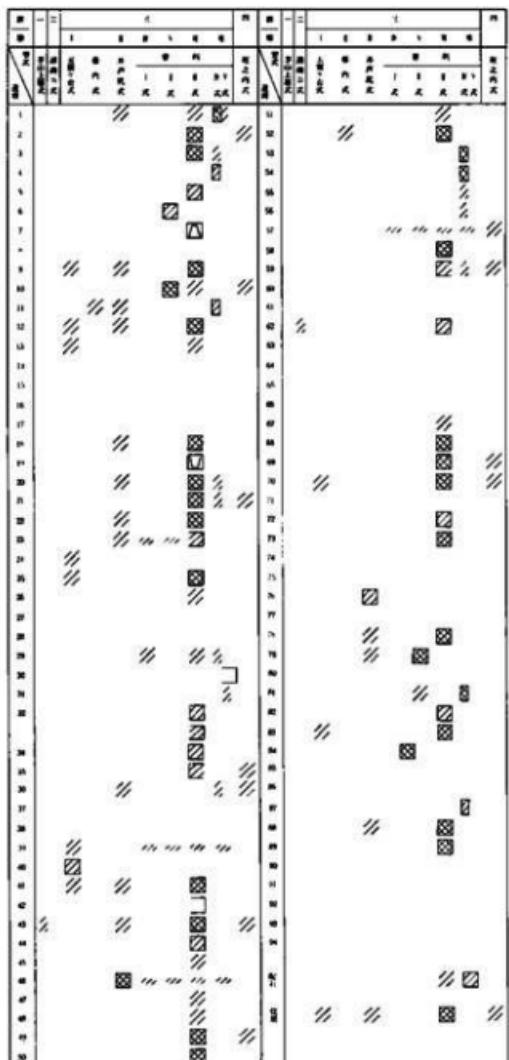
曾利 II



曾利 III

土壤の重複状況や土器片の散布状況からみて、曾利Ⅲ期に中心があることは明らかで、現在判明している比率と大差ないものと思われる。

五領ヶ台期は、40号1基が調査区東端に位置するが、周囲は40号と重複する土壤以外には土壤がない。五領ヶ台式土器の破片の出土は、調査区北西端の、13・12・25・83号で、東西に1列に並存している。また、住居址とその南北に近接する9・70号でも出土するが、これらは時期の判明している遺構の多い区域で、当然のことながら曾利Ⅲ期が主で、住居址内か周辺に五領ヶ台期の遺構の存在の可能性を窺わせる。一方、北西端は土壤のみで完全に重複しなければ40号のように一部でも残存するはずである。或いは、調査区外にその存在を求めるべきかもしれない。



藤内期に帰属が確定する土壤は検出されなかった。藤内式土器の破片は2基の土壤で認められ、いずれも半円形に連続する大重複土壤群中に位置している。11号は井戸尻式土器片も伴出し、52号は重複する76号が井戸尻期の所産であり、ともに近接した時期との関連が認められる。

井戸尻期では、調査区中央の46号に重複がなく、周囲に土壤もないため土器片の出土する土壤もない。76号は前述の大重複列に位置し、周囲の重複する土壤の多くは、井戸尻期の土器片を出土した。この46・76号を結ぶ

線上に井戸尻期の土器片を出土する土壙が集中し、帶状の分布を呈する。また、住居址からも井戸尻期の土器片が検出されるが、近接する58・59号からは出土しない。

曾利Ⅰ期に属する土壙はなく、29・84号に若干の土器片が検出された程度で、極端に少ない。

曾利Ⅱ期では、6・10・29・79号の4基が調査区の北と南に分かれて点在するが、土器片の出土する土壙は上記の4基の他には2基にすぎず、土器の散布範囲が井戸尻期とは逆に狭い。

曾利Ⅰ・Ⅱ期を合せても、土壙の数・分布範囲は狭く、この時期は調査区域外にその中心が位置するのか、集中せず重複をなさないのが時期的な特徴となるかもしれない。

曾利Ⅲ期は、調査区内で最も多くの土壙が確認された時期で、時期不明の土壙を含めても、土壙の総数は40%を占め、時期の判明するものに限れば70%を越え、調査区では中心となる時期である。当然、調査区の全域に分布するが、特に北端部は密度が高く、重複列には重複する両者とも曾利Ⅲ期に属するものもある。半円状の大重複列にも5基が含まれるが、ここでは曾利Ⅳ期と時期不明の土壙も多く、他の区域に比べ曾利Ⅲ期の占める割合が低い。その南東にあたる土壙の重複群では、中心になる大形土壙が曾利Ⅲ期に属し、その周囲に重複する小形土壙の多くも同時期のものが多い。調査区南半では住居址が曾利Ⅲ期に属し、住居址と重複するもの、その周囲に単独で点在するもの等、曾利Ⅲ期が主体をなす。特に、単独で存在する土壙には本期に属するものが多く、井戸尻期の1例を除くと、時期の判明するものはすべて曾利Ⅲ期の所産ということになる。このように、前記の曾利Ⅰ・Ⅱ期と異なり、調査区内に限定すれば曾利Ⅲ期に集中して土壙が營まれたことが知られる。

曾利Ⅳ期は配石造構を除くと、曾利Ⅲ期に比べその数は著しく減少する。調査区南半部は配石造構以外は、59号に土器片が検出されるのみである。北半部の半円状の大重複列中に3基、その外周部に1~2基で、土器片の出土する土壙の数は少ない。

曾利Ⅴ期もⅣ期と同様で、調査区の北半部の半円状の大重複列の南側の1基と、その南東に2基認められるが、土器片の出土する土壙はやはり少ない。

曾利Ⅵ・Ⅶ期は、調査区の北半部と南端の配石造構を占め、住居址を中心とする地域に空白部が生じたことになる。

馳之内期に属する土壙は、調査区内では確認出来なかったが、土器片の出土する土壙は調査区の中央部を主に点在し、住居址からも若干馳之内期の土器片を検出している。

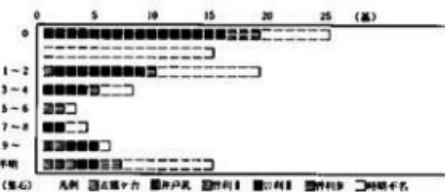
ブ ラ ン

平面は円形が主流となり、正円形・長円形・橢円形がほぼ同数で、卵形も加えると円形系統の比率は一層高くなる。この比率は土壙の総数に占める曾利Ⅲ期の割合がそのまま現れているが、三角形・四角形・多角形は少なく、台形に曾利Ⅲ期が2例見られるに過ぎない。

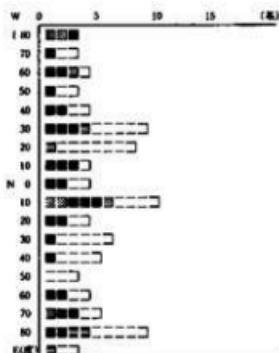
長軸と短軸の比は重複により不完全なものが多く、計測できる範囲では、比率が1~2に近

いものまで巾があるが、大半は1~1.5の範囲に収まり、比率がほぼ1に近い例も10例弱ある。

井戸尻期の2例はいずれも大形に属するもので、76号は長軸が1.8mに近くとびぬけている。曾利Ⅰ~Ⅲ期は、Ⅰ期後半~Ⅲ期の84号が比率1に近く大形で、Ⅱ期のものは小形に属し長軸と短軸の比が大きいというプラン上の差異が認められる。曾利Ⅲ期は数も多くバラエティーに富み、特定の傾向を見出せない。しかし、長軸が1.5mを越える例は井戸尻期の76号と時期不明の14号を除くと、曾利Ⅲ期が5例で、大形土壤群内で本期の占める割合は特に高い。曾利Ⅳ~Ⅶ期は中形が主となり、五角形状のものが2例を占めることが特筆される。



主軸 方 向



N-80-E・N-10-E・N-20-W・N-30-Wにピークがあるようにも見えるが、北を中心とした他の方位より幾分多いという程度で、特定の方向への集中は認められないようである。時期別に見た場合、土壤の数の少ない時期は特徴をとらえにくく、最多の曾利Ⅲ期を例にとっても、2~3例ずつが各方向に認められ、全体の傾向と一致している。

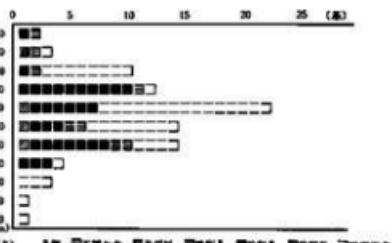
このことは、主軸を特定の方位に意識して土壤を構築したとは考えにくく、地形や重複関係、さらには占地する余地等の関連に大きく左右された結果とした方がよさそうである。

深 さ

ここでいう土壤の深さは、確認面より底面までの深さであるため、土壤構築時の数値より小さく、その割合は土壤ごとに異なり、厳密な対比は困難である。当然のことながら、0.1m未満から1.00m前後までと差が激しい。

曾利Ⅲ期は0.3~0.6mが主体で、耕作や発掘時の削平を考慮しても、現在の表土0.5mを

そつま加算する必要はなく、0.1~0.3mの追加で充分と考えられ、土壤の深さは0.4~1.00mで、0.5~0.7mに中心があつたものと想定される。井戸尻期はいずれも0.5m未満と浅く、曾利Ⅰ~Ⅲ期は0.5m前後を主に大・小各1例、曾利Ⅳ期は0.5~0.6mが主体を占める。以上の様に時期別の特徴は見出せない。平面規模との比較も、大形土壤は深い例が多いが、小形の土壤にも深いものがあり、平面規模との相関関係も少ないようである。このことは、土壤の深さがある程度一定に掘削されていたことを窺わせる。

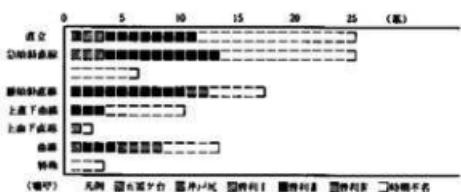


壇 壁

1基の土壤でも部分によっては壇壁の状況が異なることもあるが、直立・急傾斜直線が多く半数を越え、緩傾斜直線も直線状の壇壁として含めると、大部分がその中に含まれる。

曾利Ⅱ・Ⅲ期は直線状が主となるが、曾利Ⅳ期は曲線の占める割合が高く、直線状も緩傾斜で、直線急傾斜の前の時期とは対照的である。

土壤の上半と下半とで壇壁の異なる場合、下半部でカーブして底面へと続くものが多く、逆



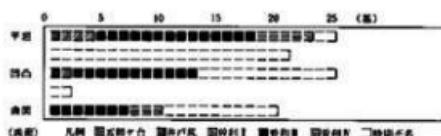
の場合は少なく、特異な例に含めることができる。壇壁は深さと関連して、完存する例は少ないと予想されるが、上半部で形状が変化する例は少ないとから、現状での傾向が土壤構築時の状態を示すものとしてよいであろう。

底 面

壇壁に続く底面は、平坦面が主体をなすが、凹凸面・曲面もみられ、平坦面は半数程度で、直線状の壇壁の割合に比べれば小さい。凹凸面が多いことは、石が多いことにもよるが、これは底面に限ったことではなく、壇壁掘削時も同様であった筈で、中には地山の岩を削った壇壁も認められることからすれば、底面を平坦に整えようとする意識は少なかったといえよう。

曾利Ⅱ期は凹凸面の比率が大きく、曾利Ⅳ期が平坦面と曲面で凹凸面がないと対照的であ

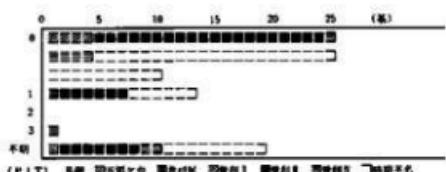
る。また、曾利Ⅰ～Ⅳ期は数が少ないと平坦面と凹凸面で曲面がない。この様に、底面の状況は時期と対応して差異が存在する可能性が窺えよう。



ピット

重複により底面が完存しないためピットの有無が確認できない例も20基近くあり、ピットを検出した土壌は14例に過ぎない。3本のピットを有する土壌が1例で、他は1本である。そのピットも浅く、底面より0.1m弱しか掘りこまれないものが多い。

3本のピットを有するのは井戸尻期の46号でプランも特異な例であり、一般的には1本である。底面の中央に位置するピットは少なく、底面の端に寄ったものが多く、塙壁に接して掘られた例も少ない。

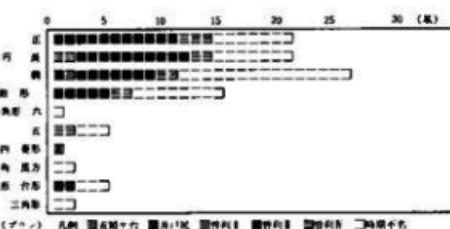


ピット内から遺物が検出されることは稀で、中には黄色のロームブロックが混入し、掘削早々埋められた場合もあったようで、特別に機能したとは考えにくい現状である。

集石

土壌内部に礫が検出されたものを一括して集石としたが、当然、混入したものも含まれ、土壌内で遺構として機能したものと分離しなければならない。しかし、現状ではその判別が容易でないため、ここでは全部をまとめて扱う。

礫の大小の差はあるが、個数で分類すれば、0～9以上までに分かれる。1～2個の礫が意図して土壌内に入れられたか混入かは区別しにくいが、礫の多い調査区で礫が土壌内に検出されない例が半数近くを数え、重複によって集石の有無が明らかでないものも多くあることからすれば、少数の礫であっても人為的なものである可能性もある。曾利Ⅳ期で



は5～6個に空白があり、それを基準にすれば7個以上は意図的な集石遺構とする蓋然性は高いであろう。

重複

時期別に概観した時に重複についても若干ふれたが、ここでは時期とともに重複群としてのまとまりについても状況を見ておきたい。

重複のない単独で存在する土壙は30例を越えるが、時期の判定できる例は曾利Ⅲ期の15例の他は井戸尻・曾利Ⅱ・曾利Ⅳ期に各1例あるに過ぎない。曾利Ⅲ期の土壙の数が多いことからすれば当然であるが、重複例の割合と比べれば、単独の土壙が曾利Ⅲ期には多いことは明らかである。

1基の土壙に他の1基の土壙が重複する例は、曾利Ⅲ期が4例で、曾利Ⅱ期の8例の半数であるが、総数が1／9であることからすれば異常に多いことになる。

また、1基に2基が重複する例は全部で20基あり、時期的な比率は時期別の総数の割合と一致している。3基・4基はそれぞれ、10例・4例となり、これらは土壙の外周部の大部分が他の土壙と重複していることになり、小形の土壙では外周部に余裕がなく、いずれも大形土壙であることはいうまでもない。

重複の状況は、2基が互いの一部を切りあうものには、時期の異なるもの（曾利Ⅲ期と曾利Ⅲ期：7号と10号・6号と9号）、時期が同じもの（曾利Ⅲ期：33号と34号）があり、時期の判明しているものの中には、時期差の大きい例は認められていない。3基の場合は列をなすものと1基の回りに他の2基が付くものがあり、前者には44・12・23号のように曾利Ⅲ期という短期間に構築された例もあり、後者には84・82・81号のように曾利Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期と連続する場合と、40・41・72号のように五領ヶ台期と曾利Ⅲ期と時期が隔たる例もある。

43号を中心とする重複群は、曾利Ⅲ期の43号に同じ曾利Ⅲ期の73号、反対側に67・47号、その外側に74・86号が重複する例で、67号は43・47号と完全に重複し横壁が確認面ではまったく残らない唯一の例である。32号を中心とする重複群は、曾利Ⅲ期の32号の外周に曾利Ⅲ期の69・35号、時期不明の63・64号が重複し、さらに63号の外周に28号、35・63号の外周に27号、35号の外周に42号と重複し、32号の外周に重複する64・69号は小規模の土壙である。

調査区北西部には26基に及ぶ土壙の重複群が半円状に位置する。北端部で重複が複数になるが、他は1基の土壙の端に他の土壙の端がさらに次の土壙と重複するという状態で列をなしている。井戸尻期の76号が時期の判明する中では最も古く、曾利Ⅲ期が21・78・52・79・89・88号で、曾利Ⅳ期は11・56・53・87号で、南北両側に多く、中间部は遺物がなく時期の判別は出来なかった。

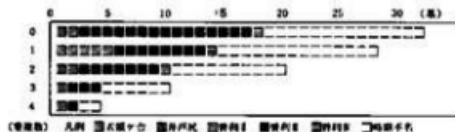
また、住居址と58・59号は、いずれも曾利Ⅲ期で、住居址—58・59号の順に構築され、順次

機能を終了し廃絶したことが窺える。

以上、多数の重複関係をみてきづくことは、重複の大部分が壇壁の一部に限定されていることと、重複の中に埋没した例は1例に過ぎず、周囲に土壙を掘削する余地を大幅に残しながら現状の様な重複群が形成されたことは、重複して構築することに意義があったことになる。その場合、後の土壙を掘削する時に、既に構築された土壙が完全に埋没せず、その所在が確認出来たか、逆に完全に埋没し地表に何等かの目印があったかのいずれかが考えられる。土壙内の土層堆積の状況は少なくとも下部は早い時期に埋没した場合が多いようで、配石造構下の土壙のように上部に礎を配した可能性もある。とすれば、土壙は自然に埋没したのではなく、人為的に土砂が充填されたことになる。

重複の度合を見ると同時期（同一土器型式）・近接する時期では、重複が壇壁の一部に限定され、主軸が一致する場合が多い。一方、時期が隔たると重複部が大きくなり規模・主軸方向が異なる例が見られる。半円状の大重複群では井戸尻期の76号から曾利Ⅲ・Ⅳ期まで連続させながら土壙が構築され続けるが76号と重複する土壙は曾利Ⅱ・Ⅲ期で、重複群の両端が曾利Ⅳ期であることから、この重複群は井戸尻期以前には構築されず、曾利Ⅳ期以降にも及ばなかつたようである。

この様に、重複を前提として土壙が構築されたとすれば、曾利Ⅱ期に構築され曾利Ⅲ期に重複して続くもの、曾利Ⅲ期に始まり曾利Ⅳ期に重複して続くもの、さらに曾利Ⅳ期まで続くものに分けられる。また、重複のない単独の土壙は曾利Ⅲ期に多く、重複するものは曾利Ⅳ期まで続くことが少ないことから、曾利Ⅳ期には調査区外に構築が移行したとするよりは、土壙そのものの構築が減少したものと解せそうである。



出土遺物

土器片は重複等により攪乱があり、複数の時期に跨る例が多く、構築時期より新しい時期の土器片が混入する場合もある。調査区の中心となる曾利Ⅲ期の土器片は、多くの時期の土壙で伴出しているが、先行する曾利Ⅱ期には伴わないことが特徴である。これは曾



利Ⅱ期の土壙がいずれも曾利Ⅲ期の土壙と重複しているが、重複が墻壁のごく一部にしか及ばず、混入が生じない状況下にあったことになる。一方、時期が隔たると、曾利Ⅳ期の81号の様に曾利Ⅲ期の84号の一部を掘削時に出土した大形土器片を再利用する例とは対照的である。

土壙内は土器片のみ出土するが、3号では集石内の一点の礫に雨垂れ石が検出されたが、石斧・磨石・凹石・石鑿は土壙内では認められず、配石遺構に石皿・雨垂れ石が僅かに見られる程度である。

土壙群の性格

牛奥遺跡の土壙群を時間を軸に形状の変遷を追ってきたが、資料が曾利Ⅲ期に偏るため、特徴的な変化を把握出来ない面が多かった。しかし、それは逆に同様の形態の土壙が縄文中期を通して、限定された区域内で構築が継続したことを見し、単一の用途を暗示しているかの様である。

僅か15×40Mの範囲内に、配石遺構下の土壙も含めると100基に及ぶ土壙の集中は、調査区内の土壙の空白部の存在からも一層密集度が増すことを示している。それは、牛奥遺跡の中で今回の調査区が土壙構築に特別適した条件下にあったとも思われることから、牛奥遺跡を残した集団によって、土壙構築用に限定された区域であったことになろう。

食料貯蔵用と推定される土壙の場合は、内部から木の実等が検出される例も少数あり、低湿地や谷の沢に近い等、水との関連が密接なものもみられ、縄文後・晩期の例は農耕の問題との関係で評価されている。しかし、食料貯蔵用の土壙は重複するものが少なく、牛奥遺跡の様に10~20基もの重複群は認められない。また、食料貯蔵用の場合は何度も再利用が可能であり、不用となればそのまま放置され、貯蔵状態で放棄されたケースを別にすれば、埋められることは少ないのである。当然、一部を重複して土壙を掘削する必要もなく、容量が不足すれば土壙の周囲を拡大するか、新たに土壙を構築すればすむ筈である。食料貯蔵に何等かの祭祀行為が伴ったことは否定しないが、牛奥遺跡の場合は限られた区域に多数の重複を含む密集した状況は、強い祭祀性を窺わせることからも、貯蔵穴の可能性は低いであろう。

牛奥遺跡では、埋甕・土器埋設遺構に棺状をなす例があることから、墓壙との用途を既に推定したが、さらに貯蔵穴の可能性が少ないとからも墓壙としてよいと思われる。また、墓壙群内に貯蔵穴が構築される場合は、供獻用等特別の例を除いて考えられないことから、すべての土壙が墓壙として構築されたもので、調査区は牛奥遺跡の墓域として機能したものであろう。

今回の調査によって検出された土壙は、埋甕の上部が破損している例からも、上部は耕作によって削平されたものが多いと思われる。また、このことは住居址の側壁が僅か0.1m前後しか残存していないことからも、確認面は少なくとも当時の地表より0.2~0.3mは削られたようである。しかし、調査区の南寄りは擾乱が浅く、土壙群の確認面から上位で配石遺構が検出され、その下には重複する4基の土壙が認められたことから、他の土壙の上部にも同様の配石遺構が存在した蓋然性が高い。

土壙群の用途については既に墓壙と推定したが、墓壙であれば埋葬後は速やかに埋められた

ことになる。土壇の重複が墳丘の一部に限定されることから地表に目印となるものが設置されたとすれば、それは長期間機能する必要からも、腐敗しない強固な材料を用いることが有効であり、この点からも土壇上部に砾を配した可能性が考えられる。

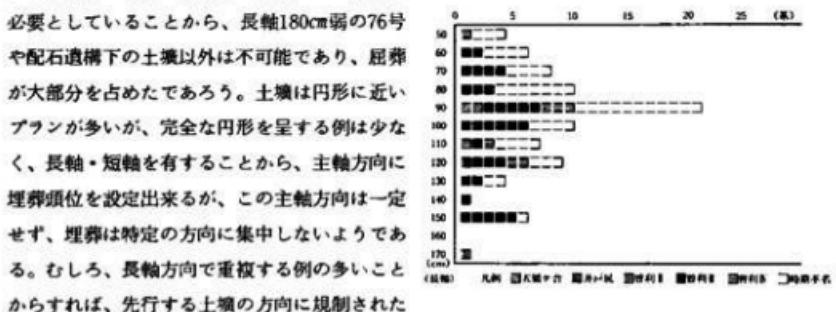
以上から、牛奥遺跡の土壇群の本来の姿を、配石遺構+土壇の集合体としての墓域と想定すれば、周辺に墓を営んだ集団の存在が浮び上がってくるが、調査区が狭く曾利Ⅲ期の住居址1軒のみの検出では、その内容は明らかにしえない。しかし、牛奥遺跡の乗る台地上には縄文中期の土器片が多数発掘出来ることから、調査区の周囲に住居址群の存在を想定することは容易であろう。

この牛奥の地を占拠した集団は五領ヶ台期に既に土壇を営んでいるが、重複の状況が後の曾利期と異なるため、同系統の集団の所産と断定することは困難である。しかし、五領ヶ台期の土壇も、土壇の密度が低い地区に位置するにもかかわらず重複が認められることは、同系統の可能性を残すものといえよう。

井戸尻期～曾利Ⅳ期は、半円状の重複群に代表されるように連続と重複が続き、同一集団が牛奥の地に定着していたことをうかがわせる。ただ定住という点では縄文中期社会の評価もふくめて、意見が分かれるところであろう。しかし、移動があったとしても、墓域が継続することから、定期的に牛奥の地に戻ってきたことは確かであろう。

今回の調査で唯一の住居址は、炉址の外縁部の床面に平坦な石を配したもので、敷石住居址に属する例である。この敷石住居址は祭祀遺構と把握されたこともあったが、今日では一般的な住居址とする評価が定着したようである。しかし、本址の場合は墓域内に1軒孤立して存在し、位置的にも特殊な住居と考えざるを得ないようである。さらに、本址は同じ曾利Ⅲ期の土壇に切られることから、利用が長期に及ばないようあり、墓域の外部に住居址群が存在するとすれば、それらと比べても特殊な用途が想定される。また周囲の住居址群が移動して、本址が単独で存在したとすれば、墓域の管理等の特別の使命を帯びた住居址ということになり、通常の集落内の住居址群に占める住居址とは性格を異にしている。

牛奥遺跡の土壇は円形が主体で、極端な長円形や長方形の例は認められなかった。墓域であれば伸展葬の場合は被葬者の身長+△の長軸を



結果となり、重複群相互の密接な関連を窺わせる。とすれば、土壙群は集団全体の変遷を示すとともに、その構成員である家族の姿が各重複群に現れることになるが、現段階では資料的な制約からこれ以上の言及を避けたい。

土壙内部からは若干の土器しか検出されず、重複が墻壁の一部に限られることから、攪乱は内部に及ばなかったとすれば、副葬品と呼べるものは存在しなかったようである。しかし、配石遺構内の礎の間から大形土器片が数個体認められ、供獻行為の存在を推定させる。

5 ま　と　め

縄文文化の研究は時間軸設定の基準となる土器型式の細分を主流に、土器の系統論により空間的な拡張よりも追求されてきた。それと並行して当時の人々の生活の復元を目的に多くの遺物の個別的な研究も進展した。一方、大地に刻まれた遺構については住居址が中心となり、その配列・敷等から集団の状況を推測する集落論が活況を呈してきた。しかし、集落内の住居址相互の同時性を判定するには、これまで細分化されてきた土器型式をもってしても困難であるため、この方面的研究は停滞した観がある。

大規模調査の増加は住居址群の周囲も広く調査対象とすることになり、住居址以外の遺構の内容が充実し、時間に幅をもたせて、住居地域・祭祀地域・墓域に区分するなど、集落を多角的に把握する試みがなされるようになり、土壙も集落の要素としての位置を明確にしてきた。

近年の調査報告書には土壙の記載が随所に見られるが、土壙と集石土壙の区分、また配石遺構とされるものの下部に土壙が存在するもの等様々であり、遺物や住居址ほど詳細に論じられることは少ないようである。最近本県では金生遺跡に代表される縄文後・晚期の祭祀遺構・埋葬遺構の検出があいつぎ、これまでの縄文時代観を一変する面がある。この様な中で当時の人々の生活の一場面の中に葬送という行為を明確に位置づけることは、縄文社会の評価の上でも重要なことは言をまたない。当然、土壙の研究が他の集落の構成要素と有機的に結び付いて進展することは必要であるが、独自の方向性を見出さない限り、土壙は集落の付属施設として、集落論の中に埋没し充分な発展も望めないことになるだろう。

(小林広和・里村晃一)

図 版



牛奧遺跡全影



土 壤 群



第 5 号 土 壤



第 7 号 埋 壶



第10号土 罐



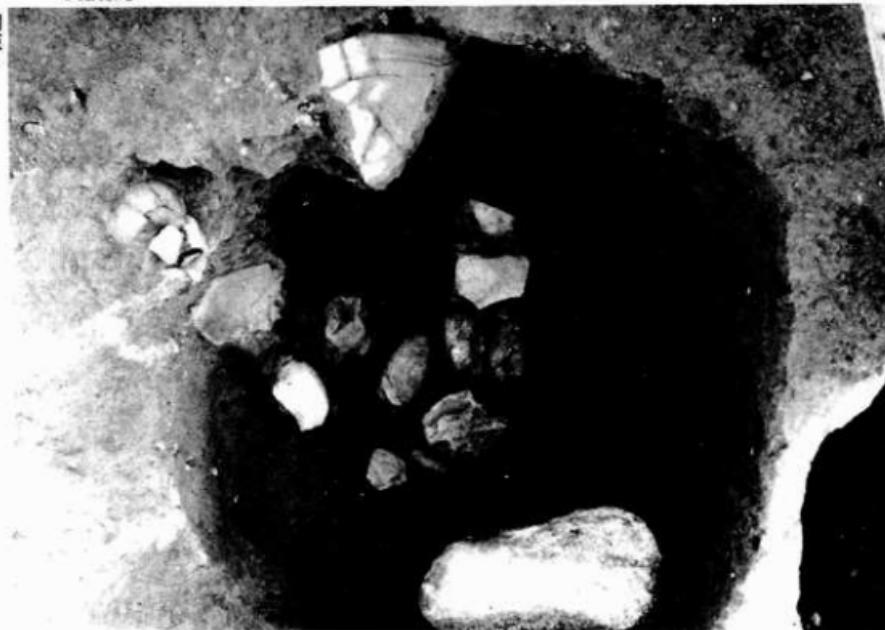
第72号土壤



第81・82号土壤

Plate 6

圖版
6



第84号土墳



第 3 号 土 壤



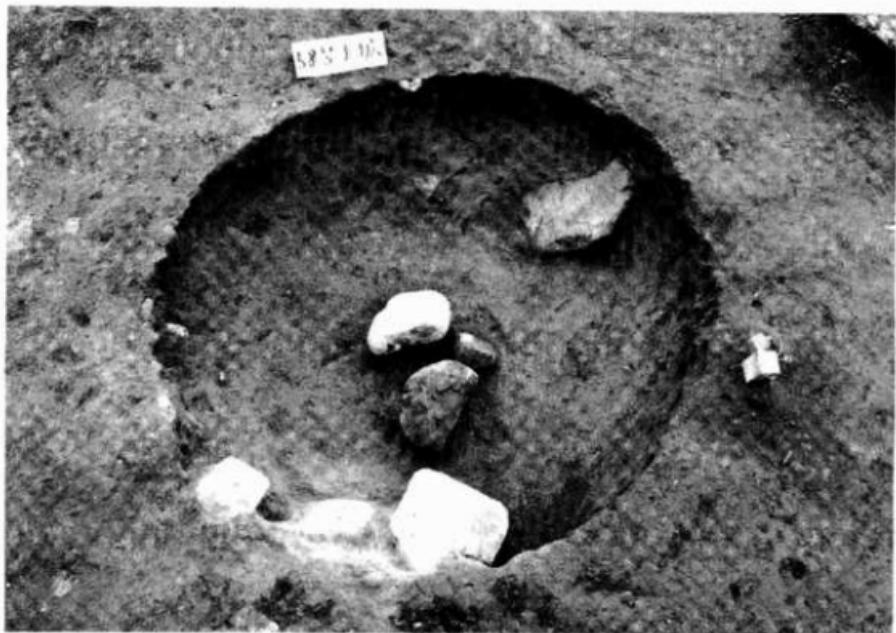
第 29 号 土 壤

Plate. 8

圖版
8



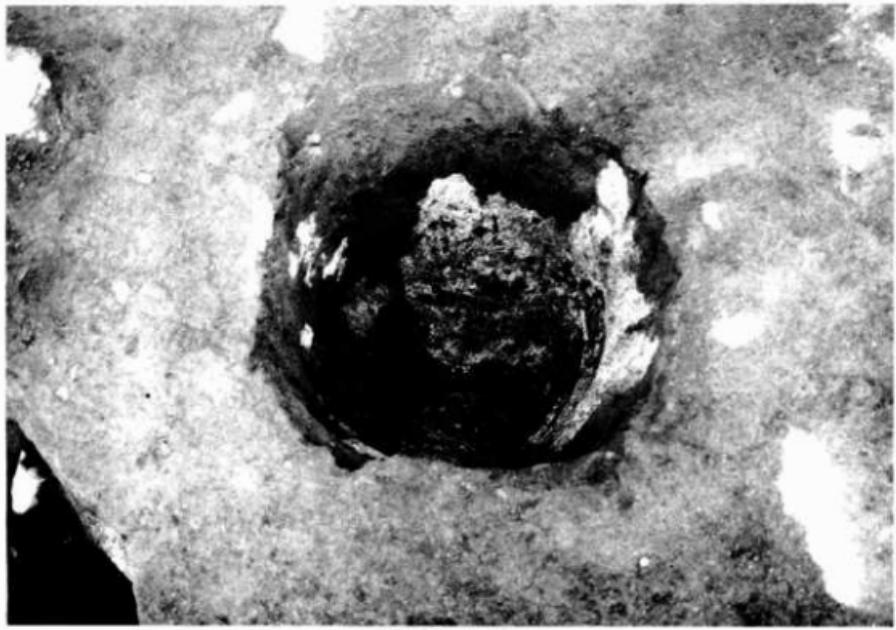
第 41 号 土 塚



第 58 号 土 塚



第 35 号 土 壤



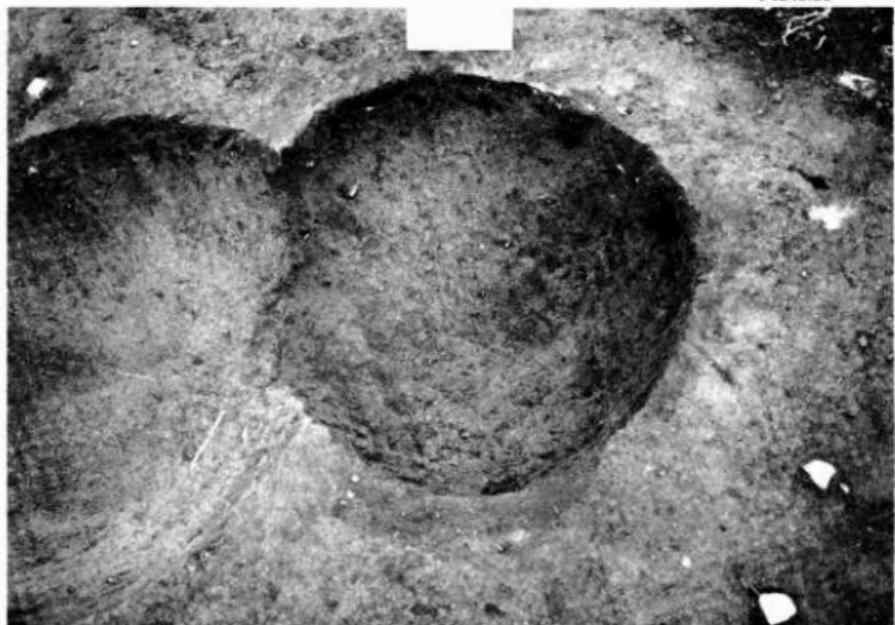
第 45 号 土 壤



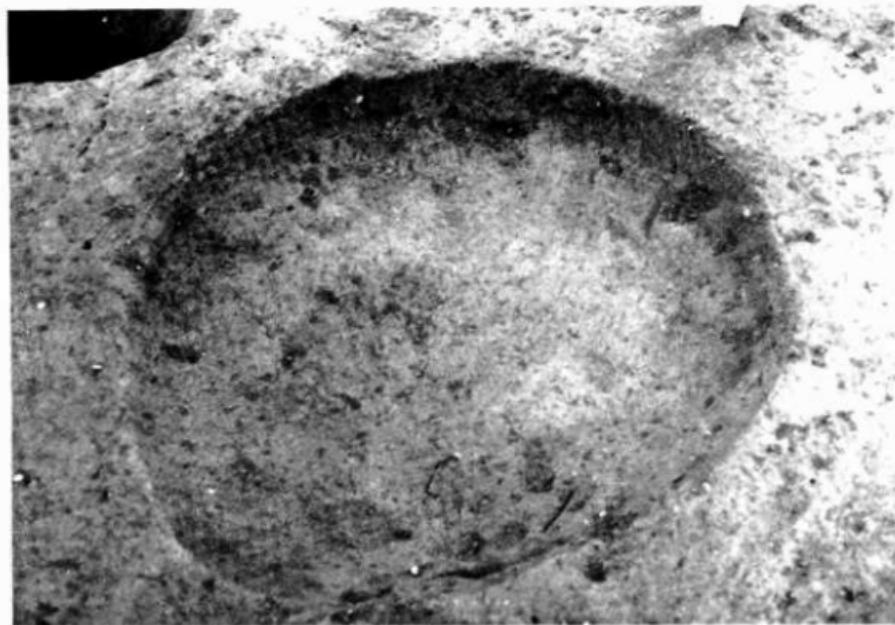
第 75 号 土 壤



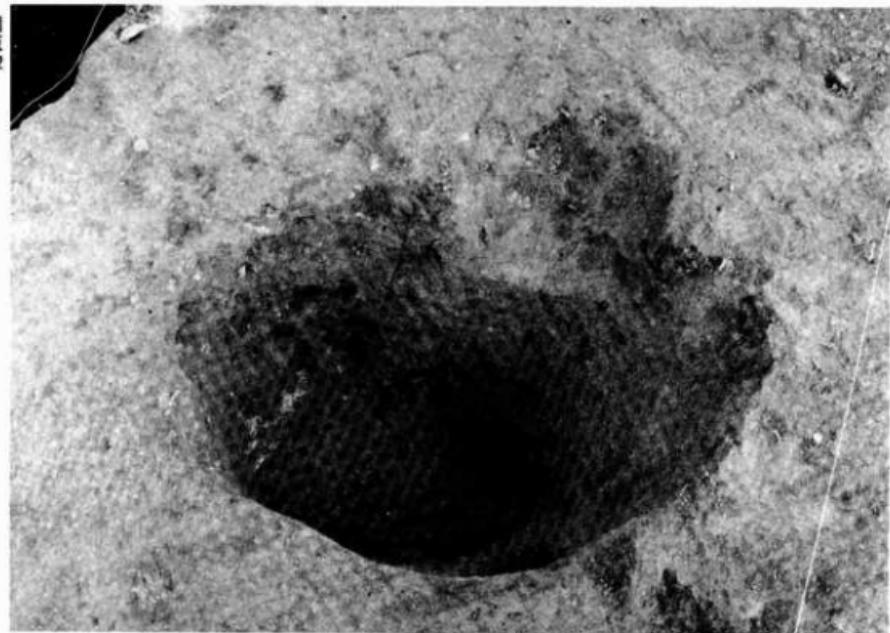
第 47 号 土 壤



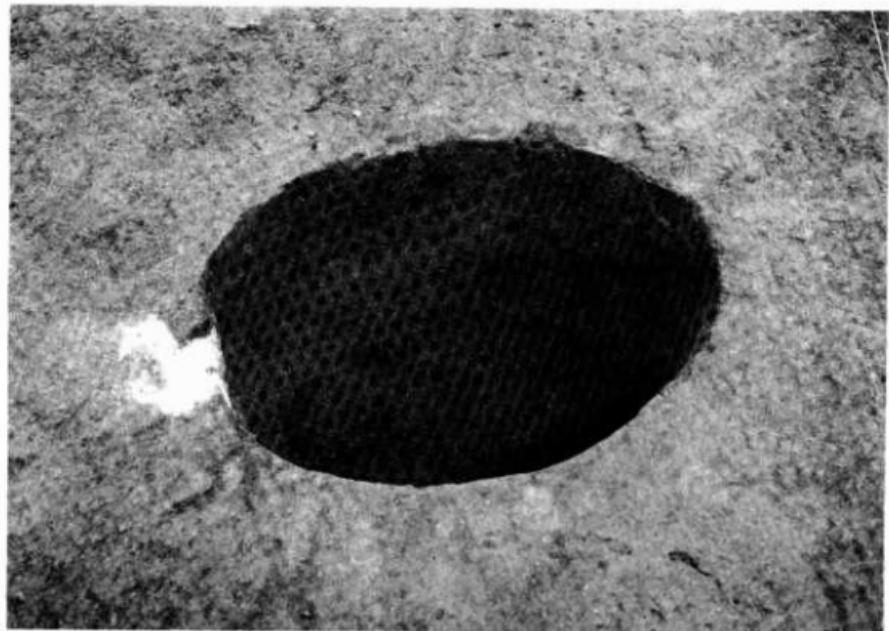
第53号土樣



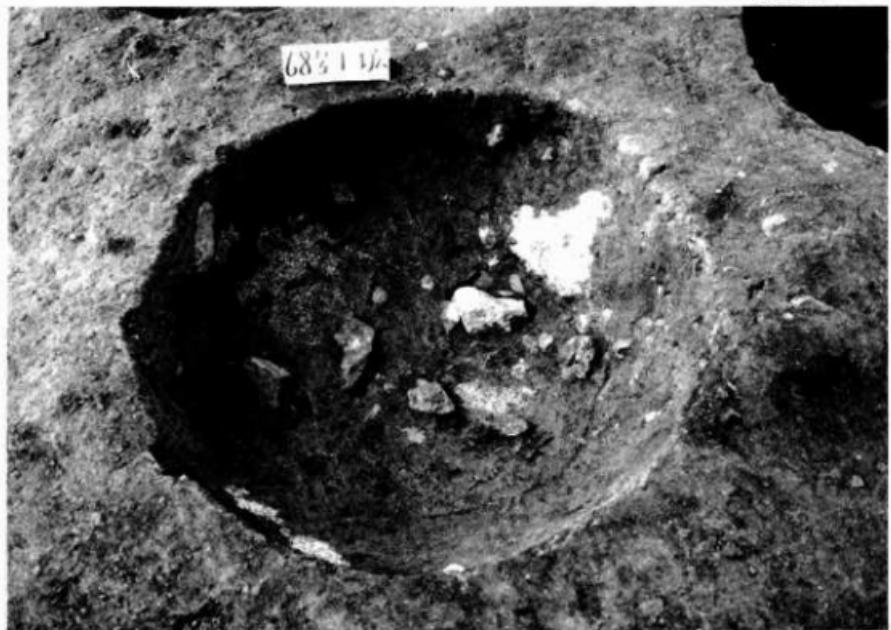
第91号土樣



第30号 土 槽



第22号 土 槽



第 68 号 土 墓



第 85 号 土 墓



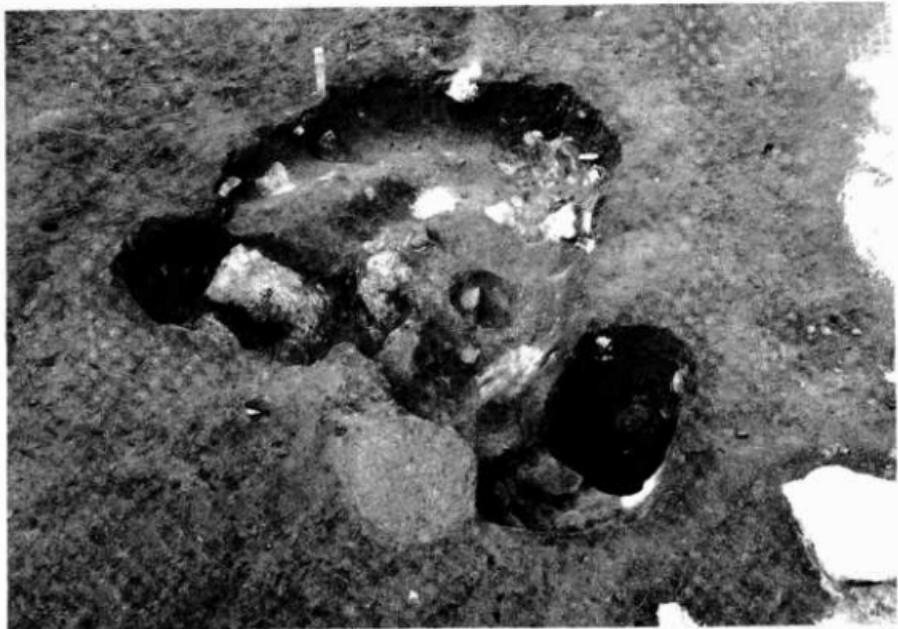
第1号住居址



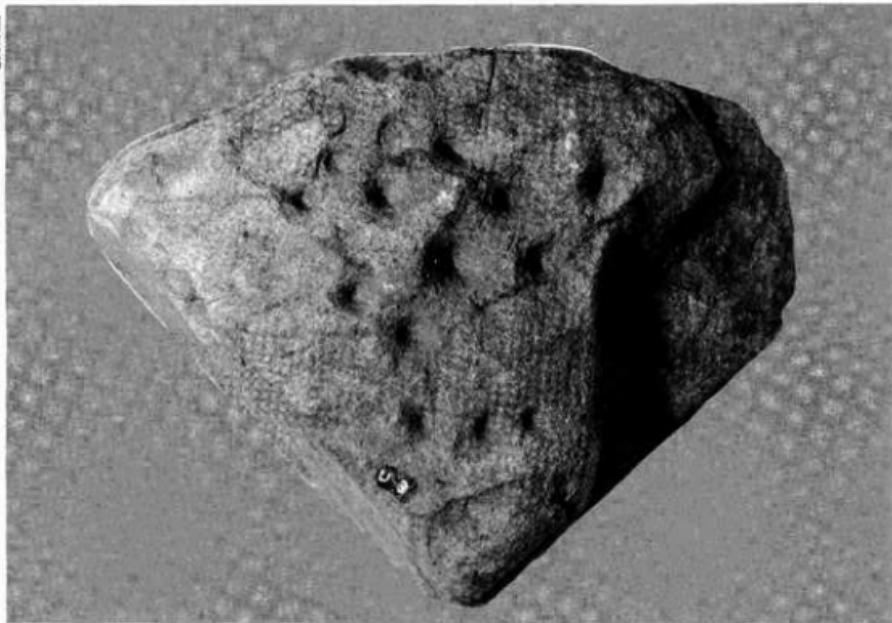
1号住・炉址



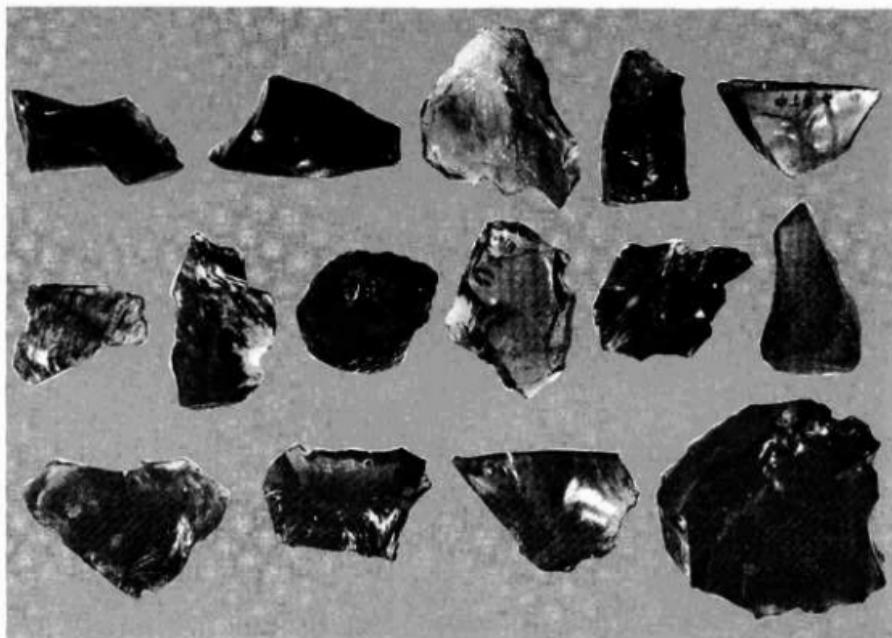
配石遺構



配石遺構（下部土層）



第3号出土・雨垂石



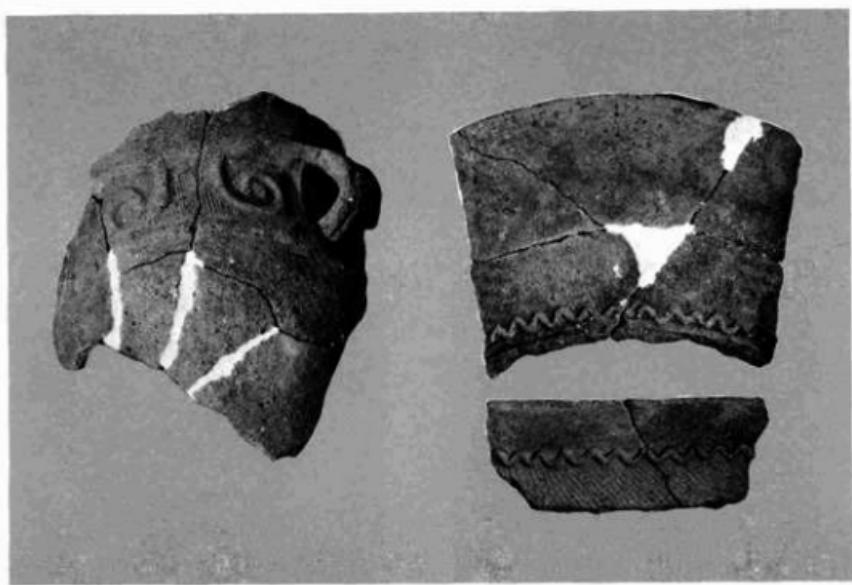
グリッド出土・黒曜石破片



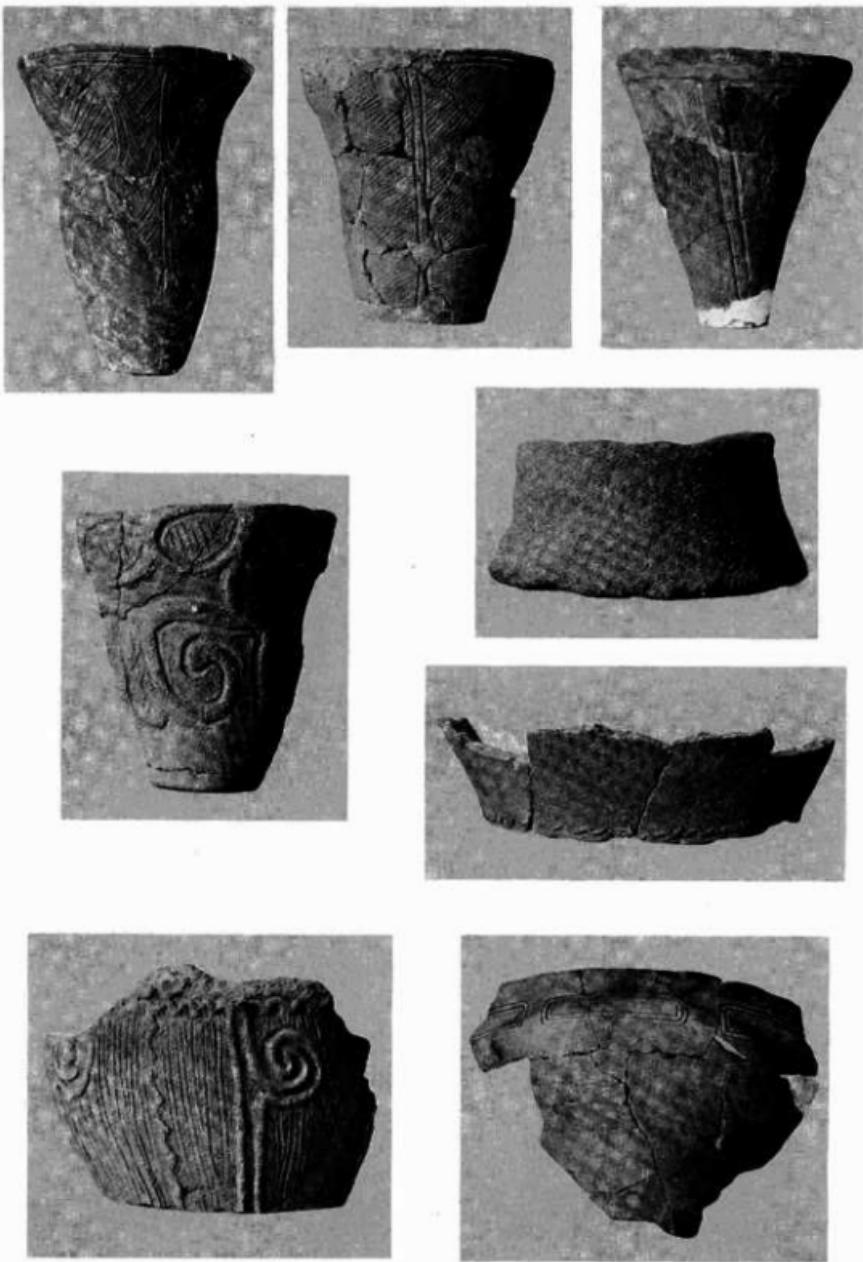
グリッド出土・石器類



上坡内出土·土器



土壤内出土・土器



土壤內出土・土器

1984.3

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第2集

牛奥遺跡調査報告書

印刷 昭和59年3月25日

発行 昭和59年3月25日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 ヨネヤ印刷合資会社

